

筑波大学博士（言語学）学位請求論文

日本語オノマトペの語形成と韻律構造

那須 昭夫

論文概要

日本語オノマトペの語形成と韻律構造

那須 昭夫

本論文は、韻律形態論の枠組みに基づいて日本語オノマトペの語形成と韻律構造の関わりを明らかにしようとするものである。オノマトペの音韻構造については、音と意味の類像的關係を探索する音象徴論の視点から従来多くの研究の蓄積があるが、その大半は主に分節構造に関わる研究で占められている。本論文は、これまでさほど注目されてこなかった韻律的側面に焦点を当て、日本語オノマトペの韻律構造を語形成との関わりにおいて分析しようとするものである。本論文の主眼は次の二点である。

第一は、オノマトペの形態に含まれる韻律範疇の組成を明らかにすることである。本論文では、フットに韻律語の主要部を担う範疇としての位置付けを与えた上で、オノマトペの形態に主要部始端構造および主要部末端構造の二つの構造類型があることを明らかにした。また、末端構造を持つオノマトペに生じる韻律計算の領域を、形態に共起する助詞「と」を含めた構造として定義することで、オノマトペに現われるアクセント・パターンが一般語種に見られるものと同様の無標性を示すことを捉えた。

第二は、オノマトペの語形成を統御する韻律的な条件を明らかにすることである。オノマトペにおいては韻律構造の構築と形態の派生が表裏一体の關係にある。すなわち、韻律構造の生成に関わる音韻的条件が語形成を統御する性質が見られる。このような韻律依存型の語形成現象は多くの言語に観察され、日本語オノマトペもその一員として数えられるが、本論文では重複形・接辞形・強調形の三つのタイプの語形成プロセスを取り上げ、その適格性条件が音節およびモーラの構造に基づいて導き出せることを論じた。

本論文は、以下の6章からなる。

第1章「序論」では、オノマトペの音韻研究における本論文の位置付けを示すとともに、本論文での分析の枠組みについて論じている。位置付けについては、従来のオノマトペ研究が個々の分節音の発音する音象徴的效果の探究に偏りがちであったことを指摘しつつ、韻律構造に着眼する本研究の意義について触れ、韻律構造の特徴を明らかにすることによって多様な形態構造の中から形式的な一般性を見出すことが可能であるとの見通しを提示した。分析の枠組みについては、韻律形態論における主要な韻律範疇の構造と属性について顧みつつ、①音節をその重さの違いによって類型化する音節量の理論が本論文の分析において有効な考え方であること、②緩和階層仮説に基づくフット解析のアルゴリズムによって韻律現象に現われる非対称なパターンが十分に捉えられること、③助詞を含む韻律語の構造が韻律計算の領域として位置付けられることの三点を主張し、本論文の韻律分析が始終一貫してこの三点に基づいて行われることを述べた。

第2章「韻律依存型語形成」では、オノマトペの語形成が韻律構造の構築と表裏一体の關係にあることを論じている。まず語幹について、音節数の異なる語幹の構造が全て二項フット構造として一般化できることを論じた。次に、重複形オノマトペについて論じ、その語形成過程にS重複とP重複の二つの対極的な類型があることを、韻律構造中の主要部フットの位置に着目して明らかにした。また、部分重複形の形成に関与する適格性条件が韻律的な尺度によって規定できる

ことを主張し、重複子の音節数が基体の音節数と同等である場合に限り適格な語形成が起こることを論証した。続いて接辞形オノマトペの韻律構造を分析し、語形成に伴ってアクセント移動が起こること、および、韻律的な主要部が形態の右端に生じることから、このタイプのオノマトペがP重複形と深い類縁性を示すものであることを明らかにし、接辞形とP重複形の語形成上の関係を語彙音韻論的な含意の下で捉えた。最後に強調形オノマトペの構造をめぐり、モーラ(μ)を強調辞の実体として位置付けた上で、強調辞の位置およびその分節上の実現のあり方から、接辞強調形と重複強調形の構造上の違いを明らかにした。

第3章「四拍性と韻律鋳型」では、4割以上のオノマトペが4モーラの長さをなすもので占められている事実に基づき、4モーラの大きさがオノマトペの語形成にとって有意義なサイズとして機能しているとの予測を立てた上で、4つのモーラ節点を含む韻律鋳型を充足することが、語形成の適格性を査定する条件として課されているとする韻律形態論的なモデル(韻律鋳型)を提案し、その妥当性を検証している。その過程で、本論文では次の二点を新たな分析として示している。第一に、韻律鋳型内のモーラ節点を満たす要素には、オノマトペ本体だけでなく、これと共起する助詞「と」も含まれるとの分析を示した(助詞の韻律化)。オノマトペの中には、助詞を義務的に伴うグループとそうでないグループがあり、両者は語のモーラ数に応じた非対称な分布をなしている。オノマトペ本体が4モーラに満たない語では助詞が義務的に必要とされる一方で、オノマトペ本体が4モーラの大きさをなしている場合には助詞が随意的な振る舞いを見せる。助詞の韻律化はこの非対称性に基づいて提案されたしくみであり、4モーラに満たないオノマトペでは韻律鋳型を充足するために助詞が義務的に鋳型内に編入されとの分析を提示した。第二に、接辞形オノマトペの末尾に現れる促音をめぐり、これが音節構造の再編成によってもたらされる韻律的な接尾辞であるとの分析を示した。その際、「グイッと」「ザーッと」など超重音節を形成するオノマトペがあることに着目し、促音が韻律鋳型を充足するための調整要素として機能していることを明らかにした。

第4章「アクセントと韻律構造」では、オノマトペに起こる多様な形態のバリエーションがアクセント構造に基づいて大きく二つの類型に整理できることを論じ、そのいずれの類型においても、韻律制約「非末端性」を満たす形でアクセントが生成されていることを明らかにしている。その二つの類型とは、「ピ|カピカ」のように語頭音節にアクセント核を持つ主要部始端型の構造と、「ピカピカ|ッ」のように語末音節に核を含む主要部末端型の構造である。このうち、末端型のアクセントは日本語全般の韻律構造から見ると有標な性格を有している。一般語種の複合語ならびに外来語のアクセント生成過程では、核の生成位置として語末音節・語末フットを避ける性質(非末端性)が見られるが、「ピカピカ|ッ」などの末端型のオノマトペではこれらの位置にアクセントが生成されているからである。しかし、末端型オノマトペが常に助詞「と」を義務的に伴う点に注目し、この助詞が韻律化された構造(以下「韻律化構造」)がアクセント生成の領域として機能していると考えることにより、オノマトペにおいても非末端性制約に基づくアクセント生成が生じている様子が明らかになる。韻律化構造[ピカピカ|ッと]_{Prwd}では、助詞の軽音節が領域の末尾に位置するため、語末音節・語末フットを避ける位置にアクセント核を伴う構造が一貫して保障されるからである。本論文では、この分析の妥当性を二つのアクセント生成規則(①ー3規則・②音節量依存型依存型規則)を通じて論証した。①については、韻律化構造をアクセント計算領域として位置付けることにより、オノマトペにおいてもー3規則に則って次々末モーラに核が与えられるという無標な振る舞いが起こることを明らかにした。②については、助詞が韻

律化されることにより次末音節の重さに基づくアクセント計算が可能になること、および、この計算によって得られるアクセント型が日本語における無標なパターンを示すものであることを明らかにした。

第5章「強調語形成と音韻構造の有標性」では、重複語をベースに作られる強調形（重複強調形）において、強調辞の挿入される位置が音節構造ならびに分節構造の有標性の相関によって決定されることを論じている。重複強調形は辞典類に立項されにくい形態であるため、本論文では91名の大学生を対象とする調査を行って語形成の実態について把握した。その結果、形態の左端に重音節を作り出す位置に強調辞が挿入されやすいこと（①音節構造）、有声重子音を作り出す位置には強調辞が入りにくいこと（②分節構造）、および、重複形の後部要素のモーラ数が前部要素のモーラ数と同等ないしはそれより少なくなる場合にのみ適格な強調形が作り出されること（③モーラ構造）が明らかになった。このうち③は絶対的な適格性条件として働くが、残りの①②については語幹の分節音の組成により相対的な関係を見せる。本論文では、A群：語幹の子音が全て無声音である構造（「ピカピカ」など）・B群：語幹の子音が全て有声音である構造（「ダブダブ」など）・C群：第1子音が有声音である構造（「ベタベタ」など）・D群：第2子音が有声音である構造（「スベスベ」など）の4つの音配列を取り上げ、①および②の条件の働き方を検証した。このうち、A・B・C群では①②のどちらの条件に従ってもHL-LL型（「ピッカピカ」など）の形態が出力されやすいが、D群だけは特異な振る舞いを見せ、LH-LL型（「スベッスベ」など）の形態が現れやすい。このことから、本論文では二つの条件の間に深刻性の違いがあることを見出し、分節構造の有標性条件の方が音節構造の有標性条件よりも強調辞の位置決定をめぐって支配的な役割を担っていることを明らかにした。

第6章「結論」では、本論文で試みた分析に基づいて日本語オノマトペにおける語形成と韻律構造の相関性を総括するとともに、韻律的側面におけるオノマトペと一般語種の交渉に言及しつつ、今後の研究の課題と方向性を示した。

目次

第1章 序 論	1
1.1 本研究の目的	1
1.2 本研究の位置づけ	2
1.3 本研究の課題と構成	3
1.3.1 韻律依存型語形成	3
1.3.2 韻律鋳型	5
1.3.3 アクセント構造	6
1.3.4 音節構造	8
1.4 分析の枠組み	9
1.4.1 音節とモーラ	10
1.4.2 フット	11
1.4.3 韻律語	16
第2章 韻律依存型語形成	18
2.1 はじめに	18
2.2 語幹の構造	19
2.2.1 音節構造	19
2.2.2 韻律構造	20
2.2.3 基底アクセント	22
2.3 重複形オノマトペ	24
2.3.1 アクセントの対極性	25
2.3.2 語形成上の対極性	26
2.3.3 S 重複形と P 重複形	29
2.3.4 部分重複形	31
2.3.5 まとめ	35
2.4 接辞形オノマトペ	35
2.4.1 構造	36
2.4.2 アクセント	37

2.4.3	派生関係	39
2.4.4	まとめ	41
2.5	強調形オノマトペ	42
2.5.1	強調辞	42
2.5.2	接辞強調形	44
2.5.3	重複強調形	45
2.5.4	まとめ	47
2.6	本章のまとめ	48
第3章	四拍性と韻律鋳型	49
3.1	はじめに	49
3.2	四拍性	51
3.2.1	四拍構造のオノマトペ	51
3.2.2	助詞の韻律化	53
3.3	鋳型分析	55
3.3.1	四拍鋳型	55
3.3.2	鋳型の充足	56
3.3.3	接辞形の派生と助詞の韻律化	58
3.3.4	促音形の派生過程	59
3.4	非派生形と四拍鋳型	62
3.4.1	促音添加現象	62
3.4.2	動機としての四拍性	64
3.5	本章のまとめ	65
第4章	アクセントと韻律構造	67
4.1	はじめに	67
4.1.1	問題の所在	67
4.1.2	本章の目的と構成	68
4.2	オノマトペのアクセント	69
4.2.1	アクセントの型	69
4.2.2	アクセントの記述をめぐって	71

4.3	先行研究の検証	73
4.3.1	Hamano (1998)	73
4.3.2	検証	75
4.3.3	フット解析の方針	79
4.4	末端性の問題	80
4.4.1	語形成と韻律構造	81
4.4.2	末端構造の有標性	84
4.4.3	「特殊性」への疑問	87
4.4.4	助詞の韻律化と非末端性	89
4.5	無標型の生成	93
4.5.1	－3規則	93
4.5.2	助詞の韻律化と音節量	97
4.6	本章のまとめ	99
第5章	強調語形成と音韻構造の有標性	101
5.1	はじめに	101
5.2	重複強調形	103
5.2.1	強調辞の種類	103
5.2.2	強調辞の位置	105
5.3	調査	108
5.3.1	調査方法	108
5.3.2	調査結果	110
5.3.3	分析	111
5.3.4	記述的一般化	113
5.4	有標構造の特性	114
5.4.1	重さの条件	114
5.4.2	音節構造の有標性	116
5.4.3	分節構造の有標性	117
5.4.4	有標性の計算	119
5.5	本章のまとめ	122

第6章 結 論	124
6.1 本研究のまとめ	124
6.2 今後の課題	127
注 釈	129
参考文献	136

第 1 章

序 論

1.1 本研究の目的

本研究は、日本語オノマトペに起こる各種の語形成過程の分析を通じて、オノマトペの韻律的特性の諸相を明らかにすることを目的としている。本研究で「オノマトペ (onomatopoeia)」と総称するのは音象徴性・類像性を第一義的機能とする語彙集合のことである。厳密には、表象機能の性質に応じて「擬態語」・「擬容語」・「擬声語」・「擬音語」等といった種々の概念上の区別があるが、本研究では用語上の煩雑さを避けるために「オノマトペ」という統一の呼称を用いる*¹。

一般語種とは異なり、音象徴のことばであるオノマトペは形式と意味の間に有契的な関係を生じる語種であるとされる。オノマトペの音韻構造に含まれる一つ一つの要素が何らかの類像的意味と必然的な結びつきを含むとの観察は、オノマトペ研究においてはごく一般的なものだと言ってよい。また、オノマトペを対象とした音韻研究は音韻論と言うよりもむしろ「音象徴論」と呼ぶにふさわしい場合が多く、そのために、オノマトペの音韻構造に関する研究に対しては音韻形式が発揮する音象徴機能の解明が暗黙のうちに期待されがちである。しかしながら、オノマトペの音韻形式が常に音象徴機能のみによって司られているとも限らず、類像性や音象徴性とは別の、形式的側面に観察される一般性がオノマトペの音韻構造に備わっているのも確かなことである。その一般性の姿を音象徴論とは独立の観点から——すなわち形式言語学的な観点から解明する作業も決して無意味なわけではない。

本研究の基本的な姿勢は、音象徴の「機能」の側面からオノマトペの特性を探るのではなく、音韻構造に現われる「形式」的一般性を明らかにしようとするものである。平たく

述べると、音象徴機能の付帯ゆえにオノマトペの音韻構造を特殊視するのではなく、あくまでも一般語種と同じ観察の土俵に載せて、その形式的な側面に現われる性質を明らかにするというのが本研究の目的である。

1.2 本研究の位置づけ

オノマトペ研究は、音韻論・形態論・統語論・意味論など言語学の主要な領域のみならず、認知科学をはじめとする学際的領域においても試みられている。認知科学的手法による研究では、オノマトペの言語形式そのものよりも、言語形式にまつわる諸要素が人間の認知構造にどのように関わるかが興味の焦点となる。このテーマの下ではオノマトペ研究は単なる言語の研究という枠を超え、感覚や認知といった人間の情知活動全般に対する研究へと広がりを見せる。特に近年では、調音器官のダイナミズムが類像的イメージをもたらす一因として働くことが明らかにされるなど (Oda 2000)、従来の「ソシユールの恣意性」の仮説を積極的に再検証する試みがなされつつある*²。

一方、言語形式の枠内に絞ってオノマトペの特性を探るタイプの研究は、記述的立場・理論的立場の違いを問わず伝統的に言語学の一部として試みられてきたものである。日本語のオノマトペに関しては、古くは小林 (1935) による形態分類がよく知られた研究事例であるが、近年においても Hamano (1986, 1998) や田守・スコウラップ (1999) に見るようにオノマトペの言語構造に対する総合的な研究は精度を増しつつ試みられている。特に Hamano (1986, 1998) では日本語オノマトペの分節構造と音象徴機能の関わりが具体的事例を通じて幅広く検証されており、総合的な記述の成果として見るべき点が多い。本研究においても記述的な事実の多くは Hamano の研究成果を参考にしている。また、田守・スコウラップ (1999) は日英語のオノマトペの対照分析を試みており、音韻的事実から始まって統語構造や意味に至るまで両言語のオノマトペの構造が幅広く比較・対照されている。このほか、西尾 (1988) および大坪 (1989) など語彙論の立場からオノマトペの構造を探った研究も見られるなど、オノマトペ研究の広がり是一般語種に対する研究と比べて決して遜色のない状況にある。

こうした経緯の中にあって、本研究はいわば「狭義のオノマトペ研究」とも言うべき性格を備えている。従来の研究の中にはオノマトペのあらゆる側面（音韻・形態・統語・意味・語彙など）をまとめて検証するタイプのものが多いが、本研究では分析の対象をそう

した多様な側面に広げることにはせず、専ら音韻構造のみに的を絞った上で考察を進める。

「狭義の」という限定を与えたのはこのためである。さらに本研究では、オノマトペの音韻構造の中でもとりわけ韻律的側面に焦点を当てて考察を進める。言語の音韻構造を構成する要素には分節 (segment) と韻律 (prosody) の二つの範疇があるが、従来のオノマトペ研究の全般的な傾向として指摘できるのは、その興味の対象が主に分節論に偏在しがちだったことである。すなわち個々の子音・母音が発揮する音象徴的效果に注目が集まりがちである一方で、韻律構造に関する研究はそれほど充実しているとは言えない状況にあるわけだが、本研究では従来考察が手薄になりがちであったオノマトペの韻律構造に対して検証を試み、そこに現われる形式的・一般性の諸相を明らかにしてゆく。

1.3 本研究の課題と構成

韻律構造に対する検証を主目的に据える点で本研究は「オノマトペの韻律論」として位置づけることができるが、一口に「韻律論」と言ってもその内実には様々な相が含まれている。そもそも韻律構造自体がアクセント・リズム・音韻的長さなど各種の側面から構成されている以上、どの側面に対してどのようなアプローチを加えるのか明確にしない限り具体的な狙いは見えてこない。そこで本節では、考察の対象とする韻律現象ならびにその性質について概略的に述べ、分析の着眼点ならびに課題を明らかにしつつ本研究の構成を示すことにしたい。本研究で扱う課題は、①オノマトペに生じる韻律依存型語形成の特性・②鋳型的な韻律パターンを持つ語形成の分析・③オノマトペのアクセント構造に見られる一般性の解明・④語形成と音節構造の相関性の4点である。以下、順を追って各課題の概要について述べる。

1.3.1 韻律依存型語形成 (第2章)

言語の韻律の具体的な姿はアクセントやリズムなど表層に現われる現象を通じて観察することができるが、これらの具体的現象の背景には、**モーラ (mora)・音節 (syllable)・フット (foot)・韻律語 (prosodic word)** など各種の**韻律範疇**から構成される抽象的な構造が存在する。本研究で「韻律構造」と呼ぶのはこれら四種類の韻律範疇からなる構造のことである。

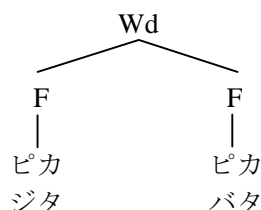
オノマトペの場合、韻律構造に対して考察を施すことは即ち語形成の特性を追究するこ

とと表裏一体の意義を持つ。なぜなら、オノマトペでは韻律範疇が語形成過程において直接的に重要な役割を果たす性質が見られるからである。韻律構造を基軸として生じる語形成は McCarthy and Prince (1986) による韻律形態論 (Prosodic Morphology) の枠組みを通じて盛んに研究が進められてきた現象であるが、オノマトペの語形成もそうした韻律依存型の性格を色濃く備えている。その一例として、重複形オノマトペならびに並列形オノマトペの関係について見ておこう。

- (1) a. 重複形 ピカピカ, コロコロ, ガタガタ, ポンポン, スイスイ, ザーザー
 b. 並列形 ジタバタ, カサコソ, ガタピシ, スタコラ, チョコマカ, ブツクサ

形態論的には、重複形と並列形はそれぞれ異なる類型に属するオノマトペとして分析される。重複形は「語幹を繰り返した形」であり、並列形は「異なる語幹を組み合わせた形」とであるといった具合に、それぞれの形態構造に対して別個の記述が成り立つからである。しかしながら、ある特定の構造に着目することにより、重複形と並列形が基本的に同一の原理から生成されるオノマトペであることを明らかにすることができる。その特定の構造に相当するのが(2)に示す二叉的な韻律構造である。

(2) F+F



重複形も並列形も、形態論的な構造の違いこそあれ韻律的には全く同一の構造を共有しているのが分かる。すなわち、ともにフットの連鎖からなる二叉的構造「F+F」によって生成されているのである。このためどちらの形に関しても「フット構造の複写」という共通の韻律的な生成規則を設けておくだけで、その語形成の特性を簡潔かつ十分に把握することができる。

本研究の第2章では、各種オノマトペに起こる韻律依存型語形成を分析し、オノマトペの韻律構造に見られる一般性ならびに語形成を統御する韻律的な原理を明らかにする。オノマトペの形態には実に多種多様なバリエーションが混在しており、一見したところそれぞれの形態は互いに類縁性を持たないかのようにも思えるが、上に述べたように韻律構造

を軸に語形成のあり方を分析することにより、個別的なバリエーションの違いを越えた一般的な共通性を抽出することが可能になる。

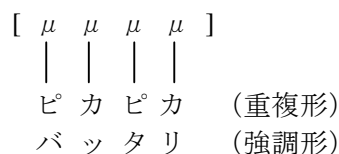
1.3.2 韻律鋳型（第3章）

オノマトペの語形成に現われる韻律依存型の性格は、時として特定の鋳型的な構造によって一般化できることがある。あたかも鋳型によって金属製品を鋳造するかのように、一定の韻律構造から多様な形態が生成されるケースが見られるのである。たとえば以下に挙げる重複形オノマトペと強調形オノマトペは、表面的な形式こそ異なっているものの、ともに4つのモーラを内包する点で共通の性格を備えている。

- (3) a. 重複形 ピカピカ, コロコロ, ポンポン, スイスイ, ザーザー
b. 強調形 バッター, ポッカー, ゲッソリ, ポッキリ, ガッチリ

那須（1995）は、この「4モーラ」というサイズがオノマトペの語形成にとって有意味な特徴を示すサイズであるとし、4モーラから構成される鋳型が形態の適格性を統御する条件として働いていることを明らかにしている。(4)に図示するように、重複形および強調形はこの鋳型を充足する形で形成されていると考えられる。

(4) 韻律鋳型



ただし、オノマトペの形態の中には語形成のプロセスのみではこの鋳型を満たさないものも存在する。接辞形オノマトペ(5)などはその一例である。

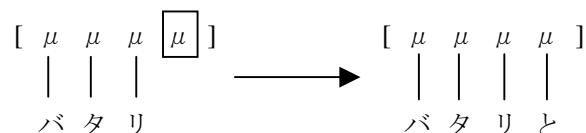
(5) 接辞形

ピカリ, グサリ, ポキン, ドスン, パチッ, キラッ

接辞形は3モーラの大きさしか持たないので、一見したところ4モーラの鋳型とは無縁なオノマトペであるかのように思われる。しかしながら、接辞形にはその他のオノマトペには見られない注目すべき性質が備わっている。接辞形の場合、常に助詞「と」を義務的に

伴うという特徴が見られるのである（田守 1983）。たとえば、強調形を用いた「バツタリ倒れる。」が可能な表現であるのに対して接辞形を用いた「*バツタリ倒れる。」はなぜか不自然であり、適格な表現であるためには常に「バツタリと倒れる」といった具合に助詞「と」が義務的に共起しなければならない。そこで、先ほど示した4モーラからなる韻律鋳型を導入することにより、この助詞の義務性に対して体系的な説明を与えることができる。接辞形オノマトペはそのままの形では鋳型の中に空所を生じてしまうが（=6a），その空所は助詞を組み入れることにより補充される（=6b）。

(6) 空所の補充



接辞形において助詞「と」が義務的に共起するのは、4モーラのサイズを満たすべく鋳型の中に助詞が組み込まれるためだと考えられる。すなわち、鋳型のモデルを設けることにより接辞形に伴う助詞の義務性に対して韻律的な角度から分析を施すことが可能になるのである。

本研究の第3章では、上に述べた4モーラの鋳型構造に基づいてオノマトペの語形成過程を分析しつつ、異なるタイプの形態の生成過程を一律的な枠組みで捉える上で、こうした鋳型的な韻律構造が有効な分析装置として機能していることを明らかにする。

1.3.3 アクセント構造（第4章）

オノマトペのアクセントについてはこれまでに一通りの記述が試みられている。特に Hamano (1986) では、句レベルのアクセントも対象に含めたかなり詳細な記述が見られる。一方、韻律論的な観点からアクセントの生成過程について論じた研究は記述研究の成果に比べると乏しい状態にあり、管見の限りわずかに Hamano (1998) による分析事例を見るに留まる。

Hamano (1998) の分析に基づいてオノマトペのアクセント・パターンを概観してみると、そこに興味深い問題が含まれていることに気づく。起伏式のアクセントを示すオノマトペには、以下に示すような対極的なアクセント・パターン（語頭型：語末型）が現われる。

(7) アクセント

- a. 語頭型：ピ|カピカ，ポ|ンポン，ス|イスイ，ザ|ーザー，サ|ッサ
 b. 語末型：ピカ|ッ，ピカ|ン，ピカピカ|ッ，ピピピ|ッ，ピピピ|ン

このうち(7b)のパターンは韻律構造の「有標性」の観点から見た場合極めて異例な性質を含んでいる。Poser (1990) および Kubozono (1997) が明らかにしているように、日本語のアクセント生成過程では語末に位置するフットに核を生成するアクセント・パターン(末端型)は有標性が高く、デフォルトの形式*³においてはこの位置を避ける形で核が生成される。しかしながら、(7b)のオノマトペではむしろ積極的に語末のフットに核が生成されている。

(8) 末端型 (() はフット，#は語末を表す。)

ピカ ッ	pi (ka Q)#
ピカ ン	pi (ka N)#
ピカピカ ッ	pi (kapi)(ka Q)#
ピピピ ッ	(pipi)(pi Q)#
ピピピ ン	(pipi)(pi N)#

この型は、一般語種のアクセントに広く現われる非末端性 (Nonfinality) の特徴に真っ向から反する有標な韻律構造を含んでいるが、そこで問題になるのが、なぜオノマトペにおいてはこうした有標なアクセント・パターンが生成されるのかということである。

本研究の第4章では、この問題を取り上げてオノマトペのアクセント構造の特徴について考察するが、その際に考慮すべきは、(8)に示した表面的な事実だけをもとにオノマトペの韻律構造を「有標」と即断する解釈が必ずしも妥当とは言えないということである。観察の幅を広げてみると、(8)に挙げたオノマトペは全て助詞「と」を義務的に伴うタイプのオノマトペであることが明らかになるが、この助詞を含めた構造を作用域としてアクセントの計算が行われていると考えると、最前の解釈とは正反対の結論——すなわち、(8)のオノマトペのアクセントにむしろ無標な特徴が備わっている可能性が見えてくる。助詞を含めた構造に対してフット解析を施すと、以下に示すように核を含むフットが非語末位置に生じている様子を見て取ることができる。

(9) 助詞の韻律化

ピカ ツと	pi (ka Q)to#
ピカ ンと	pi (ka N)to#
ピカピカ ツと	pi (kapi)(ka Q)to#
ピピピ ツと	(pipi)(pi Q)to#
ピピピ ンと	(pipi)(pi N)to#

助詞を韻律計算の作用域に組み入れるとの考え方は、前節で述べた鋳型分析において既に示されている。鋳型分析では、(6)に示したように助詞が鋳型に組み入れられることによって適格な4モーラのサイズが構成されることを見たが、これとよく似た作用はアクセント計算においても生じていると考えられる。つまり、語形成においてもアクセントの生成過程においても、義務的に生じる助詞はオノマトペと同一の韻律領域に編入されていると考えられるのである。本研究ではこの振る舞いを「助詞の韻律化」と呼ぶ。助詞の韻律化の概念は本研究における極めて重要な主張の一つであるが、第4章ではこの概念に基づく韻律分析が妥当な帰結を導くものであることを詳しく論じる。

1.3.4 音節構造 (第5章)

多くの言語において音節は韻律計算の中核的な素子として振る舞う。日本語にあっても音節の役割の重要性は認識されており、たとえば外来語アクセントに生じつつある新たなパターン*⁴の生成過程が音節の重さ（音節量）に基づく規則によって統御されていることなどがこれまでに明らかにされている（Kubozono 1996, 窪田・太田 1998）。

音節の特性はアクセント現象のみならず語形成過程においても重要な地位を占める。新たな語が作り出される時に生じる音節の配列には一定の傾向が見られ、日本語の場合、重音節が軽音節の左側に生じる構造（HL 構造）が無標なパターンとして現われやすい一方で、軽音節の右側に重音節が生じる構造（LH 構造）は有標なパターンであると考えられている。実際、短縮語や倒位語の形成過程においては LH 構造を含む形態が生成されないことが明らかにされている（Itô 1990, Itô, Kitagawa and Mester 1996, Kubozono 2000）。

語形成と音節構造の間に生じる上述の関係はオノマトペにおいても同様に観察される。本研究で着目するのは、重複形オノマトペに生じる強調化のプロセスにおいてどのような音節構造が好まれているかという点である。重複形オノマトペの強調形としては(10)に挙

げる二通りのパターンが可能である。

(10) 重複強調形

a. ピッカピカ

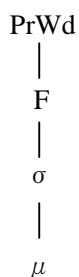
b. ピカッピカ

オノマトペの場合、このどちらの形も適格な性質を持つ。しかしながら、「現われやすさ」という点では両者のステイタスは異なることが予測される。なぜなら、(10a)が語頭に無標な HL 構造（「ピッ-カ」）を含む一方で、(10b)は有標な LH 構造（「ピ-カッ」）を含むといった具合に、両者の音節構造が微妙に異なるからである。語形成と音節構造の関係を追究した先行研究の知見に基づけば、同じ強調形態であっても(10a)のほうが(10b)よりも優位なパターンであることが予測されるが、本研究の第5章では語彙調査を通じてこの予測の妥当性を検証する。

1.4 分析の枠組み

この節では、韻律構造を構成する範疇の特性および範疇相互の関係を中心に、本研究の韻律分析を支える枠組みについて述べる。モーラ・音節・フット・韻律語の四つの範疇は互いに階層関係(11)をなすと考えられているが (Selkirk 1980, 1984, 1986, McCarthy and Prince 1986, Nespor and Vogel 1986, Hayes 1989, ほか), 階層性のあり方をめぐってこれまでに二通りの提案がある。

(11) 韻律階層



ひとつは当該の範疇が常に直下の範疇を直接支配する構造のみを想定する厳密階層仮説 (Strict Layer Hypothesis : Selkirk 1984, Nespor and Vogel 1986) であり、もうひとつは階層の厳密性を部分的に緩和した緩和階層仮説 (Weak Layer Hypothesis : Prince 1990, Itô 1990,

Itô and Mester 1992) と呼ばれる考え方である。この二つの立場の違いが問題になるのは主にフット解析の方略を決定する場合においてである。たとえば、奇数個の要素（音節ないしはモーラ）を二項的なフットに解析する場合にはいずれの理論を採用するかによって異なる方略がとられることになる。

- (12) a. 厳密階層仮説 $\sigma \sigma \sigma \rightarrow [(\sigma \sigma)_F(\sigma)_F]_{PrWd}$
 b. 緩和階層仮説 $\sigma \sigma \sigma \rightarrow [(\sigma \sigma)_F \sigma]_{PrWd}$

この場合、二項構造をなせない右端の軽音節の処理が問題で、厳密階層仮説ではこれを単項のフット（変性フット *degenerate foot*）に解析することによって階層の厳密性を維持する考え方が示されている一方、二項構造のフットのみを認める緩和階層仮説では右端のフットをあえて解析しないことにより、階層の厳密性を部分的に放棄しながらもフットの二項性を厳密に維持する考え方が提案されている。本研究でこの点が重要な争点となるのは主に第4章でのアクセント計算に関する議論においてであるが、それに先駆けて、この節では上述のフット解析の方略も含め、本研究における韻律分析の基本的な視点について範疇別に論じる。

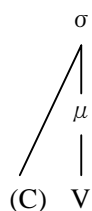
1.4.1 音節とモーラ

音節構造の類型化の方法には、末尾子音の有無に基づいて音節を分類する方法(13)と音節量（*syllable quantity*）の違いに基づいて音節を分類する方法(14)の二通りがあるが、本研究ではこのうち後者の類型を重点的に取り上げる。

- (13) a. 開音節 CV, CVV
 b. 閉音節 CVC

(14) 音節量

a. 軽音節



b. 重音節



音節をその重さによって軽音節と重音節に二分して捉えることはオノマトペの韻律構造を
 探る上で重要な意義を持つ。たとえば語幹の構造類型を記述する場合、音節量に基づく記
 述では自然類の抽出が可能になる一方、末尾子音の有無に基づく記述では自然類が構成し
 にくいという違いが見られる。(15)はオノマトペの語幹に現われる分節構造のタイプを示
 したものであるが、ここに挙げた三種類の分節構造から音節構造の類型を求める作業を通
 じて、(13)と(14)の意味合いの違いを見ておきたい。

(15) 語幹

- a. CVC 構造 /poN/ (CVN), /paQ/ (CVQ)
- b. CVV 構造 /zaa/ (CV_iV_i), /sui/ (CV_iV_j)
- c. CVCV 構造 /pika/ (CVCV)

それぞれの音節に末尾子音が含まれるか否かを基準として上挙の構造を分類すると(16a)
 が得られる。他方、各音節の重さを基準に分類したのが(16b)である。

(16) 分類 (.,は音節境界)

- a. i) CVC.
- b. i) CVC., CVV.
- ii) CVV., CV.CV.
- ii) CV.CV.

これを見ると、(16b)の分類において1音節の語幹と2音節の語幹の区別が明瞭に示されて
 いる一方、(16a)の分類では末尾子音の無いグループ ii)において両者が混在する結果となっ
 ているのが分かる。音節数の違いによって語幹のタイプを分けた(16b)は類型の自然さとい
 う点で合理的であることに加え、1音節語幹と2音節語幹の性質の違い*⁵を記述する上で
 も有用な分類だと言える。

なお、本研究では McCarthy and Prince (1986) および Hayes (1989) で述べられている
 モーラ理論に従って音節量の算定を行い、頭子音以外の音節構成要素は全てモーラの資格
 を持つものとする*⁶。

1.4.2 フット

フットは韻律語の主要部となる範疇で、その構造には言語によっていくつかの類型が認
 められるが (Hayes 1995)、日本語では二つのモーラからなる構造が一つのフットを形成す

と考えられている (Poser 1984a,b, 1990, Kubozono 1989, Itô 1990, Mester 1990, Tateishi 1989, Itô, Kitagawa and Mester 1996)。本研究ではこの構造を二項フット (bimoraic foot) と呼ぶ。

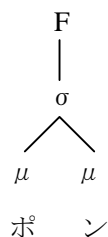
(17) 二項フット

$$(\mu \mu)_F$$

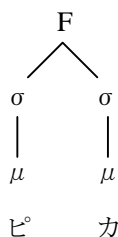
音節と同様、フットもまた日本語オノマトペの分析には欠かせない韻律範疇である。先ほど(16b)において、オノマトペの語幹が構成音節の数により二種類の自然類に分けられることを見たが、その二種類は音節構造において異なる性質を示しつつも、フットのレベルでは共通の構造を持つ。どちらのタイプの語幹もモーラを二つ含むため、単一の二項フットを構成する性質がある (Hamano 1998)。

(18) オノマトペの語幹

a. 1 音節語幹



b. 2 音節語幹



日本語の語形成の記述に二項フット概念が必要であることは, Poser (1990) 以降 Itô (1990), Mester (1990), Itô, Kitagawa and Mester (1996) などにより明らかにされてきた。たとえば外来語に生じる短縮語形成では, 「スト (ライキ)」「アマ (チュア)」「オペ (レーション)」「チョコ (レート)」のように二項フットを一つの単位とする切り取り (truncation) が起こりやすいことが指摘されている*⁷。また, アクセントの生成過程でも二項フットは重要な役割を果たしている。外来語や複合語のアクセントでは語末から数えて三つ目のモーラに核が生成されるパターンが最も無標なあり方であるが (McCawley 1968, 1978), Poser (1990) および Kubozono (1997) は, このパターンの生成にあたって語末のフットにアクセント核が置かれないとする一般的な原則が働いていることを明らかにしている。Poser と Kubozono はこの原則をそれぞれ「韻律外性 (extrametricality)」ないしは「非末端性 (Nonfinality)」といった異なる概念で一般化しているが, 枠組みの違いこそあれ, いずれ

の分析においても末端に位置する二項フットがアクセント核の着地点になり得ないことを示している点では共通の洞察である。

ところで、音韻構造をフットに解析する際にはいくつかのパラメータが関わってくる。わけでも重要なのは方向性のパラメータである。たとえば/ $\mu \mu \mu \mu \mu$ /のような奇数モーラから構成される音韻構造が与えられた場合、これを「左から右へ」フットに解析した結果と「右から左へ」解析した場合とでは得られる構造が次のように異なる*⁸。

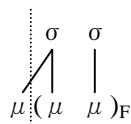
(19) 解析方向

- a. 左から右へ $(\mu \mu)(\mu \mu) \mu$
- b. 右から左へ $\mu (\mu \mu)(\mu \mu)$

現在のところ、日本語のフット解析の方向性をどちらか一方に特定する決定的な証拠というものは示されていないが、アクセント計算のアルゴリズムから推測するに、韻律計算の過程では「右から左へ」という方向(19b)で解析が生じている可能性が高いと考えられる(Poser 1990, Kubozono 1997) *⁹。また Hamano (1998) はオノマトペにおいてもこの方向性を想定した分析が有意義な帰結を導くことを明らかにしているが、本研究でもその議論を踏襲してフット解析が「右から左へ」起こると考えて分析を進める。

フット解析に関してもう一つ考慮しておかねばならないのは、重音節内に含まれるモーラをどのように解析するかという問題である。重音節は二つのモーラを含んでいるので、それ自体が一つのフットの単位を構成し得る。したがって、当該の構造が重音節だけで構成されており、かつ、その数が一つまたは偶数個である場合には問題が起こらないが、軽音節が混在した構造では考慮すべき問題が生じる。たとえば「重音節+軽音節 (HL)」からなる構造が与えられた場合、そこに含まれるモーラを単純に右から左へ二項的に解析すると重音節の内部にフットの境界が生じてしまうことになる。

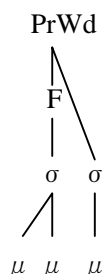
(20) 範疇の不整合



上図の構造ではフットと音節の境界が整合していないわけだが、こうした不整合構造の是非を巡っては現在も議論が分かれている。Poser (1990) は、日本語のフットを専らモーラ・

レベルで構成される範疇であるとして(20)の構造を妥当とする見方を示しているが、一方で、範疇同士が整合する構造を好む普遍的な志向性が言語に備わっているとの主張もある (McCarthy and Prince 1993)。Mester (1994) のフット解析理論では、この普遍的志向性が矛盾なく反映される解析法として *Prosodic trapping* と呼ばれる処理が提案されている。特定の連鎖において軽音節をフットに解析しないまま残すというのがその主旨であり、重音節を優先的にフットに解析することにより未解析の軽音節が残る構造を認める点が特徴である。この処置によると HL 連鎖は次のような解析を受けることになる。

(21) HL



二項構造を構成できないモーラが構造の右端に生じることにより、未解析の音節が韻律語に直接支配されていることから、この構造は本節冒頭で触れた緩和階層仮説を前提とした構造であることが分かる。この解析法では階層の厳密性が一部崩された構造（緩和階層構造）が生成されてしまうといった副作用を生じつつも、他面では韻律範疇同士の整合性が保たれるといったメリットがもたらされている。一方、(20)の解析法ではフットと音節の整合性が保たれないために、厳密階層仮説／緩和階層仮説のいずれの立場を採っても整合性のある韻律構造が期待できないという欠点がある。こうした理論的な面での比較を踏まえると、範疇どうしの整合性を尊重する(19)の方がより妥当性の高い解析法であると言える。

さらに、Itô (1990) および Itô, Kitagawa, and Mester (1996) が論証しているように、日本語の音韻現象の中には範疇同士の整合性を重視した緩和階層構造(21)を導入することによって合理的な説明が得られるものが数多い。一例として倒位語形成現象を取り上げよう。一名「ズージャ語」と呼ばれる倒位語の形態には、同じく重音節を含むものであっても「重音節＋軽音節」からなる HL タイプが適格であるのに対して「軽音節＋重音節」からなる LH タイプの形態は生成されないことが知られている (Itô, Kitagawa, and Mester 1996)。

- (22) a. HL シーメ (<飯), ツンパ (<パンツ), ツイド (<ドイツ)
 b. LH *シメー (<飯), *ツパン (<パンツ), *ツドイ (<ドイツ)

この現象に対し仮に(20)の解析法を採った場合には、HL/LH のどちらの構造も同じ韻律構造に解析されてしまうので両者の非対称性が捉えられなくなってしまう。以下に示すようにいずれにおいても韻律語末に二項フットが作られることから (... (μ μ)_F]_{PrWd}), フット・レベルでは両者の相違が中和されてしまうのである。

- (23) a. HL b. LH
-

一方、緩和階層構造を認める(21)の解析法に基づく HL 構造と LH 構造の間に歴然とした差を見出すことができる。以下に図示するように、適格な HL 構造ではフットが韻律語の末尾に位置しないが (=24a), LH 構造ではフットが韻律語末に位置する構造(24b)が作られる。

- (24) a. HL b. LH
-

すなわち(21)の解析法を採ることによって、韻律語内におけるフットの位置の違いが倒位語形成における非対称性(22)を生み出していることを明らかにできるのである。

これまで述べてきた先行研究の成果を踏まえて、本研究ではフット解析に当たり次の方略を設けて分析を進める。

- (25) フット解析
 a. 二項性：2 モーラを一単位としてフットを解析せよ。

$$\mu \mu \mu \mu \rightarrow (\mu \mu)(\mu \mu)$$

- b. 方 向：右から左へと解析せよ。

$$\mu \mu \mu \mu \rightarrow \mu \mu (\mu \mu) \rightarrow (\mu \mu)(\mu \mu)$$

- c. 整合性：音節境界とフット境界を整合させよ。

$$\sigma_{\mu \mu} \sigma_{\mu} \rightarrow (\sigma_{\mu \mu}) \sigma_{\mu}$$

- d. 緩和階層：フットに解析されないモーラを含む軽音節は韻律語に支配される。

$$(\sigma_{\mu \mu}) \sigma_{\mu} \rightarrow [(\sigma_{\mu \mu}) \sigma_{\mu}]_{PrWd}$$

1.4.3 韻律語

韻律語は韻律階層(11)における最大の範疇で、フットを主要部とする構造を持つ。音韻的な範疇としての語の単位であることから「音韻語 (phonological word)」とも呼ばれる*¹⁰。この点に関して注意すべきは、韻律語が文法的な語 (grammatical word) と常に一致するとは限らないということである。文法語は統語範疇をベースとして音韻構造とは無関係な形で規定されるが、韻律語はフット構造やアクセントといった音韻的指標によって規定される範疇であり、両者はしばしば不整合を起こす。

たとえば日本語の助詞などの機能語は、文法的なレベルでは独立した範疇として位置付けられる一方で、音韻的には独立性を持たない場合が多い。このことは助詞を含む名詞句のアクセントの事実から窺える。一拍助詞の音調は直前の実質語の韻律情報に依存して決まる性質を持つ*¹¹。

(26) 名詞＋助詞

緑＋が mido ri ga

心＋が koko ro ga

男＋が oto ko ga

桜＋が saku ra ga

理論的見地から述べると、助詞のアクセントは直前に位置する実質語（名詞）と同じ領域に編入されて計算されていることになる。すなわち、名詞句がアクセント計算の領域となっていることから、上述のケースでは統語構造における終端要素（句範疇——この場合は名詞句——）が韻律語の領域に相当すると考えることができる (Nespor and Vogel 1986)。むしろ、名詞および助詞の語アクセントそのものの情報は文法的な語と一致する単位で語

彙的に与えられていると考えられるが、語アクセントの情報が韻律計算のシステムに入力された場合には、文法語ではなく韻律語を単位とする計算が起こる (Haraguchi 1977, 1991)。したがって、韻律語とは韻律計算の作用域に相当する範疇であると述べてもよい。

オノマトペにおいても文法語と韻律語の不整合を反映した現象が見られる。一例として「パッと光る。」という表現を取り上げて考えてみたい。この表現に現われる「パッ」は常に助詞「と」と共起して用いられる性質があり、「と」を除いた「*パッ光る。」のような用法は認められない。そこで、この振る舞いをめぐって「パッ」と「パッと」のどちらが一語としての単位なのかという問題が指摘されることがあるが (田守 1983, 1991)、この問いかけに対して答えを与える場合、文法語／韻律語のどちらに言及するかによって答えは自ずと異なってくる。文法語の単位について言えば「パッと」は分析の立場により一単位であるとも二単位であるとも言い得る。しかし、韻律語として見た場合には、アクセントの頂点が一つだけ現われることから「パッと」全体を一つの韻律語に相当する単位として分析することができる。助詞「と」は文法的には一語であるものの、音韻的な独立性を示さないことから、韻律的にはオノマトペと同一の領域に編入されていると考えるわけである。このように、機能語が実質語と同じ領域 (韻律語) に編入される現象を本研究では「**韻律化**」と称する。なお、韻律語の単位の見極めに寄与する音韻現象は言語により様々で、アクセントだけが唯一の手掛かりとなるわけではないが、日本語に関しては単一のアクセントの山が形成される領域が韻律語に相当するとの分析がこれまでに示されていることを踏まえて (Kubozono 1997, 窪菌・太田 1998) *¹², 本研究でも同様の観点に立脚して分析を行う。

第 2 章

韻 律 依 存 型 語 形 成

2.1 はじめに

言語の形態現象の中には、語形成のプロセスが専ら音韻的・韻律的な条件によって統御されるタイプのものが見られる（**韻律依存型語形成**）。通常の語形成においては基体や接辞などの構成要素の文法的な性質がプロセスに反映され、構成要素の音韻的な性質は語形成に影響をもたらさないケースがほとんどだが、韻律依存型語形成においては音節やフットなどの韻律範疇の属性および韻律構造の構築に関わる諸条件が専らに語形成を統御する性質が見られる。韻律範疇が主要な役割を果たす点では日本語オノマトペの語形成過程にも同様な振る舞いはしばしば観察される。たとえば「ポンポン」「ピカピカ」などの重複形は二項フットの鋳型によって形成されることで知られる（Poser 1990, Hamano 1998）。また、那須（1999a,b）は「ピカピカ→ピッカピカ」に見る強調の過程において強調辞の挿入箇所が基体の音節構造に依存して決定されることを明らかにしているが、これなどはタガログ語等に見られる接中辞付加現象と基本的によく似た振る舞いだと言える*¹。

本章では、日本語オノマトペの代表的な語形成として**重複・接辞付加・強調**の三つのプロセスを取り上げ、これらのプロセスによって形成されるオノマトペの韻律構造を記述的に明らかにするとともに、それぞれの語形成を統御する韻律的な原理について考察する*²。本章の構成は以下の通りである。

まず 2.2 節では、あらゆる語形成の出発点に当たる語幹の韻律構造について考察する。オノマトペの語幹には1音節のものと2音節のものがあるが（小林 1935, Hamano 1986）、前者に関してはその形式の認定をめぐって二通りの考え方がこれまでに示されている。その二つの考えを比較検討し、オノマトペの語形成を韻律的側面から捉える上でどちらの解

積が妥当であるか考察する。続いて 2.3 節では、日本語オノマトペの典型的な形態とされる重複形の韻律構造について考察する。この節の前半では重複形オノマトペに少なくとも二通りの異なる構造（S 重複形：P 重複形）が存在することを指摘し、それぞれの韻律構造の特徴を探る。後半では「ピピピッ」「ポポポン」などに見る部分重複形の形成過程に作用する韻律条件について考察する。2.4 節では、「ピカ＋リ」「ドカ＋ン」など接尾辞を伴う形態（接辞形）を取り上げる。接辞形に関して注目すべき点はそのアクセントと韻律構造の関わりである。接辞形では語形成に連動してアクセント核の位置に変化が生じるが（核移動現象）、その動機は接辞形のフット構造の特性の中に見出すことができる。また、同様な核移動が接頭辞型の重複形（P 重複形）にも観察されることを指摘し、接辞形と P 重複形の間に密接な派生上の類縁性が見出せることを明らかにする。最後の 2.5 節では、「ピタリ → ピッタリ」「ピカピカ → ピッカピカ」などに見る強調の作用を取り上げ、強調辞の挿入位置を決定する韻律的なアルゴリズムについて論じる。

2.2 語幹の構造

オノマトペには実に多種多様な形態が観察されるが、その一つ一つが全く個別的な語彙項目として孤立しているわけではなく、何らかの共通要素を軸に持ちつつ互いに派生関係をなしている場合が多い。たとえば、「バタバタ」「バタリ」「バツタン」からは「バタ」という要素が共通項として取り出せる。これに重複子・接尾辞・強調辞といった派生要素が結合することにより、種々の形態上のバリエーションがもたらされている。この共通項に相当する形式のことを語幹（stem）と呼ぶ^{*3}。語幹はオノマトペの語形成における最小の入力要素であり、「語基（小林 1935）」ないしは「語根（西尾 1988）」などとも呼ばれるが、用語上の混同を避けるため本研究では一貫して「語幹」という呼称を用いる。ただし、語幹が形態論的派生を経ていない裸の単位であることを強調する必要がある場合には非派生形（nonderived form）という呼称を用いることもある^{*4}。

2.2.1 音節構造

オノマトペの語幹は、その音節構造に基づいて 1 音節語幹（CVX）と 2 音節語幹（CVCV）の二種類に分けることができる（小林 1935, 1965, Hamano 1986, 1998）。1 音節語幹とは「ポン、パッ、ザー、スイ」など単一の重音節からなる形式であり、一方、2 音節語幹は二つ

の軽音節（自立モーラ）からなる形式である*⁵。

(1) 語幹

- a. 1 音節語幹 CVX ($\sigma_{\mu\mu}$) : ポン, パッ, ザー, スイ
- b. 2 音節語幹 CVCV ($\sigma_{\mu}\sigma_{\mu}$) : ピカ, ポキ, バタ, ピョコ

このうち1音節語幹をめぐるのは、その形式を CVX と解釈する上述の捉え方（以下「CVX 説」）のほかに、自立モーラに相当する CV 部分のみを語幹として解釈する考え方もあり（以下「CV 説」）、石垣（1965）、Waida（1984）、Oda（2000）などがこちらの見方を示している。こちらの解釈では、特殊モーラ X は CV に結合する派生要素として位置付けられる。CV 説の根拠として想定できるのは、同一の CV 要素を共有する形式がオノマトペの中にいくつか見られることである。

(2) CV+X

グン = グ+ン
 グイ = グ+イ
 グー = グ+ー
 グッ = グ+ッ

「グン」「グイ」「グー」「グッ」からは「グ」という CV 形式を共通の要素として取り出せるため、可変的な X に相当する特殊モーラを派生要素とみなせば、残る共通部分「グ」（CV）を語幹として解釈できるというわけである。

Hamano（1986, 1998）も述べるように、現在のところ CVX 説および CV 説にはそれぞれ妥当な論拠があり、どちらか一方だけを最善の解釈として位置付けることは難しい。だが、韻律構造および語形成上の振る舞いに焦点を当てると、CVX 説に立脚したほうが望ましい分析が得られるケースが多いことが分かる。この点について引き続き検証することにした。

2.2.2 韻律構造

音節以外の韻律範疇、すなわちモーラやフットのレベルに着目して語幹の構造を観察してみると、CV 説と CVX 説とでは一般化の度合いに違いが生じていることが分かる。仮に

CV 説を採った場合、1 音節 1 モーラからなる語幹 (CV) と 2 音節 2 モーラからなる語幹 (CVCV) の間には韻律的に何の共通性も存在しないことになり、語幹の体系に均整を求めることが不可能になってしまう。

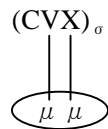
(3) CV 説

	形式	音節数	モーラ数
a. 1 音節語幹	CV	1	1
b. 2 音節語幹	CVCV	2	2

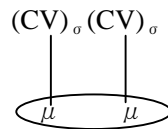
一方, CVX 説ではこのような事態は起こらない。1 音節語幹 (CVX) と 2 音節語幹 (CVCV) は音節構造の違いこそあれ、以下に示すようにモーラおよびフットのレベルでは共通の性質を持つからである。

(4) CVX 説

a. 1 音節語幹



b. 2 音節語幹



CVX 形式と CVCV 形式はともに 2 モーラ構造をなしている。この構造は二項フット (bimoraic foot) の構造にほかならないことから、CVX 説に立脚するとオノマトペの語幹の性質を韻律的側面から次のように一般化することが可能になる (Hamano 1986, 1998, Tateishi 1989, Poser 1990)。

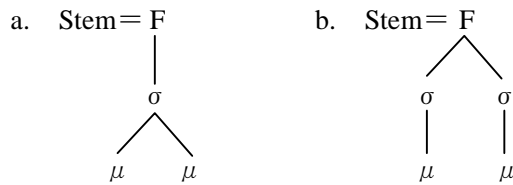
(5) 語幹の韻律構造

$$\text{Stem} = (\mu \mu)_F$$

二項フットは日本語の様々な語形成現象およびアクセント現象において極めて重要な役割を担う単位であることが知られているが (Poser 1984a, b, 1990, Itô 1990, Mester 1990, Itô, Kitagawa and Mester 1996, Kubozono 1997), この構造がオノマトペにも観察されるということは、オノマトペもまた日本語の一員として一般語種と共通の韻律的特性を含んでいることを示唆している。

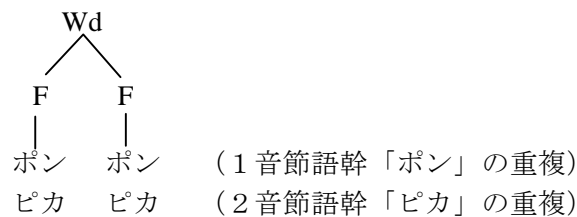
以上の検証に基づき、本研究では1音節語幹の形式を CVX 構造として考える立場を採る。語幹のサブタイプ、すなわち1音節語幹と2音節語幹の区別は、つまるところ当該の構造に含まれるモーラをどのように音節に解析するかによって生まれる違いに他ならない。(6)に示すように、二項フットに含まれるモーラが同一音節に解析された形が1音節語幹であり、異なる音節に解析された形が2音節語幹だと言える。

(6) 語幹の韻律構造



なお Hamano (1998) は、CVX 説に立脚することにより1音節語幹と2音節語幹の語形成上の共通性が捉えられることを指摘している。以下に図示するように、1音節語幹および2音節語幹から派生される重複形オノマトペはいずれも二つのフットからなる共通の韻律構造「F+F」を含んでいるからである。こうした語形成上の一般性を捉える上でも CVX 説には大きな利点が伴う。

(7) 重複形



2.2.3 基底アクセント

語幹の形態論的特徴のひとつに、それ自身単独で自立的な語の範疇を構成しにくいということが挙げられる。このため語幹に備わる基底アクセント (lexical accent) がどのような型を有しているかは直接的には観察することができないわけだが、語形成に現われる音韻構造を観察することにより、語幹の基底アクセントが「頭高型」の構造を有していることが特定できる。

「キラキラ」「ピカピカ」など単純な重複の構造を持つオノマトペのアクセントは、一般

の複合語アクセント規則とは無縁な形で作られることが従来指摘されている。重複構造を持つオノマトペには構成要素のアクセントを継承する形で語全体のアクセントが決まるといいう性質が見られ、たとえば「キ|ラキラ」の頭高型は、前部要素のアクセントが単純に継承された結果現われるパターンとして分析できる（金田一 1976）。

(8) キ|ラ+キ|ラ → キ|ラキラ

この分析では、前部要素である語幹に頭高型の基底アクセント（「キ|ラ」）が備わっていることが含意されているわけだが、この見方の妥当性は次の言語事実を通じて検証することができる。

オノマトペとよく似た音韻構造を持つ形式は、実は一般語種の中にも見出される。同義的なないしは対義的な語を組み合わせる並列語（dvandva）がそれで、オノマトペと同様に語形成の際に決して連濁を起こさないことと、オノマトペと酷似した非計算的なアクセント・パターンを示すことで知られる（金田一 1976, 佐藤 1989, 秋永 1998, 窪菌 1999, 金田一・秋永 2001, 那須 2001a）。

(9) 並列語

白黒	し ろ+く ろ	→	し ろくろ
銭金	ぜ に+かね	→	ぜ にかね
後先	あ と+さき	→	あ とさき
肩肘	か た+ひじ	→	か たひじ

並列語がオノマトペと同質の音韻特徴を共有していることを踏まえると、アクセント形成においても両者は同様なしくみ——前部要素のアクセントを継承する——を共有していると考えられる。ここで(9)の並列語を見ると、そのアクセントが明らかに前部要素「し|ろ、ぜ|に、あ|と、か|た」の頭高型をそのまま継承する形で決まっている様子が見て取れるが、これに敷衍すると、オノマトペの場合も語幹の基底アクセントとして頭高型「キ|ラ」を想定する(8)の分析が十分妥当なものであることが理解できる。オノマトペでは語幹の基底アクセントを直接観察することはできないものの、同じ音韻構造を持つ並列語の音韻事実から頭高型の基底アクセントを特定できるのである。

以上の検証を踏まえると語幹の基底アクセントの構造は次のようにまとめられる。基底アクセントは、語幹を構成する音節のうち最も左側の音節に対し統一的に備わっている。

(10) 基底アクセント

- a. 2音節語幹 ($\sigma \leftrightarrow \sigma$)_{Stem}
- b. 1音節語幹 ($\sigma \leftrightarrow$)_{Stem}

この一般化を得て、これまで「頭高型」と述べてきた構造は、領域の左端の範疇に頂点が置かれる韻律構造として再解釈することができる。

2.3 重複形オノマトペ

国立国語研究所(1964)の調査に基づく玉村(1979, 1989)の研究によれば、日本語のオノマトペのうち実に半数近くの語(399語, 42.86%)が「ピカピカ」のような「ABAB型」の重複構造を持つとの報告がある。この数値が示すとおり ABAB 型の**重複形**は日本語オノマトペの典型的な形態であるが、重複形には ABAB 型以外にも様々なバリエーションが存在する。たとえば次のようなものである。

(11) 重複形

- a. ピカピカ, ポンポン, スイスイ, ザーザー
- b. サッサ, パッパ, キャッキヤ
- c. ピッピッピッ, ポンポンポン
- d. ピカピカピカッ, ガタガタガタン
- e. ピピピッ, ポポポポン
- f. ピカリピカリ, ガタンガタン, ピカリピカリピカリ

本研究の課題はこうした多様性に富んだ形式の中から一貫した韻律的特性を見出そうとするところにある。その第一歩となるのが多様な形態を可能な限り単純な類型に集約する作業である。とは言え、表面的な形式の違いだけに目を向けている限り上に挙げた形態をそれ以上簡単な類型に集約することは難しい。そこで本節では、アクセントおよび語形成に現われる特性(対極性)を手掛かりとして、重複形のバリエーションが二種類の類型に集約できることを示す。

2.3.1 アクセントの対極性

重複形オノマトペのアクセント型には、語頭音節に頂点が位置する(12a)と語末音節に頂点が位置する(12b)の二つのタイプが見出される。(11)に挙げた形態のうちアクセントの山が二つに割れる(11f)を除くと、それ以外のものは全てこのどちらかの型に収まる。

(12) アクセント

- a. 語頭型：ピカピカ, ポンポン, スイスイ, サーザー, サッサ
 b. 語末型：ピッピッッと, ピピッと, ピカピカッと*⁶

語頭型ではアクセント核が先頭の音節に位置し、語末型では逆に末尾の音節に核が位置する。つまり両者のアクセントは単に「異なる」だけでなく、全く対極的な構造を持っているのである。

この対極性は**音韻的主要部** (phonological head) の所在の違いとして捉えなおすことができる。音韻的主要部（以下「主要部」）とは、当該の音韻構造において頂点を形成する韻律範疇のことである。アクセントの特性をピッチによって実現する日本語ではアクセント核を含む韻律範疇が主要部に相当する。ここでフットを単位として(12)のアクセント構造を分析すると、「語頭型」と「語末型」とではアクセント核を含むフット（主要部フット）が対極的な位置に生じていることが分かる（（ ）はフット、下線は主要部フット）。

(13) a. 語頭型

(pika)(pika)
 (poN)(poN)
 (sui)(sui)
 (zaa)(zaa)
 (saQ) sa

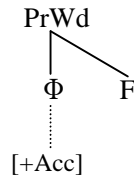
b. 語末型

(piQ)(piQ)(piQ)
 (pipi)(piQ)
 pi (kapi)(kaQ)

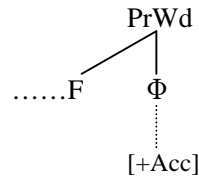
語頭型では一貫して主要部が構造の左端の位置に現われ、他方、語末型では主要部が一貫して右端に現われる。主要部フットを「Φ」で表し、それ以外のフットを「F」で表すと、(13)に示した類型は次のような一般構造によって記述できる（[+Acc]はアクセント核）。

(14) 韻律構造

a. 語頭型



b. 語末型



語頭型の韻律構造は主要部始端型であり，一方，語末型は主要部末端型の韻律構造をなしている。後者の場合，図中で「.....」で示した部位には任意の数のフットないしは音節が現われるが，主要部の位置に注目する以上この違いは無視しても差し障りはない。主要部の位置に関して語頭型と語末型の韻律構造が完全に鏡像的な関係を示すことこそが，(14)の韻律構造から読み取るべき最も重要な所見として特筆される。

2.3.2 語形成上の対極性

語頭型と語末型の対極性はアクセント以外の現象——形態現象——においても現われる。重複形の形成過程における最大の特徴とは**基体** (base) が複写されて**重複子** (reduplicant : RED) が生成されることだが，語頭型と語末型の間には，重複子の生成回数をめぐって次のような対極的な違いが観察される。語頭型の重複語では重複子は一回しか生成されず，たとえば「*ピ|カピカピカ光る。」のように二回 (以上) 重複子を生成した形は適格でない。ところが語末型ではこうした制限が一切伴わず，「ピカピカ|ッと光る。」のように重複子を一回だけ生成した形はもとより「ピカピカピカ|ッと光る。」「ピカピカピカピカ|ッと光る。」など重複子を二回以上生成した形も許される。すなわち語末型の場合，重複子の生成回数は論理的に無限であると言ってよい。

(15) 重複子の生成回数

a. 語頭型：制限あり (RED=1)

ピ カピカ光る。	*ピ カピカピカ光る。
ポ ンポン投げる。	*ポ ンポンポン投げる。
ス イスイ進む。	*ス イスイスイ進む。
ザ ーザー降る。	*ザ ーザーザー降る。
サ ッサとやめる。	*サ ッサッサとやめる。

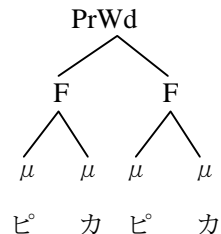
b. 語末型：制限なし ($RED \geq 1$)

ピカピカ ッと光る。	ピカピカピカ ッと光る。
ピッピ ッと鳴る。	ピッピッピ ッと鳴る。
ピピ ッと鳴る。	ピピピ ッと鳴る。

語頭型に厳密な制限が起こる一方で語末型には全く制限が伴わないといったあり方は、あまりにも極端な隔たりだと言えるが、重複子の生成回数に見るこうした対極性は、語形成の過程で構築される韻律構造の性質の違いに起因する現象だと考えられる。

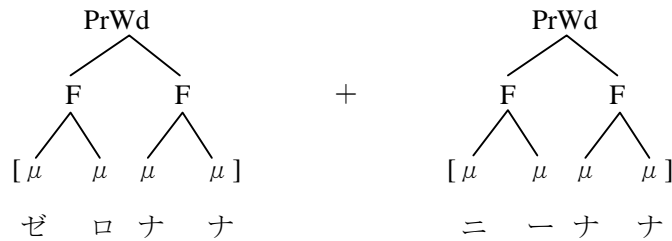
語頭型において重複子の数が厳密に制限されているという事実は、その語形成が定型化した韻律構造に基づいて起きていることを示唆している。平たく述べると、「ピ|カピカ」のようないわゆる「ABAB 型」は決まりきった鋳型的な構造によって作り出されており、それ以上の形態的バリエーションを与えることが許されていないのである。語頭型には二つの二項フットからなる均整のとれた韻律構造がおしなべて観察される。この構造は Poser (1990) が「二脚架鋳型 (bipodic template : BT)」と称するもので、たとえば「ピ|カピカ」は下図のような BT 構造を含んでいる。

(16) BT 構造



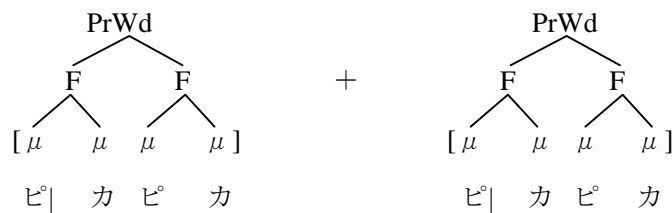
BT 構造は完全に固化した鋳型のような性質を有していると考えられる。つまり、その外部に余る韻律範疇の編入を許さない非常に頑固な領域を形成しているのである。実は、BT 構造はオノマトペのみならず日本語の中にごく普通に現われる韻律構造である。電話番号を読み上げる際に起こるプロソディなどはその好例で、たとえば偶数個の構成素からなる「0 7 2 7」では「2」において短音節長音化が生じて二つの BT 構造が形成される*⁷。

(17) 0 7 2 7



この時、アクセントが「ゼロナ|ナ・ニーナ|ナ」といった具合に **BT** 単位に与えられている点に留意したい。決して「*ゼロナナニー|ナナ」のような複合化したアクセントは現われないのである。アクセントに見る上述の性質は、語頭型重複語に現われる **BT** 構造にも同様に観察される。語頭型重複語でも「ピカピカピカピカ光る。」のように一見したところ複数回の重複を許しているかのような形態が用いられることがあるが、その場合、アクセントの山は必ず「ピ|カピカ・ピ|カピカ光る。」のように **BT** 単位で割れる。

(18) ピ|カピカピ|カピカ光る。



この事実は語頭型重複語が「F+F」という定型化した鋳型的な韻律構造によって形成されていることをよく表している。換言すると語頭型重複語では定型性から逸脱する語形成が許されていないと言え、こうした定型性が重複子の数を制限する要因として機能していると考えられる。

語頭型重複語の語形成が定型的な韻律構造（**BT** 構造）によって強く束縛されているのに対し、語末型重複語の場合は構造的な束縛が伴わず、比較的自由的な形態が作り出される。重複子の数が論理的に無限であるということは明らかにその語形成が **BT** 構造のような固化した鋳型とは無縁に起こることを意味している。以下の体系に見るように、語末型では重複子を基体の左方向に無限に追加できる点が特徴である。

- (19) a. ピカ + ピカッ
 b. ピカ + ピカ + ピカッ
 c. ピカ + ピカ + ピカ + ピカッ
 d. ピカ + ピカ + ピカ + ピカ + ピカッ

語頭型重複語と語末型重複語は一見したところ非常によく似た形式であるので、その語形成過程も何らかの有縁性を持つと考えられがちである。たとえば天沼（1974）は、語頭型に促音を添加することによって語末型が作られるとしているが（例：ピ|カピカ+ッ）、この説明が妥当でないことは(19b)～(19d)の事実から明白であろう。仮に(19b)の「ピカピカピカ|ッ」が天沼の分析で述べられているあり方で生成されているとしたら、そのベースとして「*ピ|カピカピカ」という非文法的な語頭型の形式を認めなくてはならないからである。このため、語頭型と語末型の間には直接的な語形成上の類縁性（派生関係）は存在しないと考えた方がよい。むしろ村田（1993）の指摘にあるように、語末型は語頭型とは性質の異なる語形成過程(20)を含んでいるものと考えられる。

- (20) ピカピカピカ|ッ
 [ピカ + ピカ + [ピカ| + ッ]]

語末型重複語においては複数の語形成過程が働いており、接辞形オノマトペ「ピカ+ッ」がまず形成され、その外側（左側）に重複子が任意の数だけ前接するといった重層的な構造(20)が抽出できる。

2.3.3 S 重複形と P 重複形

これまでの検証をひとまずまとめておこう。アクセントおよび語形成のあり方を通じて観察すると、重複形オノマトペには二種類の対極的なタイプ——語頭型と語末型——が含まれていることが分かる。

- (21) 対極性

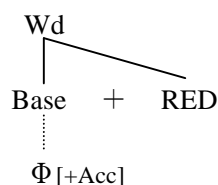
	韻律構造	重複子	例
a. 語頭型	#Φ + F	1	ピ カピカ
b. 語末型	.. + Φ#	∞	ピカピカ ッ

アクセントの事実から窺える＜韻律構造＞については、語頭型が主要部始端型の構造を持つ一方で語末型は全く正反対の主要部末端型構造を持つという対極的な違いが認められる。また、＜重複子＞の生成回数に関しても両者は対極的で、語頭型が重複子を一つしか生成できないのに対して語末型は無限個の重複子を生成できる。

このように語頭型と語末型は韻律構造および語形成の二つの側面に関してともに対極的な構造を持っているわけだが、ここで、それぞれの形態において音韻的主要部（ Φ ）を含む要素が語形成上の基体（Base）として働いていると考えることにより、両者の韻律・形態構造上の対極性はさらに次のような形で一般化して捉えることができる。

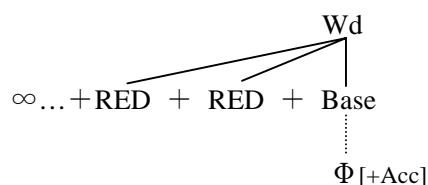
(22) 構造の対極性（Base＝基体，RED＝重複子，[+Acc]＝アクセント核）

a. S 重複形（語頭型）



例：ピ|カピカ

b. P 重複形（語末型）



例：ピカピカピカ|ッ

語頭型重複語(22a)は、主要部「 Φ 」を担う基体の右側に重複子が一ただけ生成される接尾辞型の派生構造をなしていると分析できるが、この点を踏まえて以下本研究では語頭型重複語を「**S 重複形***⁸」と略称する。従来いわゆる「**ABAB 型**」と呼ばれてきた典型的な重複形態はここで言う S 重複形に相当することになる。他方、(19)の体系に見たように語末型重複語(22b)では主要部「 Φ 」を担う基体が構造の右端に生じ、その左側に重複子が任意の数だけ生成されるという特徴があるが、このあり方は基体に接頭辞が前接した派生構造に比類できることから、以下ではこれを「**P 重複形***⁹」と略称する。

以上、韻律構造および語形成の分析を通じて日本語オノマトペの重複形態に二つの対極的な類型（S 重複形／P 重複形）が存在することを明らかにしてきたが、ここでひとまず両者の対極的な特徴を四つの観点からまとめておくことにしたい。

(23) S 重複形と P 重複形

	S 重複形	P 重複形
a. 韻律構造	# Φ +F (主要部始端型)	... Φ # (主要部末端型)
b. 形態構造	Base+RED (接尾辞型)	RED+Base (接頭辞型)
c. 重複子	制限あり: RED=1	制限なし: $0 < \text{RED} < \infty$
d. アクセント	語頭音節	語末音節

S 重複形と P 重複形は一見したところ形式が非常によく似ているため両者の区別は従来さほど明瞭に意識されていなかったと言えるが、これまでの検証から明らかなように、両者は異なるタイプの重複形として位置付けられるべき性質を備えている。

2.3.4 部分重複形

本節ではこれまでの議論からやや離れて、日本語オノマトペに現われる**部分重複形** (partial reduplication) の韻律構造および、その語形成を統御する韻律的な原理について考察する。

部分重複とは、語幹の一部だけが繰り返されるタイプの重複現象である。先ほど(11)に示した形態のバリエーションのうち(11e)「ピピピッ」「ポポポン」がこれに相当する。これに対し、(11c)の「ピッピッピッ」「ポンポンポン」は語幹の構造が完全に複写された形 (完全重複形) である。

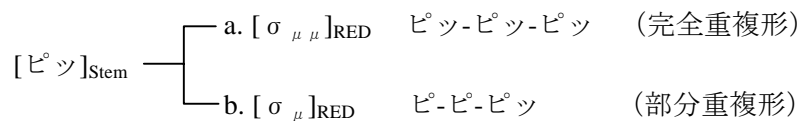
- (24) a. 完全重複形 (=11c) ピッピッピッ, ポンポンポン
 b. 部分重複形 (=11e) ピピピッ, ポポポン

留意すべきは、これらがともに同一の語幹「ピッ」「ポン」から派生される形だということである。語幹は同一であっても、そこから派生される重複子のサイズに違いが起きており、完全重複形において語幹に含まれるモーラが漏れなく複写の対象になるのに対して、部分重複形では語幹のモーラのうち一部分だけが複写の対象になる点が異なっている。「ピッピッピッ」と「ピピピッ」の対を例に述べると、語幹「ピッ」に含まれる二つのモーラを全て重複子に反映させた形が完全重複形「ピッピッピッ」であり、一方、語幹「ピッ」に含まれるモーラのうち最初のモーラ「ピ」だけを重複子に反映させた形が部分重複形「ピ

ピピッ」に相当する。

重複子に含まれるモーラ数の違いは音節構造の面からは次のように捉えなおすことができる。まず、完全重複形において1音節語幹「ピッ」に含まれる二つのモーラが複写されるということは、重音節の構造 $[\sigma_{\mu\mu}]$ が複写の対象になっていることと同義である。一方、部分重複形において1音節語幹「ピッ」に含まれるモーラのうち一つだけが複写されるということは、軽音節の構造 $[\sigma_{\mu}]$ が複写の対象になっていることを意味する。

(25) 重複子



すなわち完全重複形と部分重複形の本質的な違いは、重複子の**音節量**という韻律的な尺度によって捉えることができるのである。韻律形態論的な文脈に沿って述べるならば、完全重複形では重音節構造の鋳型 $[\sigma_{\mu\mu}]_{\text{RED}}$ によって重複子が生成される一方、部分重複形では軽音節構造の鋳型 $[\sigma_{\mu}]_{\text{RED}}$ によって重複子が生成されていると表現できよう。また、McCarthy and Prince (1986) によって提唱されている韻律鋳型 (prosodic template) のモデルに基づくと、部分重複形の派生のしくみは次のように記述できる。

(26) 韻律鋳型



(26)は語幹/CVX/に含まれる分節構造が軽音節鋳型 $[\sigma_{\mu}]_{\text{RED}}$ に写像されることによって重複子が生成される様子を示しているが、鋳型のサイズが語幹のサイズよりも小さいため、語幹に含まれる分節/CVX/のうち鋳型のサイズに相当する CV 部分だけが切り取られることになる。

ところで、日本語オノマトペにおける部分重複形の分布を調べてみると、重複の基体となる語幹のタイプに一定の制限が加わっていることに気づく。以下に示すように、部分重複形は1音節語幹からは派生されても2音節語幹からは同様な形態を派生することができないのである。

(27) 部分重複形

a. 一音節語幹

ピッ → ピ・ピ・ピッ
 パッ → パ・パ・パッ
 グッ → グ・グ・グッ
 ポン → ポ・ポ・ポン
 ドン → ド・ド・ドン
 ガン → ガ・ガ・ガン

b. 二音節語幹

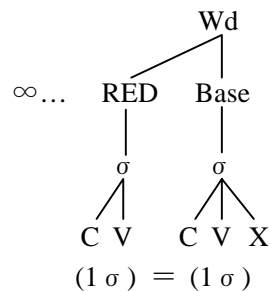
ピカ → *ピ・ピ・ピカ
 ポキ → *ポ・ポ・ポキ
 ギラ → *ギ・ギ・ギラ
 コロ → *コ・コ・コロ
 スパ → *ス・ス・スパ
 カチ → *カ・カ・カチ

この事実の性質を形式的側面から述べると、2音節語幹では軽音節鋳型 $[\sigma_\mu]_{\text{RED}}$ による重複子生成作用が起こらないということになるが、これはどのような理由によるのであろうか。

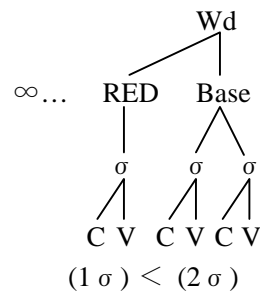
2.2 節で論じたように、1音節語幹と2音節語幹はモーラおよびフットのレベルでは共通の特性を示しつつも音節のレベルでは異なる構造を含んでいるわけだが(=6)、ここで音節構造に基づいて部分重複の可否を捉えると興味深い一般化が得られる。1音節語幹から軽音節鋳型(26)へと重複子を写像する際には基体と重複子の音節数は等しいまま保たれるが、2音節語幹に対して同様の操作を施すと、以下に図示するように基体と重複子の間で音節数が変わってしまうのである。

(28) 音節数

a. 1音節語幹



b. 2音節語幹



部分重複形の派生は重複子と基体とで音節数に変化が生じない場合に限って許されていると言える。換言すると、重複子の音節数が基体の音節数より減少する場合には部分重複形は派生されることが分かるが、このあり方から、部分重複形の適否を左右するしくみと

して次の韻律条件が抽出できる。

(29) 音節数の保存

重複子ひとつあたりの音節数は基体の音節数と等しくなければならない。

すなわち、2音節語幹から「*ピ・ピ・ピカ」などの部分重複形が生成されないのは、部分重複が起こることによりこの条件に反する構造(28b)が作られてしまうからである。

さらに興味深いことに、(29)の条件は必ずしも部分重複形の形成過程に限定して課されるものではなく、むしろオノマトペの重複語形成全般にわたって通用する一般的な条件であることが指摘できる。S 重複形/P 重複形の違いを問わず重複形態のバリエーションを挙げると、その全ての形態において(29)の条件が遵守されていることが分かる。

(30) 重複語形成と音節構造 (「・」は音節境界, B=基体, R=重複子)

a. S 重複形

ピ カピカ	[pi.ka.] _B + [pi.ka.] _R	B[σ σ] = R[σ σ]
ポ ンポン	[poN.] _B + [poN.] _R	B[σ] = R[σ]
スイスイ	[sui.] _B + [sui.] _R	B[σ] = R[σ]
ザ ーザー	[zaa.] _B + [zaa.] _R	B[σ] = R[σ]
サ ッサ	[saQ.] _B + [sa.] _R	B[σ] = R[σ]

b. P 重複形

ピカピカ ッ	...[pi.ka.] _R + [pi.kaQ.] _B	R[σ σ] = B[σ σ]
ガタガタ ン	...[ga.ta.] _R + [ga.taN.] _B	R[σ σ] = B[σ σ]
ピッピッピ ッ	...[piQ.] _R + [piQ.] _B	R[σ] = B[σ]
ポンポンポ ン	...[poN.] _R + [poN.] _B	R[σ] = B[σ]
ピピピ ッ	...[pi.] _R + [piQ.] _B	R[σ] = B[σ]
ポポポ ン	...[po.] _R + [poN.] _B	R[σ] = B[σ]

重複形オノマトペの語形成が韻律依存型の性格を備えていることは、この事実の中に如実に現われている。部分重複形に限らず、適格なオノマトペ(30)においておしなべて基体と重複子の音節数が等しい関係にあることから、重複語形成の過程においては重複子の構造が専ら韻律的な条件(29)によって統御されていること——すなわち、重複子ひとつあたりの音節数が基体の音節数と同数である場合に限って適格な語形成が起こるしくみが一貫し

て働いていることが理解できる。

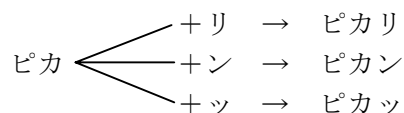
2.3.5 まとめ

本節では重複形オノマトペをめぐって次の二点を明らかにした。第一に、アクセントおよび語形成の振る舞いを通じて、重複形の構造が **S 重複形** と **P 重複形** の二つの類型に大別できることを示した (=22)。従来「**ABAB 型**」と呼ばれてきた「ピ|カピカ」などのタイプは前者に相当し、一方、語末にアクセントを持つ「ピカピカ|ッ」などは後者に相当する重複形である。**S 重複形** と **P 重複形** は見かけ上はよく似ているが、その韻律構造や語形成は対極的な性質を持つ。**S 重複形** では重複子の数が厳密に制限されており複数回の重複が起こらないが、**P 重複形** では重複子の数に制限が無く、論理的に無限回の重複が許されている。両者は音韻的側面においても対極性を示し、**S 重複形** が主要部始端型の韻律構造 (= 語頭型アクセント) を持つ一方で **P 重複形** は主要部末端型の韻律構造 (= 語末型アクセント) を持つという違いが見られる。第二に、本節では部分重複形の分析を通じて(29)に見る音節数保存の条件が語形成を統御していることを明らかにしたが、最前述べたように、この条件は部分重複形の形成過程のみならず全ての適格な重複語形成に通じる一般的な韻律条件として位置づけることができる。

2.4 接辞形オノマトペ

この節では、日本語オノマトペのもう一つの代表的な形態である**接辞形オノマトペ**の構造について考察する。接辞形とは、語幹に接尾辞が結合した次のような形態のことである。

(31) 接辞形

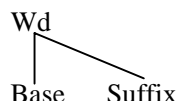


オノマトペの接尾辞には上に示したり語尾・撥音・促音の三種類がある。他にも「フックラ」「ホンワカ」などに現われる「ラ」「カ」のような接尾辞もあるが、これらはり語尾・撥音・促音に比べて生産性が乏しいため特に言及する必要が生じない限り考察の対象から省いておく。

2.4.1 構造

接辞形オノマトペは、接尾辞を伴う一般の派生語と同様の形態構造を持つ。

(32) 接辞形



この語形成の基体に相当するのは語幹の単位である。ただし、1音節語幹と2音節語幹のうち接辞形を派生できるのは後者のみである。オノマトペの接尾辞は「ピカ、ポキ、コロ、グシャ」などの2音節の語幹には結合できても「ポン、スイ、グー、パッ」などの1音節語幹には結合できない。唯一、「グイン」「グイッ」などに見るように1音節語幹のうち二重母音を含むものに関しては稀に接辞形を派生する場合があるが、これは二重母音語幹の音節構造が2音節語幹と同様の解析を受ける素地を含んでいるためだと考えられる。二重母音語幹/ CV_iV_j /に含まれる二つの母音を音節構造に解析する場合、論理的には次の二通りの出力が想定される。

- (33) a. 二重母音 $(CV_iV_j)_o$
 b. 連母音 $(CV_i)_o(V_j)_o$

母音の連鎖が二重母音をなすのは二つの母音が同一の重音節に解析された場合(33a)である。対して、二つの母音が異なる軽音節に解析された構造(33b)では連母音と解釈されるが、こちらの場合、音節の数から言えば2音節語幹と同様の性質を示す。二重母音語幹は全体的な振る舞いとしては1音節語幹/ CVX /のグループに含まれるが、連母音構造(33b)への解析が可能である点において潜在的に2音節語幹に近い性質をも含んでいると考えられ、そのために接辞形の派生が部分的に起こるものと分析できる*¹⁰。

続いて音節構造および韻律構造について見よう。接辞形オノマトペの音節構造には接尾辞の種類によって二通りのタイプが認められる。リ語尾が接尾辞として結合した形では三つの軽音節が連続した構造が形成され、一方、撥音ないしは促音が接尾辞として結合した形では「軽音節+重音節」の構造が作られる。

(34) 音節構造 (L=軽音節/H=重音節, 「.」は音節境界)

- a. LLL pi.ka.ri.
- b. LH pi.kaN., pi.kaQ.

ただし、フットのレベルではどの接尾辞がついた形も等しい構造として分析される。リ語尾形では語末に位置する二つの軽音節が二項フットに解析され、撥音形／促音形では語末の重音節が二項フットに解析されるが (Hamano 1998), いずれの場合も軽音節にフットが後続する構造を (「L+F」) なす点は一様だからである。

(35) 韻律構造

L+F: L(LL)_F/L(H)_F

2.4.2 アクセント

接辞形オノマトペのアクセントに観察される特性として、ここでは次の二点を取り上げて論じる。第一の特性は、派生に伴ってアクセントの変化 (核移動) が起こることである。第二に、接辞形のアクセントが P 重複形のアクセントと構造上極めてよく似た性質を持っていることが指摘できる。

まず、第一の特性について見てみよう。接辞形オノマトペの語形成過程では、接尾辞の結合とともに語幹の基底アクセント (頭高型) が消えて新たなアクセント (中高型) が生成される*¹¹。

(36) アクセント

- ピ|カ → ピカ|リ (*ピ|カリ)
- ピ|カ → ピカ|ン (*ピ|カン)
- ピ|カ → ピカ|ッ (*ピ|カッ)

この事実はオノマトペの接尾辞が音韻的に活性な派生素であること、すなわち基体のアクセントを変える働きを持つ派生素であることを示している。語幹と接辞形とでアクセント核の位置を比較してみると、次に示すように接辞形では基底の位置から1モーラ分右側に核が移動しているのが分かる。

(37) 核移動

$$\begin{aligned}
 (\mu | \mu)_{\text{Stem}} &\rightarrow (\mu \mu)_{\text{Stem}} \\
 \text{ピ}|\text{カ} &\rightarrow \text{ピ}|\text{カ}|(-\text{リ}) \\
 \text{ピ}|\text{カ} &\rightarrow \text{ピ}|\text{カ}|(-\text{ン}) \\
 \text{ピ}|\text{カ} &\rightarrow \text{ピ}|\text{カ}|(-\text{ッ})
 \end{aligned}$$

核移動のしくみは接辞形オノマトペのフット構造に基づいて分析できる。(35)に示したように接辞形では語末にフットがひとつだけ形成されるという特徴が見られるが, Hamano (1998) は, このフットが核の着地点になることにより移動型のアクセントが生成されると分析している。

(38) フット解析とアクセント

- a. ピカリ $\text{pi}|\text{ka} + \text{ri} \rightarrow \text{pi} (\text{ka}|\text{ri})_{\text{F}}$
- b. ピカン $\text{pi}|\text{ka} + \text{N} \rightarrow \text{pi} (\text{ka}|\text{N})_{\text{F}}$
- c. ピカッ $\text{pi}|\text{ka} + \text{Q} \rightarrow \text{pi} (\text{ka}|\text{Q})_{\text{F}}$

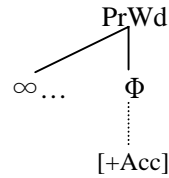
続いて第二の特性について見てみよう。以下に示すのは接辞形ならびに P 重複形のアクセント構造である。それぞれのアクセントに現われる核の位置に注目されたい。

(39) 核の位置 (L=軽音節, F=フット, #=語末)

a. 接辞形	b. P 重複形
ピカ リ L+F #	ピカピカ ッ L+F+F #
ピカ ン L+F #	ピカピカピカ ッ L+F+F+F #
ピカ ッ L+F #	ピカピカピカピカ ッ L+F+F+F+F #

接辞形と P 重複形のどちらにおいてもアクセント核が語末のフットに与えられていることが分かる。すなわち, とともに語末フットが音韻的主要部の資格を持つことから接辞形と P 重複形は同一の韻律構造(40)を共有していると考えられる。

(40) 韻律構造 (Φ = 主要部フット)



接辞形と P 重複形は形態論的に異なる類型に属するオノマトペだが、韻律的には共通の性質を備えていることになる。両者の唯一の違いは上図で「∞」とした部分——すなわち主要部フットの左側に生じる韻律範疇の種類及び数である。P 重複形の場合、重複子の生成回数に制限が伴わないので主要部フットの左側には任意の数の韻律範疇（フットないしは音節）を生成できるが、接辞形では重複自体が生じないので主要部フットの左側には軽音節が一つ生じるだけである。

接辞形と P 重複形の韻律構造に見る共通性は、両者が語形成の面においても極めて密接な関係にあることを示唆している。P 重複形および接辞形を次のように配列してみると、両者の関わり合いがより明瞭に捉えられよう。

(41)	形態	重複子	
	ピカピカピカ <u>ピカ</u> ッ	3	} P 重複形
	ピカピカ <u>ピカ</u> ッ	2	
	ピカ <u>ピカ</u> ッ	1	
	<u>ピカ</u> ッ	0	接辞形

下線を付した部分に注目されたい。重複子の数がいくら増加しようとも下線部の構造は一向に影響を受けていない。下線部は語形成の軸（基体）として働いており、この軸に対して任意の数だけ重複子が結合する様子が見て取れる。このとき重複子の数は論理的には「0」であっても構わない。上の配列から明らかなように、重複子が「0」の形態とは接辞形オノマトペの形態にはかならない。言うなれば、P 重複形のうち重複子の数が「0」に設定された形態が接辞形オノマトペだということになる。

2.4.3 派生関係

接辞形と P 重複形の共通性をめぐっては(41)の体系からもうひとつ興味深い知見を導き

出すことができる。重複子の数とアクセントの関係をしてみると、重複子がどれだけ追加されてもアクセントには全く変化が起きていないことに気づくが、このことは重複子が音韻的に不活性な派生要素であること——つまり、基体のアクセントを変える働きを持たない派生要素であることを意味している。この性質は、同じオノマトペの派生要素でありながらも接尾辞とは大きく異なっている。接尾辞の場合、(36)に見たように基体のアクセントを変える働きを持っているからである。

この事実を形式的な側面から述べると、P 重複形のアクセントは重複が起こる際に生成されるのではなくて、その前段階に、つまり接辞形が派生された時点においてすでに生成されたパターンをそのまま引き継いだ形であると分析できる。(41)に促して述べると、重複子の数が「0」である「ピカ|ッ」が形成された時点で核移動が起こり、その後の重複派生の過程ではアクセントは一切影響を受けないということになる。接尾辞と重複子に見る音韻的性質の違いは、たとえば英語における第一類接辞と第二類接辞の対比と平行的である点で興味深い。周知の通り、第一類接辞が基体の強勢を移動させる働きを持つ一方で第二類接辞にはそうした効果が伴わない (Chomsky and Halle 1968, Siegel 1974)。

(42) 英語接辞の類別

a. 第一類 (強勢移動あり)

-ity ele↔ctric + ity → electri↔city

-al a↔ccident + al → accide↔ntal

be↔autiful

-ous co↔urage + ous

less

→ ca↔reless

-ic he↔ro + ic → hero↔ic

frie↔ndly

b. 第二類 (強勢移動なし)

-er spe↔ak + er → spe↔aker

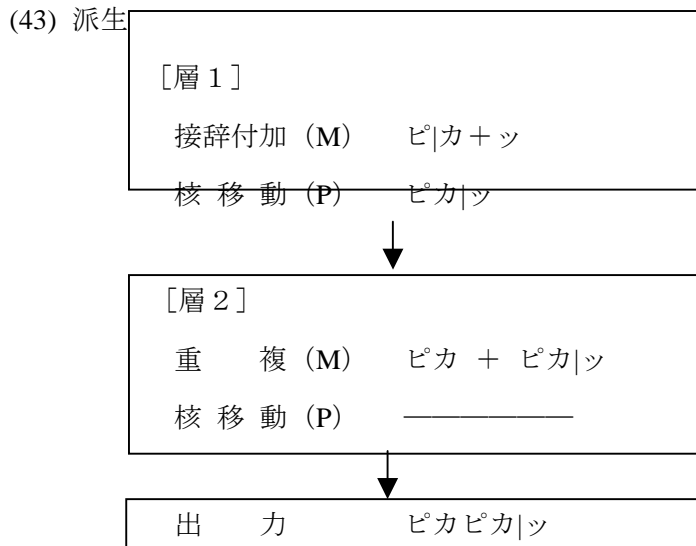
-ful be↔auty + ful →

→ coura↔geous -less ca↔re +

-ly frie↔nd + ly →

この対比に敷衍して捉えると、オノマトペの接尾辞は英語の第一類接辞に、重複子は第二類接辞にそれぞれ比類できる。Siegel (1974) の「レベル順序付けの仮説 (Level Ordering Hypothesis)」によれば、英語の場合、音韻的に活性な派生要素はそうでない派生要素に先駆けて語形成に参加することが明らかにされているが、この派生順序はオノマトペの語形成においても同様に成り立つと考えられる。すなわち、音韻的に活性な派生要素である接尾辞による語形成 (接辞付加) が先行し、その後に音韻的に不活性な派生要素である重複

子による語形成（P 重複）が起こるといった順序が想定できるのである。この順序を語彙音韻論的含意の下で形式化したのが(43)である*¹²。



接辞形の派生と P 重複形の派生は離接的に起こるのではなく、両者は連続的な関係にある。このプロセスでは形態論的派生 (M) と音韻論的派生 (P) が交互に連動しつつ段階的に生じる。まず [層 1] において接辞付加が生じると同時に核移動が起こり、接辞形オノマトペ「ピカ|ッ」が形成される。この形式は [層 1] の出力であると同時に続く [層 2] の入力でもあり、[層 2] に入力された「ピカ|ッ」に対して重複語形成が生じることによって P 重複形が形成される。ただし、[層 2] においては核移動が不活性であることにより、接辞形と同じ位置に核を含んだ形「ピカピカ|ッ」が最終的な出力として得られる。

この形式化の利点は、(41)に示した体系の性質を十分に説明できる点にある。先ほど、接辞形とは重複子の数が「0」に設定された P 重複形であると述べたが、(43)の分析はこの記述と矛盾しない構造を持っている。重複子の数が「0」であるということは、換言すれば [層 2] のプロセスが欠落していることを意味する。すなわち、[層 1] の派生が終了した時点で出力される形が接辞形オノマトペなのであり、その後 [層 2] へと派生が進行した形が P 重複形なのである。

2.4.4 まとめ

本節では接辞形オノマトペの音節構造ならびに韻律構造を記述的に明らかにするとともに (=34, 35)、アクセントに起こる核移動現象を手掛かりとして接辞形と P 重複形が極め

て密接な派生関係をなしていることを明らかにした。接辞形と P 重複形は形態論的には異なる類型（接辞形：重複形）に分類されるオノマトペである。しかし、韻律的側面に着目すると、同一の韻律構造(40)が共有されていることから両者が基本的に同じ特性を示すオノマトペであることを明らかにすることができる。さらに本節では、接尾辞と重複子の音韻的活性性の違いを捉えることによって接辞形と P 重複形の語形成過程を語彙音韻論的なモデル(43)で一般化し、両者の類縁性をより明示的な形で示した。

2.5 強調形オノマトペ

接辞形や重複形などの既成の派生形式に対して促音をはじめとする特殊モーラが挿入された形態には**強調**の機能が伴うと考えられている（黒田 1967, Hamano 1986, 1998, 田守 1991, 田守・スコウラップ 1999）。派生形式から作り出される強調形オノマトペには、接辞形を強調した形（接辞強調形：44a）と S 重複形を強調した形（重複強調形：44b）の二通りのタイプがある。

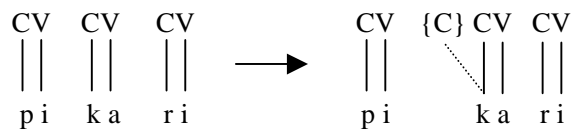
- (44) a. ピタリ → ピッタリ / ドカン → ドッカン
 b. ピカピカ → ピッカピカ → ピッカピッカ

古くは小林（1935）の形態分類にみるように、従来、オノマトペの強調形として主に考察の俎上に置かれてきたのは接辞形をベースとする(44a)のタイプであった。とりわけ、黒田（1967）が「ピッタリ」型の強調形に対して「リ延長強勢擬容語」といった独特の名称を設けていることから推察されるように、リ語尾を伴う接辞強調形には独特の位置づけが与えられることが多い。これに対して重複形をベースとする強調形(44b)については、管見の限り田守（1991）などに関連する記述が多少見られるものの、全体としては言及される機会は意外と少ない。これは重複強調形の形成過程が比較的単純かつ生産的であること（村田 1993）と無縁ではないと考えられるが、那須（1999a, b）が指摘するように重複強調形の形成過程は単純ではありながらも決して無秩序な振る舞いを示しているわけではなく、むしろ強調辞の挿入位置をめぐっては精緻な韻律計算が作用している。そこで本節では、従来言及される機会の多かった接辞強調形だけでなく重複強調形も考察の対象に含めた上で、強調辞の挿入箇所およびその具現形のあり方を中心に両者の特性の違いを探る。

2.5.1 強調辞

接辞強調形／重複強調形の違いを問わず，強調語形成では派生形式の語中に特殊モーラが強調辞として挿入されるという共通の作用が起こる。Hamano (1986, 1998) は強調辞の実体を子音スロット {C} として定義しているが，その含意するところに従えば，たとえば「ピカリ → ピッカリ」の派生の様子は次のように捉えられる。

(45) ピカリ → ピッカリ



しかし，子音を挿入する操作として強調語形成の性質を位置づけることは大方の予測においては妥当だと言えるが，母音を延ばすことによって強調の機能を与える次のような語形成に対してはこの位置づけは一般性を発揮できない。

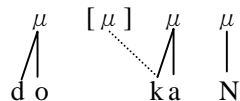
(46) トロリ → トローリ

ブラリ → ブラーリ

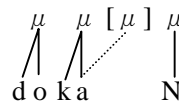
ドカン → ドカーン

この反例を踏まえ，子音添加による強調と母音延長による強調を同時に記述できるしくみをあらためて考えた場合，「モーラ」という韻律的な範疇こそが両者を統合するにふさわしい要素であることに気づく。以下に図示するように，モーラ節点 $[\mu]$ を強調辞として定義することによってどちらのタイプの強調形式に関しても一律にその構造が把握できる。

(47) a. 子音添加型（ドッカン）



b. 母音延長型（ドカーン）



この一般化から，強調とはモーラの挿入によって起こる韻律形態論的なプロセスであると述べることができる。すなわち，強調語形成もオノマトペに生じるその他の語形成現象と同様に韻律依存型の性格を備えた現象なのである。

強調語形成の基本的な性質が韻律形態素 μ の挿入操作にあることを踏まえると，この語

形成を記述する上では μ の挿入される「位置」が極めて重要な論点たり得ることが予測される。実際、(47a)と(47b)の対比から理解できるように μ の挿入位置は複数の箇所にもまたがっている。そこで、強調辞 μ の位置がどのような原理によって決定されているかについて検証する必要があるわけだが、以下に述べるように接辞強調形と重複強調形とは強調辞 μ の性質やその挿入位置に関して幾分異なる振る舞いが観察される。

2.5.2 接辞強調形

接辞強調形では、強調辞の入る位置に二通りの候補がある。ひとつは語幹の内部であり、もうひとつは語幹の末尾の位置である。

(48) 強調辞の位置 (μ = 強調辞)

- a. 語幹内部 [CV μ CV] ピッカリ, グンニャリ, ドッカン
- b. 語幹末尾 [CVCV] μ ピカーリ, グニャーリ, ドカーン

この二つの位置は共起可能な関係にあり、たとえば「ドッカーン」「パッチーン」などの強調形が適格であることから、ひとつの強調形において両方の位置に強調辞が挿入された形式も生成可能であることが分かる。

接辞強調形では、語幹内部(48a)に強調辞 μ が入る場合、その具現形として現われる特殊モーラの分節上の実体は相補分布の原則によって決まる(黒田 1967)。

(49) 相補分布

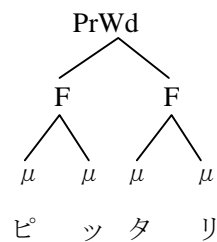
- | | |
|----------------|----------------|
| a. μ = 促音 | b. μ = 撥音 |
| suQpari (スッパリ) | zaNburi (ザンブリ) |
| piQtari (ピッタリ) | siNnari (シンナリ) |
| zaQkuri (ザックリ) | niNmari (ニンマリ) |
| baQsari (バッサリ) | huNwari (フンワリ) |

この相補分布のしくみは至極明瞭で、強調辞の直後に無声音が位置する構造では μ は促音として現われ、有声音が位置する場合には μ は撥音として現われる。稀に「フーワリ」のように半母音の直前に長音が現われるケースもあるが、これは(49b)からの音声的変異——すなわち、音声的に鼻母音として実現されやすい半母音直前の撥音から鼻音性が抜けた形

だと考えられる*¹³。一方、語幹末尾(48b)に強調辞 μ が入るケースではその具現形は常に長音に限られる。つまり、強調辞の具現形に関しては語幹内部と語幹末尾は互いに排他的な関係にある。

韻律構造に目を向けてみると、語幹内部に強調辞が挿入された形に関してはS重複形に見られたものと同様な定型的な鋳型構造「F+F」((16)参照)が生じていることが指摘できる。たとえば「ピッタリ」は二つの二項フットからなる定型構造をなしている(Tateishi 1989)。

(50) ピッタリ



筧(1993)は「ピッタリ」型の接辞強調形に関して、かなりの度合いで語彙化された形式であると述べている。平たく述べると一般語種と同等の性質を持つということだが、その指摘の通り一般語種の副詞の中からも「ほっそり(細), やんわり(柔), ひんやり(冷)」などのように(50)と同じ韻律構造を持つ語を容易に見つけ出すことができる。

2.5.3 重複強調形

重複強調形では、強調辞 μ の位置に関して三種類のバリエーションが生じる。

(51) 重複強調形

- a. ピッカピカ
- b. ピカッピカ
- c. ピッカピッカ

ただし、(51a)と(51c)は「語幹内部」に強調辞を含む点で単一の類にまとめることができ、(51b)は「語幹末尾」に強調辞が入った形であることから、重複強調形の場合も基本的に接辞強調形と同様、強調辞 μ の入る位置は次の二通りに絞られていると言える。

(52) 強調辞の位置 (μ = 強調辞)

- a. 語幹内部 [CV μ CV] ピッカピカ, ピッカピッカ
- b. 語幹末尾 [CVCV] μ ピカッピカ

しかしながら、強調辞の具現形として現われる特殊モーラの種類に関しては、重複強調形は接辞強調形とは異なる性質を示す。接辞強調形に見られるような相補分布の原則(49)が必ずしも働かないのである。田守(1991)の挙げる「ばっらばら」といった例からも窺えるように、重複強調形の場合、有声音の直前の位置に挿入された μ の具現形として(撥音ではなく)促音が現われるケースは稀ではない。また、「ズブズブ、ガバガバ、ギザギザ」のように語幹の子音が全て有声音から構成される重複形に強調辞を挿入した形について考えてみると、相補分布の原則に従った(53)のような形はむしろ不自然であることに気づく。

- (53) ズブズブ → *ズンズブ
 ガバガバ → *ガンバガバ
 ギザギザ → *ギンザギザ

総じて重複強調形では相補分布の原則が働かず、大抵のケースにおいて促音が強調辞 μ の具現形として現われやすい(例:「ズップズブ、ガッバガバ、ギッザギザ」)*¹⁴。田守(1991)によれば、同様な強調化の事例は一般語種においても観察されるという。たとえば「にっがーい(苦い)」「すっごい(凄い)」「なっがーい(長い)」などの形容詞の強調形には、重複強調形と同様、通常有標とされる有聲重子音構造が現われる。また、語幹末尾に μ が入る場合(52b)においてもやはり促音が専らに現われる。接辞強調形の場合この位置の μ は常に長音として実現されなければならないが、重複強調形ではこの縛りが起こらないばかりか、むしろ「*ピカーピカ」のような長音形は適格性を欠く。

一方、韻律的側面に関しても重複強調形には顕著な特性が伴う。この点に関して指摘しておくべき重要な事実とは、強調辞の入る位置に明らかに「適格でない位置」というものが存在するということである。以下に示す形は、重複強調形の形式として一応論理的には想定可能なものであるが、実際のところこれらの形はなぜか適格でない。

- (54) 不適格形
 *ピカピッカ, *ガチガッチ, *ホカホッカ, *グチャグッチャ

「*ピカピッカ」以下の形態に共通する特徴とは、強調辞が重複子の部分(S 重複形の後部

要素)に入っていることである。他方、適格な強調形(51)を見ると、強調辞は基体の部分のみに入っているか、あるいは基体と重複子の双方に入っているかのどちらかのパターンを示している。上述の非対称性は強調形におけるモーラ構造の違いとして次のように整理することができる。

(55) モーラ構造と強調辞の位置

- a. 適格形: $\mu[\mu]\mu - \mu\mu$ / $\mu\mu[\mu] - \mu\mu$ / $\mu[\mu]\mu - \mu[\mu]\mu$
 b. 不適格形: $*\mu\mu - \mu[\mu]\mu$

この整理からはひとまず「基体に強調辞 $[\mu]$ が存在しない場合、重複子は $[\mu]$ を含んではならない。」という記述的な条件化が可能である。さらに、「ピッカピッカ」など「 $\mu[\mu]\mu - \mu[\mu]\mu$ 」型の構造を持つ超強調形(田守 1991)が適格であるという事実からは、(56)のような十分条件が一般化できる。

(56) 十分条件

$$P(\text{RED} \in [\mu]) \supset Q(\text{Base} \in [\mu])$$

重複子が強調辞 $[\mu]$ を含んでいるならば、基体にも $[\mu]$ は含まれている。

重複形に対する強調のプロセスは、その形成過程の単純さゆえに従来さほど注目の集まらなかった語形成である。しかしながら、以上の考察から理解できるように、この語形成は従来通念的に考えられているほど「単純」ではなく、その背後には実に精緻な適格性条件が作用しているのである。

2.5.4 まとめ

本節では、強調辞が韻律形態素 μ として定義できることを示し、その具現形ならびに挿入位置をめぐって接辞強調形と重複強調形の相違点を明らかにしてきた。強調辞の具現形に関する両者の最も顕著な違いは相補分布の適用を受けるか否かという点に求められる。接辞強調形において強調辞 μ の具現形が相補分布の原則によって統御されるのに対し、重複強調形は相補分布の縛りからある程度解放された状態にあると言える。また、強調辞の位置をめぐっては接辞強調形も重複強調形も基本的に同様の性質を示すこと——すなわち、いずれにおいても語幹内部と語幹末尾の二通りの挿入位置が存在することを見た。

ただし、重複強調形の場合、強調辞 μ の挿入位置をめぐって(54)～(56)に述べた独特の振

る舞いが伴う。本節ではこの振る舞いに対し一応の分析として(56)を一般化した。しかしながら、なぜ(56)の条件が成立するのかという疑問——換言すると、基体に強調辞 μ が存在しない場合に重複子が μ を含んではならないのはなぜかという疑問は未だに残されている。(56)は強調辞の位置にまつわる言語事実をあくまで記述的な側面から条件化したものに過ぎず、この条件化がオノマトペの韻律特性とどのように関わるのかという点については未解決の課題として依然残されているわけだが、本研究では、この課題について引き続き第5章において詳細な検証を加える。

2.6 本章のまとめ

本章では、語幹（非派生形）・重複形・接辞形・強調形の四つの形態を取り上げ、その韻律構造ならびに語形成に見る韻律依存型の性格を明らかにしてきた。

オノマトペの形態は韻律構造に関知的な性質を持つ。すなわち、当該のオノマトペの構造を形態論的観点からではなく韻律構造に依拠して記述することにより、形態論的分析からは見えなかった構造上の一般性を炙り出すことができるのである。その事例として、語幹の構造が二項フット構造として一般化できること（=6）・重複形オノマトペにS重複形／P重複形の二種類の対極的な構造類型が存在すること（=22）・接辞形とP重複形が共通の韻律構造から派生される形式であること（=40, 43）を明らかにした。また、語形成過程に働きかける韻律的な原理については、①重複語形成の適格性を統御する音節数保存の条件(29)ならびに、②重複強調形での韻律形態素 μ （強調辞）の挿入位置を統御する十分条件(56)を明らかにした。

本章では、オノマトペの韻律依存型語形成を形態論的な類型（語幹・重複形・接辞形・強調形）に基づいて個別に論じてきた。いわば、形態の類型ごとに縦割りの分析を試みてきたわけだが、接辞形とP重複形の間に親密な類縁性が成り立っていること（=40, 43）からも明らかなように、形態論的な類型というものは必ずしも有意味な分析基準であるとは言えず、むしろかなり便宜的なものであることが分かる。これは、形態論的な類型に囚われない一般性がオノマトペの韻律構造に備わっているからにほかならない。以下の各章では、四拍鋳型構造（第3章）・アクセント構造（第4章）・音節構造（第5章）などの韻律的視点を考察の基軸に据えた上で、オノマトペの韻律依存型語形成の実態を横断的な形で分析して行く。

第 3 章

四拍性と韻律鋳型

3.1 はじめに

韻律依存型の語形成現象の中には、特定の韻律範疇からなる定型的な構造が出力の形式を決定するタイプのものがある。一例を挙げると、以下に示す日本語の愛称語形成では出力形が常に2モーラの構造（二項フット）をなすことがよく知られている（Poser 1990, Itô 1990, Mester 1990）。

(1) 愛称語形成

まりこ → まり（ちゃん）： (mari)_F

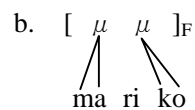
けんじ → けん（ちゃん）： (keN)_F

よしお → よっ（ちゃん）： (yoQ)_F

ゆうじ → ゆう（ちゃん）： (yuu)_F

こうしたタイプの語形成現象はしばしば「鋳型語形成 (templatic morphology)」と呼ばれる（McCarthy and Prince 1986）。その理由は、出力形式の構造があたかも一定の鋳型によって鋳造されるかのような振る舞いで生成されることによる。愛称語形成では二項フットが出力形式を作り出す韻律鋳型（prosodic template）として作用しており、(2)に示すように基体の分節の一部を鋳型の μ 節点に配置することによって語形成が起こる。

(2) 鋳型



韻律鋳型に基づく語形成分析の利点は、複数の形態に共有されている一般的な韻律構造を分節構造上の差異を超えて描出できる点にある。たとえば「まりこ」という名前から作られる愛称形(2)には「まり」「まこ」「まー」などいくつかのバリエーションが起こるが、それぞれの分節構造は異なっているとしても、韻律的な側面においては共通の性質（二項フット構造）が現われているのが分かる。

本章では、日本語オノマトペの語形成現象の中にも鋳型的な特性を示すプロセスが見られることを指摘した上で、各種語形成過程の分析を通じてオノマトペの韻律構造に見られる**四拍性**の特徴について論じる。本章で着目するのは、日本語オノマトペの中に4モーラの構造を持つ形態が目立って多いという事実である。「ピカピカ」「ポンポン」などの**S**重複形や「ピッカリ」「フンワリ」など語尾を含む接辞強調形（「リ延長強勢擬容語」（黒田1967））をはじめ、4モーラの大きさをなす形態は数量的にオノマトペ語彙の多くの部分を占めることから（国立国語研究所 1964）、4モーラというサイズがオノマトペにとって最も一般的な大きさであることがまず指摘できる。また、この4モーラの構造は単に既存語彙の大部分に見られる典型的なサイズとして位置付けられるだけでなく、新たな形態を作り出す際の適格性の基準としても働くことが指摘されている（那須 1995, 1996）。本章ではこれらの先行研究での指摘を踏まえて4モーラから構成される韻律鋳型（**四拍鋳型**）を提案し、オノマトペの語形成においてこの鋳型を満たすことが適格性条件の一つとして要求されていることを論じる。

本章では、以下述べる手順によってオノマトペの語形成過程における四拍鋳型の働きについて探って行く。まず **3.2** 節では、基本的事実としてオノマトペに現われる4モーラ構造の事例を紹介する。取り上げる形態は **S** 重複形・接辞強調形・接辞形の三種類である。このうち **S** 重複形と接辞強調形では語形成のプロセスだけで4モーラのサイズが作り出されるが、接辞形オノマトペの場合は語形成のプロセスだけでは4モーラの構造が作り出せず、助詞「と」の**韻律化**が起こることによって4モーラのサイズが形成される点が特徴である。続く **3.3** 節では、分析のモデルである四拍鋳型のしくみについて述べた後、各形態における韻律的派生の様子を具体的に分析する。この節の議論では、語形成のプロセスだけでは4モーラのサイズに満たない接辞形オノマトペの振る舞いに焦点を当て、四拍鋳型において助詞の韻律化がどのような形で実現されるのかについて考察する。さらに **3.4** 節では、本来的に4モーラの大きさをなし得ないオノマトペを取り上げ、こうしたオノマトペにおいても潜在的に四拍構造を生成する志向性が働いていることを、促音添加現象を通

じて明らかにする。

3.2 四拍性

3.2.1 四拍構造のオノマトペ

日本語のオノマトペの中には4モーラのサイズからなる形態が目立って多い。文学作品に現われるオノマトペを対象にその音韻的長さを調べた大坪（1982）の研究によれば、用例として採った1595語のうち約4割強のオノマトペが4モーラからなるもので占められているとの報告がある。Oda（2000）の研究でも同様の報告がなされており、1630語の対象語のうち45%のオノマトペが4モーラの長さを持つことが明らかにされている。これらの報告が示すように、4モーラという韻律的なサイズは日本語オノマトペにとって典型的な大きさであり、語形成のプロセスにおいて最も現われやすい無標のサイズであることが分かる。本研究ではこの特性を「四拍性」と呼ぶ。

4モーラのサイズをなすオノマトペとしては、日本語オノマトペの代表的な形態とされるS重複形がまず挙げられる。

(3) S 重複形

ピカピカ、ポキポキ、ポンポン、スイスイ、ザーザー

また、接辞形オノマトペに強調が作用した形態（接辞強調形）もS重複形と同様に4モーラのサイズからなる。

(4) 接辞強調形

ポッキリ（＜ポキリ）、ドッシリ（＜ドシリ）、パッチリ（＜パチリ）、
ベッタリ（＜ベタリ）、グッタリ（＜グタリ）、フンワリ（＜フワリ）、

これら4モーラのサイズからなるオノマトペには、単に語彙数が多いというだけでなく、その他にも際立った特徴が備わっている。田守（1983, 1991）は、オノマトペの形態の中にそれ自体で独立して文中に現われることのできるものとそうでないものがあることを指摘した上で、4モーラの大きさを持つオノマトペがおしなべて高い語彙性を示すことを明らかにしている。「独立して文中に現われることができる」とは、助詞「と」を伴わなく

でも当該のオノマトペが適格性を失わないということで、田守（1983, 1991）、笥（1993）および田守・スコウラップ（1999）は語彙的に安定性の高いオノマトペほど助詞「と」を伴わずに現われやすいと述べている。その指摘の通り、上に挙げた4モーラ構造のオノマトペはいずれも助詞「と」を伴わずに用いられるという共通の特性を示す*¹。

(5) a. S 重複形

ポンポン投げる。
スイスイ泳ぐ。
ザーザー降る。
ピカピカ光る。
コロコロ転がる。

b. 接辞強調形

バッサリ切る。
パッチリ開く。
フンワリ浮かぶ。
ベッタリ貼る。
ピッタリ収まる。

翻って、語彙性の「低い」オノマトペにはどのようなものがあるのだろうか。これも田守（1983）・笥（1993）の報告によるが、(6)に示す接辞形オノマトペなどは語彙性に乏しいタイプの形態だとされる。

(6) 接辞形

a. *ピカリ光る。

*バサリ切る。

*ベタリ貼る。

*ピタリ収まる。

*ボタン倒れる。

*パチン切れる。

*ガチャン壊れる。

*ボタン零れる。

*グサッ刺す。

*チラッ見る。

*バタッ倒れる。

b. ピカリと光る。

バサリと切る。

ベタリと貼る。

ピタリと収まる。

ボタンと倒れる。

パチンと切れる。

ガチャンと壊れる。

ボタンと零れる。

グサッと刺す。

チラッと見る。

バタッと倒れる。

注目すべきは、「ピカリ、バサリ…」以下の接辞形オノマトペがそれ自体で4モーラの大きさを構成しない点である。同時に、助詞「と」を伴わない3モーラの形式(6a)が適格でな

い一方で、助詞を伴って4モーラの大きさを獲得した(6b)の形式が適格であることも注目すべき事実である*²。このことは、4モーラに満たない形式が語彙性に欠けるとする田守の観察を十分に裏付ける事実であることに加え、助詞「と」の存否が形態の適格性を左右する要因として働いていることを窺わせる事実でもある。

3.2.2 助詞の韻律化

オノマトペにおける四拍性の意味合いをさらに明瞭に理解するには、以下に述べる対比が最も効果的な事例となろう。(7)に示すのは接辞形オノマトペと接辞強調形の対比である。両者は互いに語形成上の類縁性の深い形態であるが、助詞「と」の共起様態をめぐっては明らかな相違を示す。接辞形オノマトペでは(7a)に示すように助詞「と」を伴わない形式は適格でない。ところが、接辞強調形への派生が起これると一転して助詞「と」による支えが不要になるのである(=7b)。

- | | | |
|------------------|---|-----------------|
| (7) a. 接辞形 | | b. 接辞強調形 |
| * <u>ピ</u> カリ光る。 | | <u>ピ</u> ッカリ光る。 |
| * <u>バ</u> サリ切る。 | → | <u>バ</u> ッサリ切る。 |
| * <u>ベ</u> タリ貼る。 | | <u>ベ</u> ッタリ貼る。 |

この事実からは次の二つの性質を読み取ることができる。まず、不適格な形(7a)が3モーラの大きさしか持たない一方で適格な形(7b)が4モーラに達していることから、四拍性というものが形態の適格性を決定するひとつの基準として働いていることが窺える。また、4モーラの大きさを持つ(7b)のオノマトペでは助詞「と」が不要である一方で、4モーラに満たない(7a)のオノマトペでは助詞「と」が義務的に必要とされることから、オノマトペに共起する助詞「と」が明かに四拍性と深い関わりを持つ要素であることも理解できる。オノマトペのモーラ数と助詞「と」の共起様態の間に一定の相関性が成り立っている様子は、これまで観察してきた全ての事例に一貫して認められる。

(8) モーラ数と助詞の共起

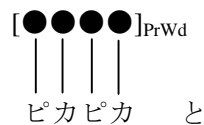
- | | |
|---------------------------|--------------------------|
| a. 4モーラ未満(「と」; 義務的) | b. 4モーラ(「と」; 随意的) |
| ピカリ { * ϕ / と } 光る。 | ピカピカ { ϕ / と } 光る。 |
| パチン { * ϕ / と } 切れる。 | ポンポン { ϕ / と } 投げる。 |

グサッ { * ϕ / と } 刺す。

バッタリ { ϕ / と } 倒れる。

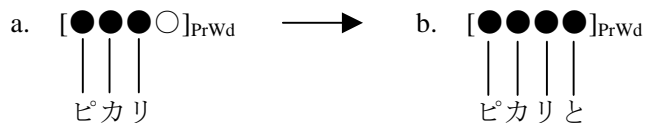
この相関性は、鋳型的な概念によって捉えることが可能である。4モーラからなる構造がひとまとまりの韻律語 (prosodic word) をなすと考え、この韻律語の充足状況に応じて助詞の存否が決まる次のようなしくみを想定することができる。まず S 重複形や接辞強調形のようにそれ自体で4モーラをなすオノマトペにおいて助詞「と」が必ずしも必要とされないのは、オノマトペの形態そのものによって4モーラの韻律語が完全に満たされてしまうことによる。

(9) S 重複形



「ピカピカ」ではオノマトペ本体が4モーラの鋳型を満たしてしまうので、助詞「と」は鋳型の中に入ることができず、その外側にあぶれてしまう。すなわち、S 重複形や接辞強調形で助詞「と」が随意的な振る舞いを見せるのは、鋳型の中に助詞の居場所が作られないためだと分析できる。他方、4モーラ未満の形態で助詞「と」が義務的に共起するのは、オノマトペの形態だけでは韻律語の中に空所が残ってしまい、この空所を埋めるために助詞が強制的に編入されるからだと分析できる。この様子を表したのが(10)である。

(10) 韻律語の充足



接辞形オノマトペにおいて助詞「と」が義務的に共起するのは、3モーラ分の大きさしか持たない(10a)の構造に韻律的な安定性を与えるべく助詞「と」が韻律化された結果として分析できる*³。(10)に見る振る舞い——すなわち、助詞「と」が韻律語の中に編入されるあり方を、本研究では「**助詞の韻律化**」と呼ぶ。

3.3 鋳型分析

この節では、上に述べたしくみを一般的な韻律鋳型のモデルに基づいて形式化しなおし、オノマトペにおける四拍性の特徴ならびに各種オノマトペにおける語形成のプロセスについて具体的な分析を試みる。

3.3.1 四拍鋳型

那須(1995)は、オノマトペの語形成に観察される四拍性の特徴を捉えるモデルとして、四つのモーラを含む韻律鋳型(11)を提案している。

(11) 四拍鋳型

$$[\mu \mu \mu \mu]_{PrWd}$$

鋳型に含まれる「 μ 」節点は、先ほどの(9)(10)の図における「●／○」に相当する。この鋳型は単にオノマトペの構造を表示するための式型なのではなく、第一義的にはオノマトペの語形成を統御する装置としての役割を持つ。すなわち、語形成の出力として得られる韻律語が4モーラの大きさをなしていることを要求する働きがある。この働きを一般化して述べたのが次の「充足条件」である (McCarthy and Prince 1986)。

(12) 充足条件

鋳型内に含まれる全ての節点は強制的に充足されなければならない。

充足条件は、あらゆるタイプの韻律鋳型に共通して課される普遍的な規約だと考えられている (McCarthy and Prince 1986)。四拍鋳型においてもこの条件は厳密に守られなければならない。したがって、鋳型の充足状態が(13)の段階にある場合には当該の形式は不適格と判断されることになる。

$$(13) \quad \begin{array}{lll} \text{a.} & *[\mu \mu \mu \mu]_{PrWd} & \text{b.} & *[\mu \mu \mu \mu]_{PrWd} & \text{c.} & *[\mu \mu \mu \mu]_{PrWd} \\ & \begin{array}{ccc} | & | & | \\ \text{X} & \text{X} & \text{X} \end{array} & & \begin{array}{cc} | & | \\ \text{X} & \text{X} \end{array} & & \begin{array}{c} | \\ \text{X} \end{array} \end{array}$$

要素 X と連結関係にある鋳型内の μ 節点は、必ずしも常に(13)に示したような隣接的な関

係にあるとは限らない。一部が隣接状態にない(14)の構造も充足条件を満たさないものとして排除される。

$$(14) \quad *[\begin{array}{c} \mu \\ | \\ X \end{array} \begin{array}{c} \mu \\ | \\ X \end{array} \mu \begin{array}{c} \mu \\ | \\ X \end{array}]_{PrWd}$$

一方、鋳型を満たした状態とは、全ての μ 節点がいずれかの要素 X と連結関係を構成する(15)の状態を言う。この場合、要素 X の数と μ 節点の数は必ずしも対応していなくてもよい。つまり、一つの要素 X が複数の μ 節点に連結した(15b)の構造（多重連結）も充足条件を満たすと考える。

$$(15) \quad \text{a. } [\begin{array}{c} \mu \\ | \\ X \end{array} \begin{array}{c} \mu \\ | \\ X \end{array} \begin{array}{c} \mu \\ | \\ X \end{array} \begin{array}{c} \mu \\ | \\ X \end{array}]_{PrWd} \quad \text{b. } [\begin{array}{c} \mu \\ | \\ X \end{array} \begin{array}{c} \mu \\ | \\ X \end{array} \begin{array}{c} \mu \\ \diagdown \\ X \end{array} \begin{array}{c} \mu \\ | \\ X \end{array}]_{PrWd}$$

重要なのは、鋳型に含まれる μ 節点が余すところなくいずれかの要素 X と連結関係をなしていることである。ただし、自律分節理論において示された一般的制約「連結線交差禁止制約（Line-Crossing Ban : Goldsmith 1976, 1990）」に反する(16)のような連結構造は四拍鋳型のモデルにおいても許されない*⁴。

$$(16) \quad *[\begin{array}{c} \mu \\ | \\ X \end{array} \begin{array}{c} \mu \\ | \\ X \end{array} \begin{array}{c} \mu \\ \diagup \\ X \end{array} \begin{array}{c} \mu \\ \diagdown \\ \end{array}]_{PrWd}$$

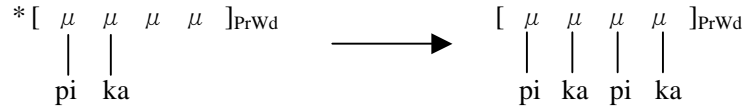
3.3.2 鋳型の充足

前節で論じた規約を踏まえて実際の語形成の分析に入りたい。まずは助詞「と」を随意的に伴うオノマトペ——すなわち語形成のプロセスのみで四拍鋳型が満たされるタイプの形態について見る。

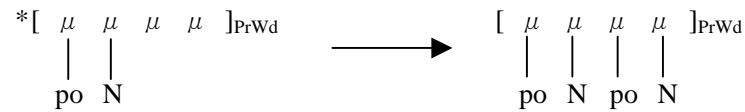
「ピカピカ、ポキポキ、ポンポン、スイスイ、ザーザー」などの **S** 重複形では、語幹および重複子の分節構造が四拍鋳型に配置されることによって鋳型内の μ 節点が漏れなく満たされる。

(17) S 重複形

a. 「ピカピカ」



b. 「ボンボン」

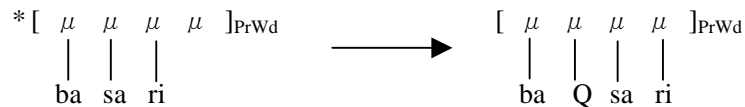


このプロセスについてやや詳しく述べると、派生の第一段階では語幹の分節が鋳型に写像されて矢印左側の構造が得られ、続いて重複子の分節がその右側に写像されて派生が終わる。派生後の構造（矢印右側の構造）を見て分かるように、S 重複形では語形成のプロセスが生じることによって μ 節点が全て満たされてしまうが、このことは助詞「と」が韻律化されるべき空所が鋳型内に残らないことを意味している。すなわち、S 重複形において助詞「と」が必ずしも伴わなくてもよいのは、語形成に伴って鋳型内に含まれる μ 節点が完全に充足されることにより、韻律化の余地が生じないためである。

鋳型の中に空所を残さないという点では「バッサリ、ポッキリ、ドッシリ、パッチリ、ベッタリ、グッタリ、フンワリ」などの接辞強調形も同様である。「バッサリ」を例に鋳型の充足状況を以下に示す。

(18) 接辞強調形

「バッサリ」



矢印右側の構造に見るように、接辞強調形においても語形成と同時に鋳型が完全に満たされるため、助詞「と」の韻律化を誘発する空所の μ 節点が生じない。

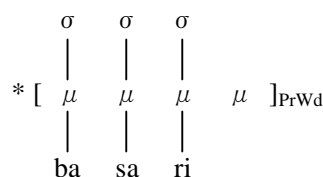
ところで、接辞強調形(18)における韻律構造の派生については補足の説明が必要である。(18)を見ると、派生前と派生後の構造において分節の配置箇所が異なっていることに気づ

く。ベースの形である「バサリ」では後半の2モーラ「サリ」がそれぞれ第2・第3 μ 節点に配置されているのに対し、出力形「バッサリ」ではこれらのモーラがベースの位置から1モーラ分右側にずれた位置、すなわち、第3・第4 μ 節点に配置されている。この「ずれ」のしくみを妥当な形で示さない限り、鏝型に基づく分析は単なる場当たりの説明に陥ってしまう恐れがある。

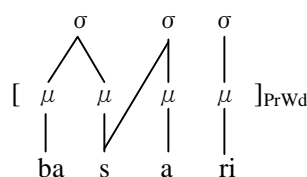
(18)の表示に問題があるとすれば、語形成に伴って現われる促音を音素レベルの表示/Q/で捉えている点であろう。言うまでもなくこの捉え方は便宜的なものにすぎず、韻律論的な含意を伴わない。促音の生成と分節の配置箇所に見る「ずれ」のしくみを妥当に説明するためには、音節節点を含めた次のような表示によって接辞強調形の派生過程をあらためて捉えなおす必要がある。

(19) 再音節化

a. バサリ



b. バッサリ



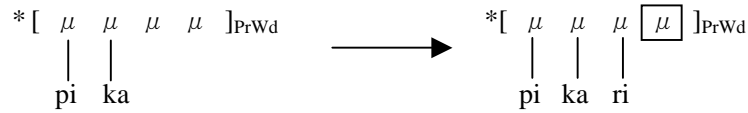
ベースの形態「バサリ」では分節が左から右へ順序良く鏝型に配置されているが、強調形への派生が起ると再音節化が生じ、その結果分節の配置箇所に「ずれ」が生じる。韻律論的な枠組みでは、促音の実体とは音節の右端に位置する子音（末尾子音）のモーラとして捉えられる。上の「バサリ→バッサリ」の事例に即して述べると、強調化とは第2音節/sa/の頭子音/s/が第1音節/bas/の末尾子音に組み換えられることによって生じる過程として分析できる。つまり、/s/が新たにモーラの資格を得ることにより、その右側に位置する残りの分節がそれぞれ1モーラ分右側の節点に再配置されるのである。これが接辞強調形に起こる「ずれ」のしくみである。

3.3.3 接辞形の派生と助詞の韻律化

語形成のプロセスのみで鏝型が充足されるS重複形・接辞強調形とは異なり、接辞形オノマトペでは鏝型の中に空所が残る点が特徴である。

(20) 接辞形

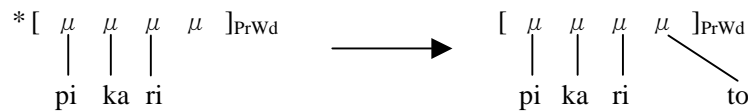
「ピカリ」



語幹「ピカ」に接尾辞「リ」が結合した形「ピカリ」では鋳型の右端の μ 節点が充足されないまま残ってしまい、充足条件(12)に違反するため適格な出力として認可されない。この空所を残した構造の不備を補う方略として働くのが 3.2.2 節で提案した助詞「と」の韻律化のプロセスである。(21)に示すように、助詞が韻律化された構造では鋳型に含まれる μ 節点が完全に充足されることによって充足条件に適合した状態が得られている。

(21) 韻律化

「ピカリと」



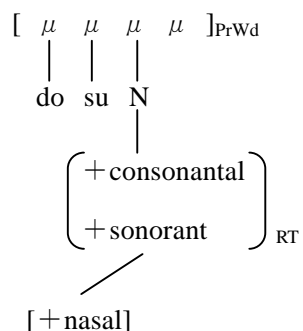
助詞「と」は文法語のレベルではあくまでもオノマトペ本体とは別個の単位であるが、音韻構造においては四拍性を満たす一員として働いている。すなわち、接辞形オノマトペにおいて助詞「と」が義務的に共起するのは、充足条件に適合する韻律構造を作り出すために助詞「と」が鋳型の中に編入されるためだと分析できる。

3.3.4 促音形の派生過程

ところで、接辞形オノマトペには接尾辞としてリ語尾を含むもの（「ピカリ」）・撥音を含むもの（「ピカン」）・促音を含むもの（ピカッ）の三つのタイプがあるが、このうち促音を含む接辞形（促音形）の韻律的派生のあり方だけは他二者とは異なることが那須（1995）によって指摘されている。リ語尾形ならびに撥音形に現われる接尾辞（リ語尾・撥音）が CV 構造や鼻音素性といった分節レベルの構造を持つ要素であるのに対して、促音だけは韻律レベルの構造においてのみ派生される性質を持っているからである。この点について多少詳しく論じておきたい。

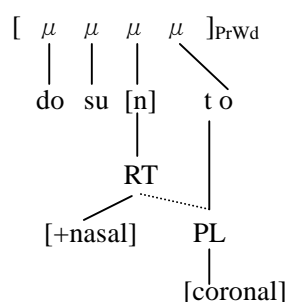
まず、リ語尾形と撥音形では第3 μ 節点に対して特定の分節要素を配置することによって接辞付加の派生が起こるのが特徴である。撥音形「ドスン」を例に、第3 μ 節点に接尾辞が配置される様子をやや詳しく図示したのが(22)である。

(22) 撥音形



撥音/N/とは、それが鼻音であることを示す素性の集合[+consonantal, +sonorant, +nasal]にほかならない。すなわち、撥音形における接辞の生成とはこれらの素性構造を第3 μ 節点に与える作用を意味する。なお、撥音の調音位置素性は続く助詞の韻律化のプロセスを経た後に助詞「と」の頭子音/t/から割り振られる形で決定される（逆行同化=23）。

(23) 同化



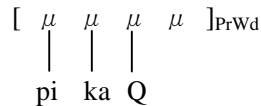
(22)(23)に示したように、リ語尾形ならびに撥音形の派生過程に見る特徴は、[1]第3 μ 節点に特定の分節要素が配置されることによって接尾辞が生成される点と、[2]接尾辞の配置が生じた後に助詞「と」の韻律化が生じることの二点である。一方、促音形の派生過程はこの二点のいずれに関しても異なる性質を伴う。

まず[1]に関しては、リ語尾や撥音が具体的な分節構造の形で生成されるのに対して、促音の場合は独自の分節構造を持たない点が異なる。促音に対し/Q/という抽象的な記号を

与えた上で促音形の構造をたとえば(24)のように表示することも可能であろうが、この表示はあくまで便宜的なものに過ぎない。

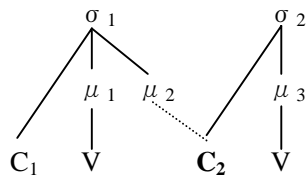
(24) 促音形

「ピカッ」



促音とは/Q/といった分節論的概念で表される<要素>なのではなく、より本質的には、韻律的に生成される<構造>として捉えられるべき実体である。韻律理論の視点から見ると、促音の構造は次のような二重連結構造として記述できる (Itô 1986)。図中の点線で示したように、促音は後続音節 σ_2 の頭子音 C_2 がその前の重音節 σ_1 の末尾に位置するモーラ μ_2 と連結関係をなすことによって生成される。このとき、分節構造には何ら変化が起こらず、韻律構造のみが再編成されている点に留意したい。

(25) 促音



このため促音形の派生過程でも、促音の生成に際しては専ら韻律構造の再編のみが生じている可能性が高い。換言すると、リ語尾形や撥音形の派生過程に見られたような特定の分節を第3 μ 節点に付与するプロセス(22)は、促音形の派生過程には伴わないと考えられる。

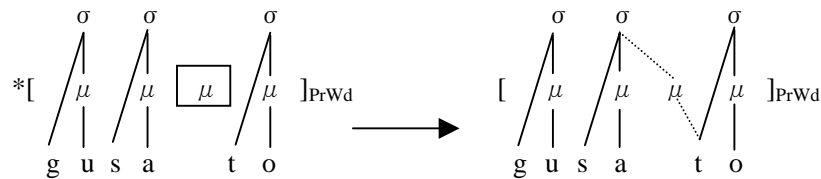
また、[2] 接尾辞の配置と助詞の韻律化の順序関係に関しても違いが見られる。リ語尾形や撥音形では接辞付加が起きた後に助詞の韻律化が続くが、促音形の場合はこれとは逆の順序で派生が生じている可能性が高い。と言うのも、促音がその直後に位置する子音の存在を前提として派生される韻律的な要素であることを踏まえると、促音形の派生過程では促音生成の前提となる子音がまず必要になるからである。この子音の供給元となるのが助詞「と」である。すなわち、促音形においては接尾辞の生成に先駆けて助詞「と」の韻律化が生じていると考えられ、その派生過程は(26)のように記述できる。(26a)の表示は、

接尾辞（促音）の派生に先駆けて助詞「と」が韻律化された状態を示している。鋳型の右端の μ 節点に助詞が韻律化されることにより鋳型内の第3 μ 節点に空所が残されるが、この空所は続く逆行同化の過程を通じて(26b)のように充足される。

(26) 促音形の派生

a. 助詞の韻律化

b. 逆行同化



この表示で注目したいのは、促音形の派生過程では分節構造 (/gusato/) に一切変化が起きないことである。先に(25)でも述べたように、促音は専ら韻律構造を再編成することによって生成される性質を持つが、(26)の分析では促音のこうした韻律要素としての性格が十分に捉えられている。

3.4 非派生形と四拍鋳型

四拍鋳型に基づく語形成分析によって得られる最大の利点は、オノマトペに備わる四拍性の韻律特徴が形式的に捉えられることと、接辞形オノマトペに見る助詞「と」の義務的な共起様態の動機を理論的に説明できることであるが、オノマトペの語形成の中には、このほかにも四拍鋳型分析の妥当性を支持する現象が見られる。この節では1音節語幹の非派生形に生じる促音添加現象を通じて、四拍鋳型がオノマトペにとって有意味な韻律構造であることを論じる。

3.4.1 促音添加現象

オノマトペの中には、本来的に4モーラ未満の構造（過小構造）しか構成し得ないタイプの形態が存在する。(27)に挙げる1音節語幹の非派生形がそのようなタイプの形態で、助詞「と」を伴った形でさえも3モーラの大きさしか構成できない。

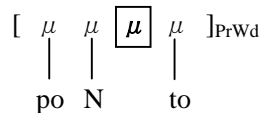
(27) 非派生形

ポンと、ピンと、パツと、キュッと、ヒューと、ザーと、グイと、ヒョイト

ここで問題になるのは、これらのオノマトペが3モーラの大きさしか持たないにも関わらず適格性を示す点である。これまで主張してきた四拍鏝型による分析に基づくと、非派生形の韻律構造は充足条件を満たさないため本来ならば不適格な形式と判断されるはずである。実際、「ポンと」では四拍鏝型の中に空所が残ってしまう*⁵。

(28) 過小構造

「ポンと」



それにも関わらず、「ポンと」以下の非派生形が適格な形態であるところに大きな矛盾が生じているのである。

しかしながら、結論を急ぐ前にもう少し詳しく言語事実を観察してみると注目すべき現象に出会う。非派生形を構成する1音節語幹には子音終わりの形態(CVN「ポン」, CVQ「パツ」)と母音終わりの形態(CVV「ザー」, CV_iV_j「グイ」)とがあるが、このうち後者に関しては話し言葉においてはしばしば促音を伴った次のような形態をとりやすい。

(29) 促音添加形

ザーッと、スーッと、ヒューッと、ギューッと、ボーッと、
プイッと、グイッと、ツイッと、ヒョイッと、ポイッと

母音終わりの非派生形ではむしろ促音を伴った形のほうが自然である。たとえば、雨が激しく降る様子を表現するとき、話し言葉では「雨がザーと降る」といった表現よりも「雨がザーッと降る」のような促音添加形を用いた表現がとられやすい(田守・スコウラップ1999)。ここで、促音を含まない形(「本来形」)と促音を含んだ形(「添加形」)とを比べるとそのモーラ数に違いが生じていることに気づく。本来形(27)が助詞「と」を伴っても3モーラの大きさしか含まないのに対し、添加形(29)は4モーラの大きさに達しているのである。

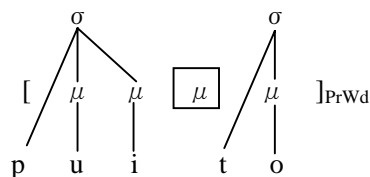
ここに、非派生形においても四拍性の韻律特徴が現われている様子を垣間見ることができ。過小構造を持つ非派生形においても四拍構造を希求する韻律的な志向性は潜在的な形ながらも依然として働いており、促音添加という現象を通じてその志向性が具現化されているのである。

3.4.2 動機としての四拍性

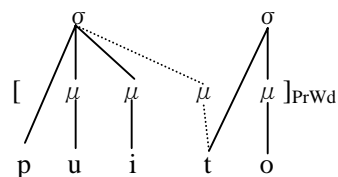
促音添加現象を四拍鋳型に基づいて分析してみよう。促音を含まない本来形では(30a)に見るように鋳型の中に空所が生じる。この構造において促音が生成されると、韻律構造が再編成される結果、かつて空所であった第3 μ 節点が(30b)のように満たされる。

(30) 空所の補充

a. 本来形



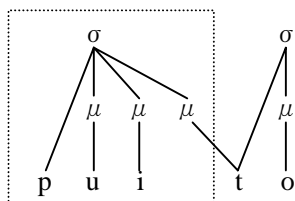
b. 添加形



この分析から明らかなように、非派生形に起こる促音添加現象は四拍鋳型を満たすべく生じる現象として位置づけられる。また、このプロセスにおいて促音は四拍鋳型に生じた空所を最終的に埋め合わせる役割を果たしている。言うなれば、促音は韻律的な補償効果を発揮しているのである。

ところで、音韻過程の経済性の観点から考えると、3モーラの大きさにして既に適格な本来形に対してさらに新たな構造変化をもたらす促音添加現象は、一面では余剰なコストを伴うプロセスだと言える。しかも促音が添加されることによって有標性の高い超重音節(31)が形成されることを鑑みると、このプロセスではあたかも、不経済かつ有標な構造が無用に作り出されているかのようにも見える*⁶。

(31) 超重音節



こうしたコストのかかる構造変化があえて起こるのは一体なぜだろうか。

ここで先ほどから検証を続けてきた四拍性の韻律特徴に目を向けると、この疑問に対する答えは容易に見つけ出すことができる。(30a)と(30b)はたしかにいずれも適格な形態であることには違いはないが、両者を充足条件(12)に照らして比較してみると、明らかに(30b)のほうが適合性の高い形態であることが分かる。(30b)は、構造変化による多少のコストを伴っていても一方では四拍性の要求を完全に満たしている。すなわち、促音添加による構造変化は決して無用なコストなのではなく、四拍性という強い要求を満たすために必要な構造変化——いわば「代償」——なのである。こうした代償を払ってまでも促音添加が起こるということは、それだけ四拍性がオノマトペにとって重要な韻律特性であることを意味していると言えよう。

3.5 本章のまとめ

本章では、日本語オノマトペの形態に見られる四拍性の特徴を四拍鋳型のモデルに基づいて分析し、次の諸点を明らかにした。

第一に、オノマトペの中に助詞「と」を必要としない形態（S 重複形・接辞強調形）と、これを義務的に必要とする形態（接辞形）とがあることを指摘し、両者の非対称性が四拍鋳型の語形成モデルによって統一的に説明できることを明らかにした。接辞形オノマトペにおいて助詞「と」が義務的に共起するのは、接辞付加の過程だけでは四拍鋳型が十分に満たされないことによる。その場合、鋳型の右端に空所が残されることになるが、この空所に助詞「と」が編入されることによって四拍鋳型が完全に充足される（助詞の韻律化）。一方、S 重複形ならびに接辞強調形において助詞「と」が必要とされないのは、語形成過程そのものによって鋳型内の μ 節点が完全に充足されてしまうことによる。

第二に、接辞形オノマトペのうち促音を接尾辞として伴う形（促音形）だけは、他のタイプの接辞形（リ語尾形・撥音形）と派生のあり方が異なることを明らかにした。リ語尾形および撥音形では分節構造が第3 μ 節点に付与されることによって接尾辞が形成され、それに引き続いて助詞「と」の韻律化が起こるが、促音形においてはまず助詞「と」が韻律化され、その頭子音が第3 μ 節点に拡張することによって派生が完了する。こうした派生順序の逆転が生じるのは、促音が分節的な実体なのではなく韻律的に派生される構造であることによる。

第三に、非派生形オノマトペにおいて生じる促音添加現象を通じて、本来4モーラのサイズを形成しないオノマトペにおいても潜在的に四拍構造を希求する志向性が働いていることを明らかにした。促音添加によって四拍鋳型が満たされることから、この現象もまた他の語形成現象と同様に四拍構造の生成を動機とする現象であると考えられる。

本章では、様々な語形成過程に観察される四拍性の特徴を通じてオノマトペの韻律特性の一端を明らかにしてきたが、そもそもオノマトペにおいてなぜ「4モーラ」の構造が有意義な振る舞いを見せるのかという点については、まだ明らかになったとは言いがたい。本章ではあくまでも事実に沿って現象を分析するに留まったが、オノマトペにおける4モーラ構造の意義については今後さらに考察を広げて行く必要があるだろう。また、4モーラのサイズがオノマトペだけでなく一般語種の韻律構造においても有意義である可能性も十分に考えられる。一般語種での4モーラ構造の特異性は、アクセントの方面から窪菌・伊藤・メスター（1997）らによって指摘されているほか⁷、田中（1999）においても、俳句や川柳などに起こる字余り現象をめぐって4モーラの構造が特異なステイタスを示すことが論じられているが、こうした現象を手掛かりとして一般語種における4モーラ構造の意義を探ることも今後に残された興味深い課題である。

第 4 章

アクセントと韻律構造

4.1 はじめに

アクセントに関わる現象は言語の韻律構造の姿を捉える上で極めて有力な手掛かりを与えてくれる。とりわけ語形成に伴って新たなアクセントが生成される場合にはその背後に一定の韻律的な計算のしくみが働いていることが多く、そうした派生アクセントの性質を分析することで韻律構造の解明に寄与する知見が得られやすい。本章では、オノマトペに現われる派生アクセントの構造ならびにその生成過程をモーラ・音節・フットなどの韻律範疇を介して分析し、オノマトペの韻律構造の特性について考察する。

4.1.1 問題の所在

既に第2章で明らかにしたように、オノマトペのアクセント・パターンは大きく分けて語頭フットに核を含む「主要部始端型」と語末フットに核を含む「主要部末端型」の二つのタイプに分類できる。

(1) アクセントの類型 (F=フット, L=軽音節, #=端)

a. 始端型 (# F|+F)

ピ|カピカ # F|+F

ポ|ンポン # F|+F

ス|イスイ # F|+F

ザ|ーザー # F|+F

サ|ッサ # F|+L

b. 末端型 (...F|#)

ピカピカ|ッ L+F+F|#

ピピピ|ッ F+F|#

ピカ|リ L+F|#

ピカ|ン L+F|#

ピカ|ッ L+F|#

このうち本章で主な考察対象とするのは末端型のアクセント(1b)である。末端型のアクセントはP重複形オノマトペや接辞形オノマトペの語形成に伴って生成される典型的な派生アクセントであり、韻律範疇を介した計算に基づいて派生される性質を持つ。したがって、末端型アクセントの構造や生成過程を分析することは、即ちオノマトペの韻律構造の特性を明らかにすることと等しい意義を持つ。

ところで、末端型アクセントの性質をめぐってはここにひとつ考慮すべき重要な議論がある。(1b)に示したように、末端型アクセントを支える韻律構造 (...F|#) ではアクセント核を担うフット（主要部フット）が語末位置に現われる点が大きな特徴だが、実はこの構造は日本語においては極めて有標性の高いものであることが従来指摘されている。たとえば複合語や外来語における無標アクセントの生成過程では語末に主要部フットが現われる構造（以下「**末端構造**」）が積極的に忌避される傾向が見られるが（Poser 1984b, 1990）、近年の音韻研究では、そうした傾向の背後に「**非末端性制約（Nonfinality）**」と呼ばれる韻律制約が強く作用していることが明らかにされている（Kubozono 1997, 2000）。

(2) 非末端性制約（Nonfinality）

音韻的主要部は韻律語の末尾に位置してはならない。

この制約はとりもなおさず、オノマトペに現われる末端型の韻律構造を非文法的なものとして排除する効果を持つ。Kubozono（1997）の研究によれば非末端性は日本語のアクセント生成過程を統御する中心的な制約の一つだとされるが、そうした強力な制約が存在する中でオノマトペだけがこれに反するアクセントを生成するのは極めて異例な振る舞いだと言える。本章の考察において末端型アクセント(1b)に焦点を当てる理由はまさにこの点にある。

4.1.2 本章の目的と構成

ただし、(1b)の事実を以って直ちにオノマトペの韻律構造を「有標」と断定することが本章の目的なのではない。たしかに、(1b)を見る限り非末端性制約に反する構造が現われていることは否めないが、この事実だけでは必ずしもオノマトペの韻律構造の有標性を認めることができないのも一方では確かである。と言うのも、(1b)のオノマトペには、見落としてはならない重要な事実として助詞「と」が義務的に共起するという一貫した性質が付帯するからである。これまでの各章で論じてきたように、助詞「と」は文法的にはオノ

マトペ本体とは別個の単位であるが、音韻的にはオノマトペ本体とともに同一の韻律語を構成する性質がある（助詞の韻律化）。この点を踏まえると、(1b)に示したオノマトペについては助詞「と」を韻律化した構造を対象とした新たな分析を施す必要があると言える。

本章では、助詞が韻律化された構造に基づいて(1b)のオノマトペのアクセントをあらためて分析することにより、一見有標と思われるアクセント構造の中に、むしろオノマトペの「無標性」を裏付ける韻律特性が潜在している様子を明らかにする。本章の構成は以下に述べるとおりである。

具体的な議論に入る前提として、まず第2節ならびに第3節ではオノマトペのアクセントをめぐる言語事実および先行研究の成果を振り返る。第2節ではこれまでになされてきた記述的な研究の成果を踏まえつつ日本語オノマトペのアクセント構造について概観し、本章で取り上げる現象の範囲を明確化する。続く第3節では、日本語オノマトペにおけるアクセント計算の過程を理論的方角から分析した研究として Hamano (1998) を取り上げ、その理論的枠組みを紹介するとともに、再考を試みるべき点について批判的な検証を加える。

末端型アクセントをめぐる問題に対し具体的な検証を施すのは第4節以降である。まず第4節では、末端型アクセント(1b)が含む構造上の有標性の問題を非末端性制約に照らしてあらためて明らかにし、助詞の韻律化を前提とする分析を加えることでこの問題が解消されることを論じる。続いて第5節では、第4節での検証ならびに提案の妥当性——すなわち、オノマトペの韻律分析を試みる上で助詞の韻律化が欠くべからざる概念であることを、複合語アクセント規則（－3規則）への適合性ならびに音節量とアクセントの関わりを通じて論じる。

4.2 オノマトペのアクセント

この節では、本章での分析の範囲を明確化することを目的として、日本語オノマトペのアクセントに関して従来指摘されている事実を概観する。

4.2.1 アクセントの型

オノマトペのアクセントについて従来よく知られているのは、文法機能とアクセント型の対応(3)である。田守(1991)は、オノマトペが状態副詞として機能する場合には起伏式

の型をとり、結果副詞ないしは形容動詞的な機能を伴う場合には平板型となると述べている。

(3) 文法機能とアクセント

- a. ピカピカと (起伏式)
- b. ピカピカに (平板式)

このうち本章では起伏式のパターン(3a)を分析対象とし、平板式のパターン(3b)には言及しない。なぜなら、平板式のパターンはアクセント核を含まないため、前節で述べた末端性の問題とそもそも関わりを持たないからである。

オノマトペの起伏式アクセントには次のパターンが現われる。

(4) 起伏式*¹

- a. ピ|カピカ, ポ|ンポン, ス|イスイ, ザ|ーザー, サ|ッサ
- b. ピカピカ|ッ, ピピピ|ッ, ポポポ|ン
- c. ピカ|リ, ドカ|ン, パチ|ッ

これらのパターンを見るとアクセント型のあり方が語形成のタイプと密接な関連を見せていることに気づく。まずS重複形では常に語頭型のパターンが現われる(=4a)。また、同じ重複形であってもP重複形の場合はパターンが正反対になり、語末型のパターンを示す(=4b)。さらに、接尾辞を伴うオノマトペでは語中型(ピカ|リ)ないしは語末型(ドカ|ン, パチ|ッ)が現われる。語形成とアクセントの関連はそれ自体興味深いテーマであり、本研究でも第2章において語形成ごとのアクセント生成のあり方を観察してきた。だが、本章の分析では形態論的な情報を介在させず、専ら音韻論的な情報——韻律構造——に基づいてアクセント生成のしくみを探っていく。

その手始めとして、(4)のアクセントをフット構造に基づいて分析してみよう。アクセント核を担うフット(主要部:F)の位置に着目すると、オノマトペのアクセントには韻律語の先頭に主要部を含むもの(5a)と韻律語の末尾に主要部を含むもの(5b)の二つのタイプが生じていることが分かる。

(5) 韻律構造の類型 (F=フット, L=軽音節, PrWd=韻律語)

a. 始端型 (F|+X]_{PrWd})

ピ [◦] カピカ	(pi ka)(pika)	F +F] _{PrWd}
ポ [◦] ンポン	(po N)(poN)	F +F] _{PrWd}
ス [◦] イスイ	(su i)(sui)	F +F] _{PrWd}
ザ [◦] ーザー	(za a)(zaa)	F +F] _{PrWd}
サ [◦] ッサ	(sa Q)sa	F +L] _{PrWd}

b. 末端型 (...F|]_{PrWd})

ピカピカ ッ	pi(kapi)(ka Q)	L+F+F] _{PrWd}
ピピピ [◦] ッ	(pipi)(pi Q)	F+F] _{PrWd}
ピカ リ	pi(ka ri)	L+F] _{PrWd}
ピカ ン	pi(ka N)	L+F] _{PrWd}
ピカッ	pi(ka Q)	L+F] _{PrWd}

「始端型」と「末端型」は主要部の位置に関して対極的な性質を示す類型である。本章ではこの二つの類型を出発点としてオノマトペのアクセント構造について探っていくが、とりわけ末端型(5b)については、第4節以降の議論の中心をなすパターンとして注目してゆきたい。

4.2.2 アクセントの記述をめぐって

本章で取り上げる言語事実は主に Hamano (1998) で提示された記述に基づいているが、アクセント核の位置の解釈をめぐっては部分的に注意を要する点がある。問題となるのは(4b)に示した P 重複形のアクセントである。P 重複形では語末に促音ないしは撥音が伴うのが形態上の大きな特徴である。(4b)ではこれらの特殊モーラの直前に位置する自立モーラにアクセント核記号「|」を付しておいたが、一方、Hamano の記述では本研究での記述とは些か異なり、特殊モーラにアクセント核が与えられた構造が示されている*²。たとえば「ピピピッと」のアクセントは「pi-pi-piQ|-to」といった具合に記述されている。

実のところ、促音を末尾に含む形態ではアクセント核の所在はかなり微妙であり、厳密な解釈が困難であることが多い。実際、「ピピピッと」が(6)に示すいずれのピッチで発音されているか物理的なレベルで識別することは、促音の調音時に声帯振動が生じない以上



不可能である。

(6) ビ°ビ°ビッ と

- a. $\underline{\text{pi}} \boxed{\text{pi pi}} \underline{\text{Q to}}$
 b. $\text{pi} \boxed{\text{pi pi Q}} \text{to}$

このため、核の所在の特定は音韻論的な判断に委ねられざるを得ない。その場合、解釈の論拠が違えば当然記述の帰結も異なってくる。(4b)に示した本研究の解釈「ピピピ|ッ」は、特殊モーラに核が位置し得ないという共通語アクセントの原則に基づいた解釈である。一方、Hamano の記述「pi-pi-piQ|to」はこうした原則に囚われない解釈に基づいていると言える。この二通りの解釈のうちどちらが妥当であるかを判断するには、現在のところ十分な根拠は得られていない。ただ、本章の議論ではアクセント計算の素子としてフットの存在に着目するため、上述の微妙な解釈上の差異が深刻な問題につながる可能性は極めて低いと考えられる。なぜなら、(7)に示すように、どちらの解釈を採っても末尾のフットにアクセントが与えられているとする観察自体には影響がもたらされないからである。

(7) ピ°ピ°ピッ (() はフット／下線部は主要部フット)

- a. (pipi)(pi|Q)  F + F]PrWd
- b. (pipi)(piQ)  F + F]PrWd

とは言え、記述の方針を確定しておくことは無用な混乱を避ける上で必要な措置であるので、以下では促音を末尾に含む形態のアクセントを示す際には促音直前の自立モーラに核の所在を認める方針をとる（例：「ピピピ|ッ」）*3。促音を末尾に含むオノマトペでのアクセント核の所在に関しては今後なお精密な観察・分析が必要と考えられるが、この点は本章での主たる議論からは遠ざかる問題であるので、これ以上は立ち入らないでおく*4。

なお、ついでながら附言すると、促音で終わる形態では直後に助詞「と」をつけない限り平板式アクセントとの区別が中和されてしまう。たとえば「ピピピッ」を単独で発話した場合には声の下がり目が現われないため（ピピピッ）、あたかも平板式アクセントと同じパターンであるかのような錯覚を来たすが、これに助詞「と」をつけることにより、助詞の前でピッチの下がり目が生じていること——すなわち、末端型アクセントであることを確認できる。一般語種にも類似の現象は見られ、たとえば平板型の「桜」と尾高型の「力」

は助詞を伴わない限りいずれも/LHH/という同一の表層形を示すことで知られる。したがって、オノマトペの末端型アクセントを記述する際には後続の助詞の存在を考慮すること、すなわち、助詞を含めた構造を対象にアクセントの型を判断することが不可欠であると言える。本研究での記述がこうした方針の下で行われていることは言うまでもない。

4.3 先行研究の検証

オノマトペのアクセントをめぐる近年の論考に Hamano (1998) がある。従来のオノマトペ研究では主にオノマトペの分節構造に関わる議論が豊富である一方で、アクセントや韻律構造に対する論及は比較的少ないが、その中であって Hamano (1998) はオノマトペにおけるアクセントの生成過程を理論的な方角から記述した稀少な研究事例として特筆される。本節では Hamano の分析を紹介するとともに、その枠組みを批判的に検証する。

4.3.1 Hamano (1998)

Hamano の提案するアクセント理論（以下「Hamano 理論」）の骨子は以下に述べるとおりである。

Hamano 理論では、モーラを構成素とする二項フットの構造に基づいてアクセントの計算が起こると考えられている。フット構造によってアクセント生成のしくみが一般化できることは Poser (1984b, 1990) および Kubozono (1997) の研究においても示されているが、Hamano 理論に特徴的なのは、フットを「強さ」によって三種類のタイプに分類するという独特の概念が導入されている点である。

(8) フットの強さ (H=重音節, L=軽音節)

- a. 最強 F = (H)
- b. 強 F = (LL)
- c. 弱 f = (L)

フットに含まれる二つのモーラが単一の重音節に内包されている場合(8a)は、そのフットは「最強 (F)」のステイタスを持つ。他方、フットに含まれる二つのモーラが二つの軽音節にそれぞれ内包されている場合(8b)は、そのフットは「強 (F)」のステイタスを持つとされる。また、二項構造をなせないモーラ——すなわち単一の軽音節に内包されているモ

ーラは「弱 (f)」のステイタスを持つと考えられている (=8c)。アクセントの計算は、フットの「強さ」および「位置」の二つの尺度に基づいて次のように行われる。

(9) アクセント付与規則

- a. 最も強いフットに核を与えよ。(強さ : $F > F > f$)
- b. 強さが同等の場合は左端により近いフットに核を与えよ。

Hamano は、この二つの規則が離接的な関係をなすと考えているようである。すなわち(9a)が適用されると(9b)によるアクセント付与は起こらず、反対に、(9a)が適用されなかった場合にのみ(9b)が作用するとの想定がなされている。たとえば「強さ」のタイプの異なるフットを含んだ「F+F」という構造では、(9a)の規則によって最強フット「F」にアクセント核が与えられることになる (F+F|)。一方、「強さ」が同等な複数のフットからなる「F+F」のような構造では、(9b)の規則が働いて左端に近い位置にあるフットにアクセント核が与えられる結果、「F|+F」という出力が得られる。

上述のしくみによって実際にどのような計算が施されるか、Hamano の挙げている八種類の形態を通じて見てみよう。

(10) 計算 (F=最強, F=強, f=弱/L=フットに解析されない軽音節)

形態	フット解析	韻律構造
a. ピ ット	(pi Q)(to)	F +f
b. ガタ ン	ga(ta N)	L+F
c. ピ ーチク	(pi i)(tiku)	F +F
d. パ ッパ	(pa Q)(pa)	F +f
e. ピクピク ッ	pi (kupi)(ku Q)	L+F+F
f. ピ ーピー	(pi i)(pii)	F +F
g. コ トコト	(ko to)(koto)	F +F
h. ピタ リ	pi (ta ri)	L+F

まず、(9a)の規則によってアクセントが決定されるものとしては、(10a, c, d, e)の四つの形態がこれに相当する。(10a)「ピ|ット」および(10d)「パ|ッパ」の韻律構造は最強フットと弱フットの組み合わせからなり、そこに強さの格差が生じるため、最強フットに核が与えられる。(10c)「ピ|ーチク」には最強フットと強フットが形成されるが、ここでもやはり

強さの格差が生じているので最強フットに核が付与される。(10e)「ピクピク|ッ」の韻律構造にはフットのほかに未解析の軽音節(L)が含まれるが、Hamano 理論ではアクセント核を担える韻律範疇がフットに限定されているので軽音節にはアクセント核を担う資格がない。このため、軽音節を除いた範疇(つまり、フット)どうしの間で強さの比較が行われる結果、最強フットが核を担うことになる。

続いて、フット間に強さの格差が生じないケースとしては(10f, g)が挙げられる。これらでは専ら(9b)の規則によって——すなわち、フットの「位置」に関する情報が決め手となってアクセントが決定される。(10f)「ピ|ーピー」には二つのフットが形成されるが、これらはどちらも最強のステイタスを持つので強さの格差が伴わない。このため(9b)の規則により、左端に近い位置にある最強フットに核が与えられる。このしくみは(10g)「コ|トコト」でも同様だが、こちらの例では形成される二つのフットのステイタスがともに「強」である点だけが(10f)と異なる。

最後に、上述の説明から漏れている(10b)「ガタ|ン」および(10h)「ピタ|リ」について見ておく。これらではフットが一つしか形成されないのが特徴である。最前述べたようにフット以外の範疇は核を担えないので、この場合は自動的に最強フットに核が与えられることになる。

4.3.2 検証

Hamano 理論の第一の利点は、アクセント生成のしくみを(9)のようなごく簡潔な規則に還元している点にある。また第二の利点として、(8)および(9)のしくみに基づくことにより、語形成のあり方の違いを超えてオノマトペのアクセント構造が一般的に捉えられることを示した点が挙げられる。実際、(10)に挙げたオノマトペは全て形態構造の異なるものばかりである。Hamano 理論においてこうした一般化が可能であるのは、ひとえにフットの属性に「強さ」の概念を導入した点に依るところが大きい。

しかしながら Hamano 理論には、フットの「強さ」を想定するがゆえに起こる問題も含まれている。「強さ」の概念は記述的説明の装置としてはたしかに優れているが、一方では、なぜ強いフットに核が引きつけられるのかといった疑問に対して明確な答えを与える形にはなっていない。つまり、「強さ」の概念を導入したしくみがどのような理論的洞察をもたらし得るかがこの場合問題になってくるのである。加えて、フットの「強さ」とはつまるところ音節のタイプの違い——重音節と軽音節——を換言したしくみにほかならない。す

と、フットをアクセント計算の素子とする必然性がはたしてあるのかどうか、すなわち、「音節」ではなく「フット」を計算素子に設定する根本的な動機そのものが疑われかねないといった深刻な問題が生じてくる。

この問題に如実に関わってくるのは(10c)と(10e)の二つのケースである。

(11) ピ|ーチク F|+F : (10c)

 ピクピク|ッ L+F+F| : (10e)

この二つのオノマトペの韻律構造には強さの異なるフットが含まれており、しかも、より強いフットに核が与えられていることから、一見したところ「強さ」の概念を想定することに積極的な動機を与える事例であるようにも思える。しかしながら、一面では Hamano 理論の根本的な前提——すなわち、アクセントの計算が「フット構造」に基づいて行われているとする前提を崩してしまう可能性がある。上に示した二つのオノマトペでは強フットと最強フットの間に格差が生じており、そのうち最強フットが核を担っているわけだが、強フットと最強フットがそれぞれ軽音節の連鎖 (LL) および重音節 (H) を意味することを鑑みると、この振る舞いはつまるところ重音節に核を与える操作を意味していることになる。実際、(11)のアクセントの事実は音節構造に基づく表示を用いても十分記述できる (H=重音節, L=軽音節)。

(12) ピ|ーチク H|L

 ピクピク|ッ LLLH|

(12)を見ると、アクセント核が重音節 H に引きつけられる形で与えられているのが分かるが、この事実を捉えるためにはアクセント計算の素子として音節を想定するだけで十分であり、あえてフットを計算素子として導入する必要はないと言える。つまり、音節構造の違いに基づいてフットの「強さ」を区別する Hamano の理論では、音節ベースの分析(12)との決定的な意義の違いが中和されてしまうのである。この種の問題は、言語現象に対して理論的方角からの分析を試みる際に常に念頭に置かねばならない課題である。フット構造に基づく分析を試みる以上、音節をはじめとするフット以外の範疇による分析では有意義な一般化が得られないこと (独自性) を示す必要があるわけだが、実際のところは(12)のような対案が出てきてしまう。いわば、フットに「強さ」の格差を設けることにより、却って独自性に関わる主張が弱められてしまっているのである。

Hamano 理論には上述以外にも個別的な問題が残されている。いずれもフットの「強さ」の概念に関わるものだが、ひとつは弱フット (f) の意義に関する問題であり、もうひとつはしくみの複雑さの問題である。

はじめに、弱フットを想定することの意義について考えてみたい。(10)に示した分析のうち弱フットを含む形態(10a, d)についてあらためて検証してみると、弱フットはそもそもアクセント計算のプロセスには一切寄与していないことに気づく。

(13) ピ|ット F|+f : (10a)

パ|ッパ F|+f : (10d)

「ピット」「パッパ」では、弱フットは常に最強フットとの組み合わせにおいて現れているが、(9a)の規則に従うと、このことは弱フットがアクセント核の所在として選ばれる可能性がないことを意味している。また、(9b)の規則が働いた場合でも弱フットは核の担い手として選ばれることはない。なぜなら弱フットは常に構造の右端にしか現れないからである。すなわち、弱フットは(9a,b)の規則のいずれに関しても一貫してアクセント核を担い得ない条件下に現われているわけだが、このような場合、はたして弱フットを想定することに独自の意義が存在するのかどうかは疑問である。加えて、弱フットが余剰な範疇であることは、単一の軽音節をあえて弱フットに解析しなくてもアクセント核の位置が正確に予測できることから明らかである。(14)は、試みに弱フットを解析しないままアクセント核の位置を分析したものである。この構造ではフットが一つしか生じないのでアクセント核の所在は自ずと決まってくる。注目すべきは、こちらの分析を採っても(13)と全く同じ位置にアクセント核が予測できる点である。(L=軽音節)

(14) ピ|ット F|+L

パ|ッパ F|+L

Hamano の想定する弱フットは、Prince (1980), McCarthy and Prince (1986, 1990), Kager (1989) らの韻律理論において「変性フット (degenerate foot)」と呼ばれてきたタイプに属するものだが、Hayes (1995) は、変性フットの生成が一般に避けられやすいことおよび、たとえ変性フットを生成する言語であっても音韻的頂点を担わない変性フットは認可されないことを指摘している。この指摘に基づく、アクセント核を担う可能性の無い弱フットを想定する分析は理論的な妥当性を欠いていると言わざるを得ない。

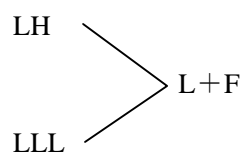
続いて、しくみの複雑さの問題に議論を移したい。Hamano 理論の個別的问题として指摘すべき第二の点は、フットに三種類のタイプを想定することにより却って一般化が損なわれるケースが見られることである。このケースに該当するのは、フットの「強さ」がアクセント計算の過程に一切関与しない(10b, h)である。「ガタン」「ピタリ」ではフットが一つしか形成されないで、アクセント計算の過程においてその「強さ」は全く問題にならない。

(15) ガタ|ン L+F| : (10b)

ピタ|リ L+F| : (10h)

「ガタン」に生成される最強フットであろうと「ピタリ」に形成される強フットであろうと、いずれも核の担い手になる。このようなケースではフットの「強さ」の区別は却って一般化を阻害する要因になる。(15)を見ると、「ガタン」と「ピタリ」が同一の語形成過程（接辞付加）によって生成される自然類であるにも関わらず、その韻律構造に区別が生じているのが分かる ($L+\dot{F} : L+\dot{F}$)。しかし、重音節を含む接辞形（ガタン : LH）と軽音節の連鎖のみからなる接辞形（ピタリ : LLL）は音節構造に関しては性質の違いを見せるものの、フットの構造に関しては同じ特性——すなわち「L+F」構造を持っている（=16）。フットに「強さ」の区別を導入すると、この点の一般化が損なわれてしまうのである。

(16) 一般化



先にも述べたように、フットの「強さ」とはすなわち音節構造の違いを換言した概念にほかならない。このため音節構造の情報をフットの「強さ」に反映させる Hamano 理論では、音節構造のレベルで生じる性質の相違（LH : LLL）を韻律構造のレベルで一般化することは原理的に困難である。

4.3.3 フット解析の方針

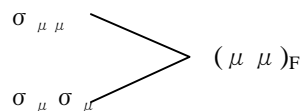
以上の諸問題の核心は、Hamano 理論で想定されているフットの「強さ」というものが音節構造の差異を反映した概念である点に求められる。つまり Hamano 理論には、フット・ベースの分析の形を取りつつも依然として音節構造に現われる差異を一般化しきれていない部分があるわけだが、この問題を解消するためにはフットの「強さ」の概念を導入せずに韻律構造を分析する枠組みが必要である。その枠組みについては第1章で詳しく述べたが、ここでもう一度概略を振り返っておきたい。

(17) フット解析

- a. 二項性：フットはモーラを構成素とする二項構造を持つ。
- b. 方向：フットは韻律語の右から左へ解析される。
- c. 整合性：重音節に含まれるモーラは優先的に解析される。
- d. 階層性：二項構造をなし得ないモーラ（軽音節）は韻律語に直接支配される。

アクセント計算の素子となる二項フットは韻律語の末端から始端にかけて解析される。ただし、韻律語中に音節量の異なる音節が複数存在する場合は重音節に含まれるモーラが優先的に解析される。これは、重音節内部にフットの境界を作らないようにするためである。また、環境により二項構造をなしえないモーラが生じた場合には、そのモーラを含む軽音節は韻律語に直接支配されるものとする（緩和階層仮説）。なお、最前述べたように本研究の枠組みでは Hamano (1998) で想定されていたようなフットの「強さ」の区別は行わない。フットは、それが重音節を含むものであろうと軽音節の連鎖からなるものであろうと、全て等しい扱いを受ける。

(18) 等質性



上述の枠組みに従って、Hamano (1998) の示したオノマトペ(10)を対象にその韻律構造をあらためて分析したのが以下である。

(19) 分析 (F=フット/L=フットに解析されない軽音節)

形態	フット解析	韻律構造
a. ピ [◦] ツと	(pi Q)(to)	F +L
b. ガタ ン	ga(ta N)	L+F
c. ピ [◦] ーチク	(pi i)(tiku)	F +F
d. パ [◦] ッパ	(pa Q)(pa)	F +L
e. ピクピク ッ	pi (kupi)(ku Q)	L+F+F
f. ピ [◦] ーピー	(pi i)(pii)	F +F
g. コ トコト	(ko to)(koto)	F +F
h. ピタ リ	pi (ta ri)	L+F

Hamano (1998) の枠組みと比較した場合の第一の相違点は、未解析の軽音節を含む(19a,d) に関して弱フットを解析しないことである。Hamano 理論ではこれらは最強フットと弱フットの組み合わせ「F|+f」として分析されていたが、本研究の枠組みでは二項構造をなし得ないモーラを未解析のまま残すので、「ピツと」「パッパ」はともに「F|+L」構造として分析される。第二の相違点は、フットの属性に音節構造の情報を一切持ちこまないこと——すなわち、フットに「強さ」の概念を導入しないことである。この点をよく反映しているのが接辞形オノマトペに対する分析(19b, h)である。

4.4 末端性の問題

この節では上に述べたフット解析の枠組みに従って、本章冒頭で述べた末端性の問題について考察する。「末端性の問題」とは、一般語種において有標とされる主要部末端型の韻律構造(20)がオノマトペの中に生産的に現われる現象を言う。

(20) 末端構造

...F|]PrWd

はじめにオノマトペの各種形態におけるアクセント構造と韻律構造の記述を行い、末端構造を持つオノマトペの特性についてまとめた後に、「助詞の韻律化」が働くことによってオノマトペの末端性が解消される様子を見る。

4.4.1 語形成と韻律構造

最初に、重複語形成によって作り出されるオノマトペの韻律構造を見よう。重複形オノマトペには **S** 重複構造と **P** 重複構造の二種類の類型が現われるが、両者は互いに全く鏡像的な韻律構造を持つ。まず **S** 重複形の韻律構造を(21)に示す。

(21) 始端構造：S 重複形 (F=フット, H=重音節, L=軽音節)

	形態	音節構造	フット解析	韻律構造
a.	ピ カピカ	L LLL	(pi ka)(pika)	F +F] _{PrWd}
	コ ロコロ	L LLL	(ko ro)(koro)	F +F] _{PrWd}
b.	ポ ンポン	H H	(po N)(poN)	F +F] _{PrWd}
	ス イスイ	H H	(su i)(sui)	F +F] _{PrWd}
	ザ ーザー	H H	(za a)(zaa)	F +F] _{PrWd}
c.	サ ッサ	H L	(sa Q) sa	F +L] _{PrWd}

S 重複形には「ピカピカ」「コロコロ」のように軽音節の連鎖からなるもの (=21a), 「ポンポン」などのように重音節の連鎖からなるもの (=21b), および「サッサ」のように重音節と軽音節の連鎖からなるもの (=21c) が含まれるが、こうした音節構造上のバリエーションは韻律構造のレベルにおいては解消される。いずれの形においても主要部 (F) が韻律語の先頭に位置する構造が見られるからである。この性質を捉えて、第2章では **S** 重複形の韻律構造を主要部始端型に分類した。

(22) 始端構造

[F|+X]_{PrWd}

「X」は任意の韻律範疇で、軽音節 (L) ないしは主要部以外のフット (F) のいずれかがこれに相当する。一方、同じ重複形オノマトペでも **P** 重複形の場合は以下に示すように末端型の韻律構造を伴う。

(23) 末端構造：P 重複形（F=フット，H=重音節，L=軽音節）

	形態	音節構造	フット解析	韻律構造
a.	ピカピカ ッ	LLLH	pi(kapi)(ka Q)	L+F+F]PrWd
	コロコロ ッ	LLLH	ko(roko)(ro Q)	L+F+F]PrWd
b.	ピッピッピ ッ	HHH	(piQ)(piQ)(pi Q)	F+F+F]PrWd
	ポンポンポ ン	HHH	(poN)(poN)(po N)	F+F+F]PrWd
c.	ピピピ ッ	LLH	(pipi)(pi Q)	F+F]PrWd
	ポポポ ン	LLH	(popo)(po N)	F+F]PrWd

P 重複形には多様な形態上のバリエーションが起こり、それに伴って韻律構造にもパターンの違いが生じる。2 音節語幹をベースとする P 重複形(23a)では語末位置に重音節が生じるために語頭の軽音節がフットに解析されないまま残る。他方、1 音節語幹から派生される形(23b)の場合は重音節しか含まれないので未解析の軽音節は残らない。また、部分重複形(23c)では重複子の数によって構造に差異が生じる。上に挙げた例「ピピピッ」「ポポポン」では二つのフットからなる構造が得られるが、これは偶然の結果であって、「ピピピピッ」「ポポポポン」のように奇数個の重複子が生成されるケースでは語頭の軽音節が未解析のまま残る（L+F+F|]PrWd）。このように P 重複形では韻律語の始端付近に位置する範疇の構成は可変的であるが、末端部分に関してはどの形態も一律の特性——すなわち、主要部が韻律語の末尾に位置する構造を共有している。

(24) 末端構造

...F|]PrWd

「...」は、主要部の左側に任意の韻律範疇が任意の数だけ（「0」であってもよい）現われることを示しているが、末端構造の特徴を捉える上で、この部分の構造はそれがどのようなあり方を示していようとさしたる意味はない。主要部と韻律語の末端との間に何ら別の範疇が介在しない点こそが末端構造の性質を捉える上で重要なのであり、(24)の一般化はこの点を含意している。

続いて、接辞形オノマトペの韻律構造について見よう。P 重複形と同様、接辞形も末端型の韻律構造を含んでいる。

(25) 末端構造：接辞形 (F=フット, H=重音節, L=軽音節)

	形態	音節構造	フット解析	韻律構造
a.	ドカ ン	LH	do (ka N)	L+F] _{PrWd}
	ポキ ッ	LH	po (ki Q)	L+F] _{PrWd}
b.	ピカ リ	LL L	pi (ka ri)	L+F] _{PrWd}

接辞形には重音節を含む形態(25a)と軽音節のみからなる形態(25b)とがあるが、既に述べたように、両者は音節構造は異なっているが韻律構造に関しては共通の特性 (=末端性 ; 24) を示す。2.4.3 節で論じたように、接辞形オノマトペは2音節語幹から派生される P 重複形 (23a)と語形成上の類縁性を示すが、この類縁性は両者の韻律構造にも現われている。(23a)と(25)の韻律構造を見比べてみると、主要部が韻律語の末尾に現われていることと、未解析の軽音節が左端に残されていることの二点において、両者の緊密な類似性を窺い知ることができる。

末端構造を示すオノマトペは P 重複形・接辞形以外にも存在する。1音節語幹の非派生形がそれである。非派生形は一つの重音節だけで構成される形態であるので、必然的にその韻律構造にはフットが一つしか含まれない。このフットはアクセント核を担うため、主要部の資格を持つ。

(26) 末端構造：非派生形

	形態	音節構造	フット解析	韻律構造
	ポ ン	H	(po N)	F] _{PrWd}
	ポ イ	H	(po i)	F] _{PrWd}
	グ ー	H	(gu u)	F] _{PrWd}
	パ ッ	H	(pa Q)	F] _{PrWd}

こうした単一の範疇しか持たない構造の場合、主要部の位置をめぐって解釈上の曖昧さが伴う。(26)では主要部が構造の「末端」にあると解釈できると同時に、見方によっては構造の「始端」にあるとも解釈できるからである。しかし、(24)に示した一般化を踏まえると非派生形の韻律構造は末端型と解釈すべきものであることが分かる。なぜなら、非派生形においても主要部と韻律語の末尾との間に別の範疇が全く介在していないからである。

以上検証した各種形態の韻律構造を主要部の位置を軸にまとめたのが(27)である。

(27) 形態と韻律構造

- a. 始端構造 (S 重複形) b. 末端構造 (P 重複形・接辞形・非派生形)

$[F|+X]_{PrWd}$

$\dots F]_{PrWd}$

始端構造を持つオノマトペは S 重複形のみで、それ以外の形態は全て末端構造を持つことから、オノマトペでは末端構造のほうがより幅広く現われやすいことが分かる。

4.4.2 末端構造の有標性

ところが近年の音韻研究では、一般語種での語形成やアクセント生成の過程においては末端構造はむしろ強く忌避される傾向にあることが重ねて論じられている (Poser 1990, Itô 1990, Ito, Kitagawa and Mester 1996, Kubozono 1997, 2000)。こうした先行研究での指摘は、オノマトペの形態に末端構造が現われやすいことを鑑みると実に興味深い問題を提示していることになる。すなわち、オノマトペにしばしば現われがちな韻律構造が一般語種では一転して有標な構造として振る舞うといった逆説的な関係が生じているのである。この逆説的なあり方について考察を試みる前に、まずは末端構造の有標性に関して従来行われてきた議論を振りかえっておくことにしよう。

語形成現象に関しては、外来語短縮現象について論じた Itô (1990) および倒位語形成を分析した Itô, Kitagawa and Mester (1996) に詳細な論究がある。まず外来語の短縮過程では、「コンパ、パーマ、マイク」のような始端型の韻律構造 (F+L) を含む形態が生成される一方で、「*ロケー (ション)、*デモン (ストレーション)、*アナウ (ンサー)」のような末端型 (*L+F) の形態は生成されないといった非対称性が観察される (Itô 1990) *⁵

(28) 外来語短縮

- | | | | |
|------------------|-------------|-------------------|---------------|
| a. $F+L]_{PrWd}$ | コンパ (koN)pa | b. $*L+F]_{PrWd}$ | *ロケー *ro(kee) |
| | パーマ (paa)ma | | *デモン *de(moN) |
| | マイク (mai)ku | | *アナウ *a(nau) |

同様の非対称性是一名「ズージャ語」と呼ばれる倒位語形成にも観察され、「ズージャ (<ジャズ)、ツイド (<ドイツ)、ツンパ (<パンツ)」などの「F+L」構造が適格であるのに対し、「*ズジャー、*ツドイ、*ツパン」などの「*L+F」構造は生成されないという事実がある (Ito, Kitagawa and Mester 1996)。

(29) 倒位語形成

a. $F+L]_{PrWd}$	ズージャ (zuu)zya	b. $*L+F]_{PrWd}$	*ズジャー *zu (zyaa)
	ツイド (tui)do		*ツドイ *tu(doi)
	ツンパ (tuN)pa		*ツパン *tu(paN)

このほか、幼児語（母親語）の形態や音節量変化（長母音の短音化）による語形変化のプロセスにも末端構造を忌避する傾向が観察される。窪菌（1995, 2000）では、幼児語に「マンマ」「オッキ」のような「 $F+L$ 」構造の形態が多い一方で、これと鏡像的な関係にある「 $*L+F$ 」構造のものは見当たらないことが指摘されているほか、音節量変化現象においても「 $F+L$ 」構造を作り出す短音化が見られる一方で、「 $*L+F$ 」構造を作り出す短音化は起こらないことが指摘されている*⁶。

アクセント生成と末端構造の関わりを論じた研究としては、複合語や外来語のアクセントを分析した Poser（1990）および Kubozono（1997）がある。周知のとおり、複合語や外来語のアクセントでは語末から数えて三番目のモーラを含む音節に核が生成されやすいが（McCawley 1968, 1978）、この生産的なパターン（以下「無標型」）の構造を見ると語末のフットがアクセント計算の過程において不可視的扱いを受けているのが分かる。

(30) 語末フットの不可視性

a. 複合語	b. 外来語
かぶと むし kabuto (musi)	クリス マス kurisu (masu)
がいむ しょう gaimu (syoo)	オースト リア oosuto (ria)
にぐ るま nigu (ruma)	オーストラ リア oosutora (ria)
いしあ たま isia (tama)	アリストテ レス arisutote (resu)
てさげぶ くろ tesagebu (kuro)	コペンハ ーゲン kopeNha a(geN)

「不可視」とは、平たく述べると語末フットが核の着地点として選択されない領域であることを意味する。最適性理論の枠組みに基づいて無標型アクセントの生成のしくみを論じた Kubozono（1997）によれば、語末フットの不可視性は「非末端性（Nonfinality）」と呼ばれる有標性制約の効果によって生じる現象であるとされる。

(31) 非末端性制約 (Nonfinality)

音韻的主要部は韻律語の末尾に現われてはならない*⁷。

この場合、「音韻的主要部」とはアクセント核を担うフットを意味する。したがって、たとえば次のようなアクセントは核が韻律語末尾のフットに存在するため非末端性制約への違反を伴うことになる。

(32) 違反構造

*かぶとむ し	*kabuto(mu si)
*いしあた ま	*isia(ta ma)
*クリスマ ス	*kurisu(ma su)
*アリストテレ ス	*arisutote(re su)

アクセント構造非末端性の効果が見出されるのは、無標型アクセント(30)の生成過程だけに限った話ではない。Kubozono (1997) は、この制約が日本語アクセントの生成過程を全般的に統御していることを次の言語事実から明らかにしている。複合語の中には無標型のアクセントを体系的に生成しないグループが存在する。そのうち頭高型の2拍名詞が後部要素となった複合語では、その名詞の語彙アクセントが複合語全体のアクセントに反映される結果、非末端性制約に抵触する韻律構造が形成されるという特徴が見られる（保存型アクセント）*⁸。以下に示すように、「俄か雨」以下の複合語では語末のフットに核が生成されており、明らかに非末端性制約への違反が起きている。

(33) 保存型

「雨」	あ め	にわかあ め	niwaka (a me)	(俄か雨)
「杖」	つ え	まつばづ え	matuba (zu e)	(松葉杖)
「船」	ふ ね	やかたぶ ね	yakata (bu ne)	(屋形船)
「雲」	く も	かみなりぐ も	kaminari (gu mo)	(雷雲)
「糸」	い と	もめんい と	momeN (i to)	(木綿糸)
「麦」	む ぎ	からすむ ぎ	karasu (mu gi)	(烏麦)

しかしながら、これらの複合語について特筆すべきことは、保存型のアクセントに加えて

無標型アクセントも同時に生成する性質があること——すなわち、アクセントに「ゆれ」を生じることである*⁹。

(34) 無標型

「雨」	あ め	にわか あめ	niwaka (ame)	(俄か雨)
「杖」	つ え	まつば づえ	matuba (zue)	(松葉杖)
「船」	ふ ね	やかた ぶね	yakata (bune)	(屋形船)
「雲」	く も	かみなり ぐも	kaminari (gumo)	(雷雲)
「糸」	い と	もめ んいと	mome N(ito)	(木綿糸)
「麦」	む ぎ	からす むぎ	karasu (mugi)	(烏麦)

ここで(33)と(34)を対比してみると、保存型(33)に末端構造が現われている一方で無標型(34)にはそれが現われていないことが分かる。つまり、無標型への「ゆれ」によって末端構造が解消されていることから、Kubozono (1997) は上述の「ゆれ」現象が非末端性制約の効果によって起こるものだとしている。

4.4.3 「特殊性」への疑問

以上、語形成ならびにアクセント現象を通じて日本語の韻律構造に非末端性制約の影響が強く作用している様子を概観してきたが、その一方でオノマトペの韻律構造だけがこの制約にあえて違反する性質を含んでいること(=23~26)は注目に値する事実だと言える。同時に、なぜオノマトペだけが全体の潮流に逆らう形で有標な韻律構造を生成するのかという疑問も当然ながら持たれる。

この疑問に対する可能な答えの一つとして想定されるのは、オノマトペが元来「特殊な」語種であるために音韻構造にも有標性が現れるとする説明である。たしかに、オノマトペは音象徴のことばとして一般語種とは一線を画す独特の地位にあり、そうした語彙的性格の特殊さが音韻構造にも反映されているがゆえに一般語種とは正反対の特性を示すとする見方も、ごく順当な解釈だと思われる。実際、以下に挙げるようにオノマトペの音韻構造には一般語種には見られない特徴がいくつか備わっている。

- (35) a. 連濁を生じないこと (***pari-bari**, ***toro-doro**, ***suta-zuta**, ***kara-gara**)
 b. 語頭の有声阻害音を許すこと (**bari-**, **dota-**, **zoro-**, **gata-**)

c. /p/音が単独で現われること*¹⁰ (**para-**, **supa-**)

これらの特徴はしばしば「オノマトペらしさ」を体現しているとも言われる。たとえば金田一(1978)には(35c)に関して次のような記述が見られる。音象徴機能を発揮する必要上、オノマトペでは一般の音韻制約からの逸脱が起こるとの指摘である。

(36) 金田一(1978) *¹¹

ことに擬音語は、外の音に少しでも近い音を求めるところから、ほかの単語には用いられないような特別の音を、用いることもないではない。例えば、日本語では、風の音を表す擬音語ピューピューのピュの音は、ピューリタンのような、外来語でなければ用いられない音である。

しかしながら、語彙的側面における特殊性を根拠にオノマトペの音韻構造を特殊とみなす解釈に対しては、疑問を投げかける研究も決して少なくない。たとえば、那須(1999c)および Spaelti(2001)は(35c)の事実に対して新たな観点から分析を試みており、オノマトペの音韻構造が通念的に考えられているほど特殊なものとは言えないとの主張がなされている。ここで、那須(1999c)の議論をかいつまんで振り返っておきたい。

/p/が単独で現われるのはオノマトペ独特の音韻的振る舞いであるが、オノマトペの音韻現象の中には、単独の/p/が必ずしも自由な状態で許容されているわけではないことを示す現象が存在する。(37)に示す有声化現象がそれである。

(37) 有声化

- | | |
|--------------------------------|--------------------------------|
| a. puka- : buka- | b. supa- : zuba- |
| toku- : doku- | tapo- : dabo- |
| saku- : zaku- | kapa- : gaba- |
| kata- : gata- | supo- : zubo- |

オノマトペには「プカプカ：ブカブカ」のように阻害音での有声性の交替が語彙的対立に結びつく一群があるが、(37a)に示したように、この対立においては一語幹につき一回しか有声化が起こらないのが原則的なあり方である(Hamano 1986, 1998)。ところが、(37b)に示したオノマトペに限ってはこの原則が破られ、一語幹につき二箇所では有声化が生じる(二重有声化)。一見したところ、この振る舞いは原則に対する例外的な逸脱であるかのように

思われるが決してそうではない。(37b)のオノマトペには第二子音に/p/が含まれるという一貫した特徴が見られるが、こうしたオノマトペでは体系的に二重有声化が生じるからである。そこで問題になるのはなぜ/p/を語中に含むオノマトペだけが二重有声化を引き起こすのかということであるが、この疑問に対して那須(1999c)は二重有声化によってもたらされる次のような音韻的効果に注目している。

(38)は、原則通りの有声化を起こした形式と二重有声化を起こした形式とを対比して示したものである。

(38) a. *zupa-	b. zuba-
*dapo-	dabo-
*gapa-	gaba-
*zupo-	zubo-

原則に従った形式(38a)を見ると、語中に単独形式の/p/が残されていることが分かる。一方、(39b)では二重有声化によって/p/が/b/へと交替し、結果的に語中に/p/は残らない。つまり、二重有声化は単独形式の/p/を排除する効果をもたらしているのである。換言すると、原則通りの形式(38a)が適格でないのは語中に単独形式の/p/を含んでしまっているからだと言え、ここに、オノマトペにおいても単独形式の/p/が有標分節として扱われている様子を見出すことができるのである*¹²。

那須(1999c)の研究は分節レベルの構造の特殊性に対して疑問を投げかけたものであるが、韻律構造に関してもオノマトペの特殊性を疑問視する研究は見られる。たとえば、Murata(1990)および村田(1993, 2001)は等位表現に現われる音節構造を分析した結果、オノマトペにおいても一般語種と同様な韻律制約が働いていることを明らかにしているが、これらの先行研究で指摘されているように、音象徴機能を具備するがゆえにオノマトペの音韻構造を特殊なものとする従来の通念的解釈には再考の余地が残されていると言える。そこで以下では、オノマトペのアクセントおよび韻律構造に現われる末端性の問題について、「特殊性」を前提としない新たな考察を試みることにしたい。

4.4.4 助詞の韻律化と非末端性

末端型のアクセントを示すオノマトペ(P 重複形・接辞形・非派生形)には、その構造を記述する上で注目すべき事実として助詞「と」が義務的に共起するという独特の振る舞

いが見られる。

(39) 助詞の義務性

- a. P 重複形 *ピカピカッ \emptyset 光る。 / ピカピカッと光る。
 *ピッピッピッ \emptyset 鳴る。 / ピッピッピッと鳴る。
 *ピピピッ \emptyset 鳴る。 / ピピピッと鳴る。
 *ポポポン \emptyset 鳴る。 / ポポポンと鳴る。
- b. 接辞形 *ピカリ \emptyset 光る。 / ピカリと光る。
 *ドカン \emptyset 爆発する。 / ドカンと爆発する。
 *ポキッ \emptyset 折れる。 / ポキッと折れる。
- c. 非派生形 *ポン \emptyset 投げる。 / ポンと投げる。
 *パッ \emptyset 光る。 / パッと光る。
 *ザー \emptyset 降る。 / ザー（ッ）と降る*¹³。
 *グイ \emptyset 引っ張る / グイ（ッ）と引っ張る*¹³。

既に第3章で論じたように、こうした助詞の義務的な振る舞いは音韻論的には「韻律化」の概念によって捉えることができる。助詞「と」は文法語のレベルではあくまでも独立の単位であるが*¹⁴、音韻構造においてはオノマトペ本体と密接なつながりを構成していると考えられる。第3章では、助詞「と」がオノマトペ本体と同一の韻律語（四拍鋳型）を構成すると考えることによって共起上の義務性が説明できることを示したが、末端性の問題について考える際にもこの見方は有意義な帰結をもたらし得る。

P 重複形・接辞形・非派生形において助詞「と」が同一の韻律語内に編入されていると考えると——すなわち、助詞が韻律化されていると考えると、その構造に対する分析のあり方は先に示した(23)～(26)とは自ずと異なってくる。「と」が韻律化された構造を対象にフット解析を施したのが(40)の一覧である。

(40) 韻律化構造（非末端構造）

a. P 重複形

形態	音節構造	フット解析	韻律構造
ピカピカ ッと	LLLH L	pi (kapi)(ka Q)to	L + F + F + L] _{PrWd}
コロコロ ッと	LLLH L	ko (roko)(ro Q)to	L + F + F + L] _{PrWd}

ピッピッピ ツと	HHH L	(piQ)(piQ)(pi Q)to	F + F + F + L]PrWd
ポンポンポ ンと	HHH L	(poN)(poN)(po N)to	F + F + F + L]PrWd
ピピピ ツと	LLH L	(pipi)(pi Q)to	F + F + L]PrWd
ポポポ ンと	LLH L	(popo)(po N)to	F + F + L]PrWd

b. 接辞形

形態	音節構造	フット解析	韻律構造
ドカ ンと	LH L	do (ka N)to	L + F + L]PrWd
ポキ ツと	LH L	po (ki Q)to	L + F + L]PrWd
ピカ リと	LL LL	(pika)(rito)	F + F]PrWd

c. 非派生形

形態	音節構造	フット解析	韻律構造
ポ ンと	H L	(po N)to	F + L]PrWd
パ ツと	H L	(pa Q)to	F + L]PrWd
グ ーと	H L	(gu u)to	F + L]PrWd
ポ イと	H L	(po i)to	F + L]PrWd

ここで注目したいのは、助詞が韻律化された構造では助詞「と」の軽音節が末尾に介在することにより、主要部 (F) が韻律語の末端ではなく常に次末位置に現われていることである。また、＜韻律構造＞の欄に示した構造を見るとどのタイプのオノマトペに関しても一律に次のような一般的な特性を伴っているのが分かる。

$$(41) \dots F| + X]_{PrWd} \quad \text{ただし, } X \{F/L\}$$

(41)は主要部と韻律語の末端との間に別の韻律範疇 (X) が常に介在することを意味しているが、この特性は(27a)に示した始端構造の特性と全く同様である。加えて、(41)の構造には先に示した非末端性制約(31)に対して何ら違反するところがない。このことは、一見有標な末端構造を有するかのように思えるオノマトペにおいても実は無標な構造が潜在している可能性を強く物語っている。すなわち上の分析を通じて得られる最も重要な帰結とは、助詞が韻律化された構造をフット解析の領域として定義することによって^{*15}、これまで「末端型」と称してきたタイプのオノマトペの韻律構造から有標な特性——末端構造 (*...F|]PrWd) ——が解消され、逆に無標な特性(41)が現われている様子が捉えられること

である。

助詞の韻律化の概念を導入した分析が有意義であることは、P 重複形・接辞形・非派生形といったいわゆる「末端型」オノマトペにおける助詞の義務性の事実からだけでなく、もともと末端構造とは無縁な S 重複形の構造分析を通じても示すことができる。S 重複形では助詞「と」が随意的に現われる点が特徴であるが、これを韻律論的な視点から分析すると、S 重複形は当初から無標な非末端構造(42)を持っているため強制的に助詞を韻律化する必要が生じないと述べることができる。

(42) S 重複形

形態	音節構造	フット解析	韻律構造
ピ カピカ	L LLL	(pi ka)(pika)	F +F] _{PrWd}
コ ロコロ	L LLL	(ko ro)(koro)	F +F] _{PrWd}
ポ ンポン	H H	(po N)(poN)	F +F] _{PrWd}
ス イスイ	H H	(su i)(sui)	F +F] _{PrWd}
ザ ーザー	H H	(za a)(zaa)	F +F] _{PrWd}

むろん助詞を韻律化した形であっても韻律構造の無標性は保障されるが、(42)に示したように S 重複形では当初から末端構造が現われないので、S 重複形における助詞の韻律化は末端構造を回避する役割を伴わず、ある意味で余剰なプロセスだと言える。この余剰性については S 重複形に関する次の事実からも裏づけられる。S 重複形の中にはひとつだけ、「サ|ッサと」「パ|ッパと」のように助詞を義務的に伴うタイプ——すなわち助詞の韻律化を伴うタイプのものが存在するが、これらにおける韻律化は(43)に示すように構造の有標性を解消する役割を持たない。

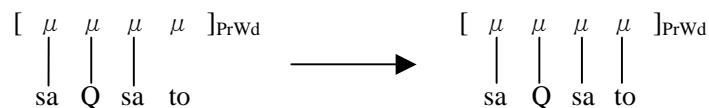
(43) 余剰性

	形態	音節構造	フット解析	韻律構造
a.	*サ ッサ	H L	(sa Q)sa	F +L] _{PrWd}
b.	サ ッサと	H LL	(sa Q)(sato)	F +F] _{PrWd}

助詞を欠いた(43a)「*サ|ッサ」は形式上適格でないが、韻律構造にはなんら有標な特性は認められず、助詞が韻律化された適格形(43b)「サ|ッサと」と同じく非末端構造を有する。この場合の韻律化は、むしろ第3章で論じた四拍性の要求に基づいて生じている可能性が

高い。以下に図示するように、「サッサ」では助詞「と」が四拍鋳型を最終的に満たす要素として現われているからである。

(44) 「サッサと」



以上本節では、一見有標な末端構造を形成しているように思えるオノマトペの中に無標な韻律特性が見出されることを、P 重複形・接辞形・非派生形に生じる助詞の義務性を韻律論的視点から分析することにより明らかにしてきた。従来の研究において構造の有標性が重ねて指摘されてきたオノマトペから無標な韻律特性を見出すことができるのは、ひとえに助詞の韻律化という新たな視点を分析に導入したからにほかならないわけだが、実は、この視点に立脚することによって得られる知見はこのほかにも示すことができる。P 重複形・接辞形・非派生形において、助詞が韻律化された構造がアクセント計算の領域として機能していると考えることにより、これらのオノマトペに現われるアクセント・パターンが日本語に最もありがちな「無標型」としての性質を備えていることが明らかになるのである。この点に焦点を当てて、次節ではアクセント生成過程に見られるオノマトペの無標性について考察する。

4.5 無標型の生成

4.5.1 -3 規則

韻律的な計算が作用することによって新たなアクセントが生成される過程では、特定のパターンだけが突出した生産性を示すケースがしばしば認められる。そのような事例としてよく知られているのが外来語に現われる**次々末型**アクセント (antepenultimate accent) である。

(45) 次々末型

アイソト|ープ, アクチノマ|イシン, ミトコンド|リア, ネクロ|ーシス,
 グルココルチコ|イド, ティアドロップア|ッセイ, シクロヘキシ|ミド,
 プロスタグラ|ンジン

次々末型とは、語末から数えて三番目のモーラに核が生成されるパターンのことを言う。ただし、次々末モーラが重音節の第二モーラ（＝特殊モーラ）に相当するときはその一つ前のモーラに核が移動する性質が見られるので（柴田 1994, 秋永 1998）、厳密には「語末から数えて三番目のモーラを含む音節」に核が与えられると述べた方がよい。McCawley (1968, 1978) は、日本語ではモーラが核の位置を計算する単位として働き、音節が核を担う範疇に位置づけられるとして、次々末型を生成するアクセント規則を次のように記述している。

(46) －3 規則

語末から数えて三番目のモーラを含む音節に核を与えよ。

－3 規則によって生成される次々末型は外来語のみならず複合語のアクセントにおいても生産性が高いことで知られる（秋永 1998, 佐藤 1989, 窪菌 1995, Kubozono 1997）。後部要素が2モーラ以下の複合語に現われる「前核型」(47a)や後部要素が3モーラ以上の複合語に現われる「後部頭核型」(47b)は、ともに次々末型のパターンを示す生産的なグループである*¹⁶。

(47) 複合語の次々末型

a. 後部要素2モーラ以下・前核型

わ|らべ+うた| → わらべ|うた (童歌)
 や|まと+かわ| → やまと|がわ (大和川)
 か|ぶと+むし → かぶと|むし (甲虫)

b. 後部要素3モーラ以上・後部頭核型

こな|+くすり → こなぐ|すり (粉薬)
 いし|+あたま| → いしあ|たま (石頭)
 あ|さ+ご|はん → あさご|はん (朝ご飯)

また、(47)以外のパターンを示す複合語であっても、－3 規則の効果を受けて次々末型へのアクセントの「ゆれ」を来すケースが見られる。後部要素2モーラ以下の複合語に現われる「後部頭核型」(48a)や、後部要素3モーラ以上の複合語に現われる「後部保存型」(48b)がそれである。

(48) 次々末型へのゆれ

a. 後部要素 2 モーラ以下「後部頭核型」

	I	／	II	
に わか+あ め	→ にわかあ め	／	にわか あめ	(俄雨)
ま つば+つ え	→ まつばづ え	／	まつば づえ	(松葉杖)
あかね+そ ら	→ あかねぞ ら	／	あかね ぞら	(茜空)
に んぎょ+ひ め	→ *にんぎょひ め	／	にんぎょ ひめ	(人魚姫)

b. 後部要素 3 モーラ以上「後部保存型」

	I	／	II	
ひだり+うち わ	→ ひだりうち わ	／	ひだりう ちわ	(左団扇)
とこ+はし ら	→ *とこばし ら	／	とこば しら	(床柱)
おんな +ここ ろ	→ *おんなごこ ろ	／	おんなご ころ	(女心)

これらの複合語は後部要素の語彙アクセントがそのまま保持される特殊なグループであり、本来ならば「I」の型だけが期待される場所である。しかし、同時に「II」の次々末型も生成される点が特徴で(窪菌 1996, Kubozono 1997, 秋永 1998), 語によっては「人魚姫」「床柱」「女心」のように専ら次々末型しか生成しないものも見られる。

以上の事実は、次々末型が日本語の派生アクセントの体系にあって最も典型的なパターンであること、すなわちアクセント計算の出力として最も一般的なパターン(無標型)であることを示しているが、ここで興味深いのは、次々末型を生成する-3規則がオノマトペにおいても決して無縁なものではないということである。

P 重複形・接辞形・非派生形など、*いわゆる*末端型のアクセントを示すオノマトペは一見したところ次々末型とは無縁な韻律構造を持つように思えるが(=23~26), 助詞「と」が韻律化された構造をアクセント計算の領域として位置づけると、これらのオノマトペにおいても-3規則に従う形でアクセントの計算が起きている様子が捉えられる。以下に示すように、韻律化構造では一貫して次々末モーラを含む音節に核が与えられている。

(49) 韻律化構造と次々末型 (σ = 音節, μ = モーラ)

a. P 重複形	ピカピカ ツと	$\sigma_{\mu} \sigma_{\mu} \sigma_{\mu} \sigma \Leftrightarrow_{\mu} \sigma_{\mu}]_{PrWd}$
	ピ°ピ°ピ° ツと	$\sigma_{\mu} \sigma_{\mu} \sigma_{\mu} \sigma \Leftrightarrow_{\mu} \sigma_{\mu}]_{PrWd}$
b. 接辞形	ピカ リと	$\sigma_{\mu} \sigma \Leftrightarrow_{\mu} \sigma_{\mu} \sigma_{\mu}]_{PrWd}$
	ドカ ンと	$\sigma_{\mu} \sigma \Leftrightarrow_{\mu} \sigma_{\mu}]_{PrWd}$
	ポキ ツと	$\sigma_{\mu} \sigma \Leftrightarrow_{\mu} \sigma_{\mu}]_{PrWd}$
c. 非派生形	ポ° ンと	$\sigma \Leftrightarrow_{\mu} \sigma_{\mu}]_{PrWd}$
	パ° ツと	$\sigma \Leftrightarrow_{\mu} \sigma_{\mu}]_{PrWd}$
	グ ーと	$\sigma \Leftrightarrow_{\mu} \sigma_{\mu}]_{PrWd}$
	プ イと	$\sigma \Leftrightarrow_{\mu} \sigma_{\mu}]_{PrWd}$

「 $\sigma \Leftrightarrow$ 」はアクセント核を担う音節を示しているが、その位置は紛れもなく－3規則の規定する位置——次々末モーラを含む音節——にほかならない。すなわち、－3規則によるアクセント計算の過程において助詞「と」のモーラも計上の対象になっていると考えることにより、一般語種に見られる無標な特性がオノマトペのアクセント構造にも潜在している様子を明示的に捉えることができるのである。

とりわけ、音節構造の異なる形態が混在する接辞形オノマトペにおいて一律に－3規則に適合したアクセントが予測できる点は、「助詞の韻律化」の概念を導入した分析の大きな利点の一つである。これまで重ねて指摘してきたように、接辞形オノマトペには軽音節のみからなる「ピカ|リと」と重音節を含む「ドカ|ンと、ポキ|ツと」の二種類の構造が観察され、前者では次々末音節 (σ_{-3}) に核が位置する一方で後者では次末音節 (σ_{-2}) に核が位置するが、この二つの音節は「次々末モーラ (μ_{-3}) を含む」という一点においては以下に図示するように共通の特性を含んでいる。

(50) 接辞形

a. ピカ リと	$ \begin{array}{c} \sigma \\ \\ \mu \end{array} \quad \begin{array}{c} \sigma \Leftrightarrow -3 \\ \quad \\ \mu -3 \quad \mu \end{array} \quad \begin{array}{c} \sigma \\ \\ \mu \end{array} \quad \sigma \Bigg)_{PrWd} $
b. ドカ ンと	$ \begin{array}{c} \sigma \\ \\ \mu \end{array} \quad \begin{array}{c} \sigma \Leftrightarrow -2 \\ \quad \diagdown \\ \mu -3 \quad \mu \end{array} \quad \begin{array}{c} \sigma \\ \\ \mu \end{array} \quad \sigma \Bigg)_{PrWd} $

4.5.2 助詞の韻律化と音節量

前節では、－3規則による次々末型アクセントの生成過程を通じてオノマトペのアクセント構造に無標な特性が見出されることを示したが、オノマトペのアクセントの無標性は－3規則とは別の観点からも検証することができる。

Kubozono (1996) によれば、外来語における無標アクセントの生成過程では－3規則のほかに音節量依存型の規則(51)も働いていることが明らかにされている。この規則は「ラテン語アクセント規則(＝英語名詞アクセント規則)」として知られているもので、語末から二番目に位置する音節(次末音節)の重さがアクセントの位置の決定に際して重要な因子として働くことを述べたものである(Chomsky and Halle 1968, Hayes 1995)。

(51) 音節量依存型規則

- a. 次末音節が重音節であれば、その音節にアクセントを付与せよ。
- b. 次末音節が軽音節であれば、次々末音節にアクセントを付与せよ。

Kubozono (1996) は、外来語においてもこの規則に従って生成されるアクセント・パターンが決して少なくないことを指摘している。たとえば以下の外来語のアクセントは－3規則からは予測し得ない一方で(51)の規則に照らし合わせると合理的な説明が得られるタイプのものである。

(52) 音節量とアクセント (H＝重音節, L＝軽音節)

グラ スゴー	LL LH
マンチェ スター	HL LH
ウインブ ルドン	LHL LH
モ ンタレー	H LH
バ ークレー	H LH
イ ンタビュー	H LH
ト ロフィー	L LH

これらの外来語に共通しているのは次末位置に軽音節が現われることと、その一つ前の音節にアクセント核が生成されていることである。加えて、Kubozono (1996) および窪菌・太田 (1998) は、音節量依存型の規則(51)が－3規則に比肩するほどの生産性を備えてい

ることを以下の事実を通じて明らかにしている。－3規則によって次々末型アクセントを生成する外来語の中には、これとは別の型(53b)を同時に併せ持つ語が少なからず観察される。

(53) ゆれ

a. 次々末型

ミュージ|シャン
エンデ|バー
クーデ|ター
アレル|ギー
レバ|ノン
カーディ|ガン
エネ|ルギー

b. 別の型

ミュ|ージシャン
エ|ンデバー
ク|ーデター
アレ|ルギー
レ|バノン
カ|ーディガン
エネ|ルギー

「ミュージシャン」以下の外来語は－3規則から予測される次々末型(53a)と同時に音節量依存型の規則から予測される(53b)の型をも併せ持つが、重要なのは、こちらの型が決して稀少なタイプなのではなくむしろ生産性を持った型だという点である。窪菌・太田(1998)で論じられているように、現代日本語においては生産的な型を作り出す規則に－3規則と音節量依存型規則の二つがあり、両者はともに無標型を志向する規則として競合しあう関係にあると考えられる。

音節量とアクセントの相関性を明らかにした上述の知見を踏まえた上で、あらためてオノマトペのアクセントに目を向けてみると、興味深いことにオノマトペのアクセント生成過程においても音節量の情報が深く関与している様子が見えてくる。

P 重複形・接辞形・非派生形について、助詞が韻律化された構造を対象にその音節構造を示したのが(54)であるが、これを見ると、アクセント核の位置と次末音節の重さとの間に明らかな相関が成り立っていることが分かる。次末音節が重い場合(**H**)にはその音節がアクセントを受け、軽い場合(**L**)にはその一つ前の音節にアクセントが与えられるといった具合に、(51)の規則の記述に適合した振る舞いが見られるのである。

(54) 助詞の韻律化と音節量 (H=重音節, L=軽音節)

a. P 重複形	ピカピカ ッと	LLLH[L] _{PrWd}
	ピ [◦] ピ [◦] ピ [◦] ッと	LLH[L] _{PrWd}
b. 接辞形	ピカ りと	LL[LL] _{PrWd}
	ドカ ンと	LH[L] _{PrWd}
	ポキ ッと	LH[L] _{PrWd}
	ポ [◦] ンと	H[L] _{PrWd}
c. 非派生形	パ ッと	H[L] _{PrWd}
	グ ーと	H[L] _{PrWd}
	プ イと	H[L] _{PrWd}

上に挙げたオノマトペのうち、音節量とアクセントの相関性をめぐってとりわけ明瞭な対比を見せているのは接辞形オノマトペ(54b)である。重音節を含む「ドカ|ンと、ポキ|ッと」では次末箇所(重音節)に重音節が位置する構造(LHL)が得られ、しかもこの音節がアクセントを受けている。他方、軽音節のみからなる「ピカ|りと」では、次末箇所(軽音節)に軽音節が位置する構造(LLLL)が得られるが、この軽音節はアクセントを受けず(*ピカ|りと)、それよりも一つ前の音節にアクセントが与えられている。

以上の検証を通じて明らかなように、助詞が韻律化された構造をアクセント計算の領域として位置付けることにより、二つの側面からオノマトペのアクセントの無標性を捉えることができる。ひとつはオノマトペにおいても-3規則に適合した無標なアクセント構造(次々末型)が生成されていることであり、もうひとつは、音節量依存型の規則に関してオノマトペのアクセントが無標なパターンを示すことである。これらの帰結は、オノマトペの韻律構造が必ずしも通念的に考えられているほど特殊なものではないこと——すなわち、一見有標な構造を持つかのように思われるオノマトペの中に無標な韻律特性が潜在していることを示唆している。

4.6 本章のまとめ

オノマトペは音象徴のことばとして独特のステイタスを持つ語種であるがゆえに、音韻構造に関しても、従来その特殊な側面に注目が集まりがちであった。しかしながら、本章

ではこれまでの通念的解釈に疑問を投じた上で、アクセントに対する分析を通じてオノマトペの韻律構造に備わる無標性について明らかにしてきた。

本章の考察の根幹をなす考え方は、助詞「と」を編入した構造を韻律計算の作用域として位置づける「助詞の韻律化」のモデルである。このモデルに基づいて本章では、①一見有標な韻律構造（末端構造）を持つと思われるオノマトペに非末端性制約への適合性が観察されること（=40）、②オノマトペのアクセントにおいても次々末型を生成する－3規則が機能していること（=49）、および③アクセント生成に音節量の情報が関与していること（=54）の三点を明らかにしてきた。

オノマトペの韻律構造を分析するにあたり「助詞の韻律化」の概念を導入することによって妥当な帰結が得られることは、特に②および③の考察から裏付けることができる。以下のまとめに見るように、オノマトペでは－3規則ならびに音節量依存型規則が予測する最も無標なアクセント・パターンが生成されていることが分かるが、こうした無標性を捉えることができるのも、ひとえに「助詞の韻律化」の概念を分析に導入した点に拠るところが大きい。

(55) 無標型の生成

形態	－3規則	音節量依存型規則
ピカピカ ツと]PrWd	$\sigma_{\mu} \sigma_{\mu} \sigma_{\mu} \sigma \Leftrightarrow_{\mu} \mu \sigma_{\mu}]_{PrWd}$	LLLH[L]PrWd
ピピピ ツと]PrWd	$\sigma_{\mu} \sigma_{\mu} \sigma \Leftrightarrow_{\mu} \mu \sigma_{\mu}]_{PrWd}$	LLH[L]PrWd
ピカ りと]PrWd	$\sigma_{\mu} \sigma \Leftrightarrow_{\mu} \sigma_{\mu} \sigma_{\mu}]_{PrWd}$	LL[LL]PrWd
ドカ んと]PrWd	$\sigma_{\mu} \sigma \Leftrightarrow_{\mu} \mu \sigma_{\mu}]_{PrWd}$	LH[L]PrWd
ポキ ツと]PrWd	$\sigma_{\mu} \sigma \Leftrightarrow_{\mu} \mu \sigma_{\mu}]_{PrWd}$	LH[L]PrWd
ポ んと]PrWd	$\sigma \Leftrightarrow_{\mu} \mu \sigma_{\mu}]_{PrWd}$	H[L]PrWd
パ ツと]PrWd	$\sigma \Leftrightarrow_{\mu} \mu \sigma_{\mu}]_{PrWd}$	H[L]PrWd
グ ーと]PrWd	$\sigma \Leftrightarrow_{\mu} \mu \sigma_{\mu}]_{PrWd}$	H[L]PrWd
プ いと]PrWd	$\sigma \Leftrightarrow_{\mu} \mu \sigma_{\mu}]_{PrWd}$	H[L]PrWd

以上の考察を通じて、本章では、オノマトペに起こる韻律計算のプロセスが一般語種での無標な韻律計算のプロセスと原則的に同じ性質を共有していることを明らかにし、オノマトペの韻律構造が従来考えられているほど特殊なものとは言えないこと——むしろ、日本語に一般的な韻律特性を備えている可能性があることを示した。

第 5 章

強調語形成と音韻構造の有標性

5.1 はじめに

本章では、音節構造ならびに分節構造の有標性に関する音韻情報が語形成過程に与える影響について、重複形オノマトペに生じる強調現象(1)を通じて考察する。

(1) 重複強調形

基体	強調形 A / 強調形 B
ピカピカ	ピッカピカ / ピカッピカ
カチカチ	カッチカチ / カチッカチ
クタクタ	クッタクタ / クタックタ
カサカサ	カッサカサ / カサッカサ

この語形成の特徴は可能な出力形式が複数存在することである。ひとつは強調辞（促音）が語幹の内部に現われる強調形 A であり、もうひとつは語幹の末尾に強調辞が現われる強調形 B である。両者は語頭位置の音節構造が鏡像的で、強調形 A では語頭に「重音節＋軽音節」の連鎖（HL）が形成される一方、重複形 B では「軽音節＋重音節」の連鎖（LH）が作られる。つまり重複強調形では、二通りの音節構造（HL- / LH-）がともに適格なのである。

しかしながら、日本語のその他の語形成では HL 構造と LH 構造の間には明確な適格性の差が現われることが知られている。語形成を通じて同一の形態の内部に重さの異なる音節が作られる場合、日本語では HL 構造が好まれやすい傾向にある一方で、これとは逆の配列を含む LH 構造は忌避されやすい (Itô 1990, 窪田 1992, 1993, 1995, 2000, Kubozono 2000,

Itô, Kitagawa, and Mester 1996)。(2)にまとめて示すように短縮語・倒位語・母親語(幼児語)などの語形成過程では HL 型の出力形式が適格である一方で LH 型の出力は起こらない。

(2) a. 短縮語

HL : パーマ (ネント), サイケ (デリック), コンビ (ネーション)

*LH : *ロケー (ション), *デモン (ストレーション)

b. 倒位語

HL : ズージャ (<ジャズ), ツンパ (<パンツ), ツイド (<ドイツ)

*LH : *ズジャー (<ジャズ), *ツパン (<パンツ), *ツドイ (<ドイツ)

c. 母親語

HL : マンマ, オンブ, アンヨ, ダッコ, オッキ, ホッペ

*LH : *ママン (cf. マンマ), *ウチン (cf. ウンチ)

この非対称性は音節構造の有標性の違いによってもたらされる現象だと考えられている。日本語の場合、二つの音節が連鎖をなす構造では以下の順で有標性の度合いの差が観察される (Kubozono 1998)。

(3) 音節構造の有標性

(無標) HL > HH, LL > LH (有標)

短縮語・倒位語・母親語の事実(2)は、有標な音節構造であるがゆえに LH 構造が一貫して回避される傾向にあることを示しているわけだが、問題は、一般語種での語形成(2)において音節構造の有標性の差が即座に形態の適格性の差に結びつく条件として働くのに対し、重複強調形(1)では必ずしもそうではない点である。

ただし、(3)に示した有標性の尺度は「適格性」とは別の側面において重複強調形の形成過程に影響をもたらしている。那須 (1999a,b) では、重複強調形の形成過程では語頭に HL 構造を含むタイプ (HL 型) が現われやすく、逆に LH 構造を語頭に含むタイプ (LH 型) はやや出現率が低いとの報告がなされているが*¹, このことは、HL 型と LH 型との間に「適格性」の差は見られなくても「有標性」の差は依然として反映されていることを物語っている。すなわち、重複強調形では語頭に無標な HL 構造を作り出す位置に強調辞が挿入されやすいことが予測されるのである。

上述の予測を出発点として、本章では重複強調形の形成過程と音節構造の関わりをめぐ

って次の手順で考察を進めて行く。まず第2節において重複強調形の語形成上の特徴について述べる。重複強調形の形成過程については既に第2章で論じているが、要点を絞ってあらためて振り返っておくことにする。第3節では重複強調形における重音節の現われ方についてその言語事実を把握する。ただし重複強調形は比較的生産性の高い語形成であるため各種オノマトペ辞典を参照しても立項の対象となっていない場合が多く、辞典類の記述に依拠して言語事実を把握することは困難である。そこで本研究では言語事実を捉える方法として91名の大学生を対象とする調査を試み、得られた結果に基づいて分析を行った。続く第4節では調査結果から得られた分析に基づき、強調辞の位置を決める二つの因子——①音節構造の有標性と②分節構造の有標性——について考察し、重複強調形の形成過程がこれら二つの有標性因子の相関(有標性の計算)によって統御されていることを論じる。

5.2 重複強調形

オノマトペの強調形が接辞強調形(4a)と重複強調形(4b)の二種類に大別できることは既に第2章で論じたとおりである。

(4) 強調形

- a. 接辞強調形 バタリ → バッターリ, ザブリ → ザンブリ
- b. 重複強調形 ピカピカ → ピッカピカ, スベスベ → スベッスベ

本節では接辞強調形との相違点を中心に、重複強調形の語形成上の特徴について概観しておく。

5.2.1 強調辞の種類

両者にはまず強調辞として現われる分節の種類に違いが認められる。接辞強調形の場合、強調辞として現われる分節の音価は語幹の第二子音の性質(有聲性)に従って音韻的に決まる。すなわち、促音:撥音の間で厳密な相補分布をなす。たとえば語幹の第二子音が無声音である「バタリ」では促音を強調辞とする「バッターリ」が形成され、他方、語幹の第二子音が有声音である「ザブリ」では撥音を強調辞とする「ザンブリ」が作られる。

一方、重複強調形の場合は、必ずしもこうした厳密な相補分布の原理によって強調辞の種類が決定されているとは言えない。たとえば語幹の第二子音が有声音である「スベスベ」

から派生される強調形の場合、仮に強調辞の種類が厳密な相補分布の原則に従って決まっているのであれば当然「*スンベスベ」といった形態が期待されるところであるが、実際にはこうした形は現われにくい。

- (5) スベスベ → *スンベスベ
 ギザギザ → *ギンザギザ
 ガバガバ → *ガンバガバ
 ケバケバ → *ケンバケバ

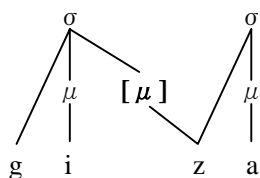
田守(1991)が「バッラバラ」といった例を挙げていることから窺えるように、総じて重複強調形では分節構造に関する音韻的制限が緩く、日本語に通常課される音配列制約*²に従わない構造が許されやすい。たとえば相補分布の原理を無視した次のような形式(強調辞として促音が専らに選択された形)であっても実際の発話に上る機会が多い*³。

- (6) スベスベ → スッベスベ
 ギザギザ → ギッザギザ
 ガバガバ → ガッバガバ
 ケバケバ → ケッバケバ

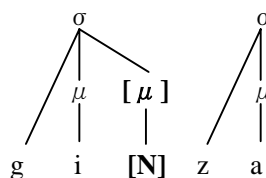
(5)と(6)の強調形に見る構造上の違いを形式的な側面から捉えると、(6)では強調辞のモーラ以外に挿入される要素が皆無であるのに対して、(5)では強調辞のモーラのほかに撥音の分節/Nが挿入されていることが分かる。「ギッザギザ/*ギンザギザ」を一例として両者の構造上の違いを(7)に示す。(強調辞を含む形態素のみを表示。【太字】は挿入要素。)

(7) 構造の違い

a. ギッザ(ギザ) : (6)



b. *ギンザ(ギザ) : (5)



このうち(7a)は挿入要素を最小限に留めた派生構造だと言える。すなわち、基体に対して韻律形態素【μ】だけが与えられ、その具体的音価が直後の子音からの単純な同化によって

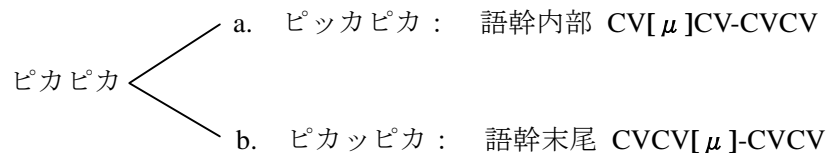
決まる構造であるが、(5)と(6)を比べた場合、多少の不自然さを伴いつつも後者のほうが現われやすいことを鑑みると、重複強調形は基本的に(7a)の構造に基づいて作り出されていると考えられる。換言すると、重複強調形において促音が強調辞として選択されやすいのは、(7a)の構造が作り出されていることの現われだとも言える。

なお、田守（1991, 1993）は一般語種にも重複強調形に類する語形成が見られることを指摘している。一般語種に現われる強調形においても分節構造上の制限の緩さは変わらないようで、たとえば「すごい → すっごい（凄い）」「しぶい → しっぶい（渋い）」「まずい → まっずい（不味い）」といった口語的表現に見られるように、本来は撥音が期待される位置——すなわち有声阻害音の直前——にあえて促音が挿入されるケースは珍しくない。

5.2.2 強調辞の位置

(1)に見たように、重複強調形では強調辞[μ]の入る位置に語幹内部・語幹末尾の二通りの可能性がある。

(8) 強調辞の位置



重複強調形では強調辞[μ]の挿入位置がかなり自由な選択に任されている。(8a)と(8b)のどちらも文法的な形であることから、両者を「適格性」の基準で色づけすることにはそれほど大きな意味はない。

しかしながら、「現われやすさ」という点ではどうであろうか。仮に、一方の現われやすさが他方に比べて勝る場合、両者の間には「適格性」の差は無くても「有標性」の差は存在することになる。(8a)(8b)を区別する最も顕著な差異は、その音節構造のあり方に求められる。語幹内部に強調辞を含む(8a)「ピッカピカ」の語頭部分には HL 構造が現われるが、語幹末尾に強調辞を含む(8b)「ピカッピカ」の語頭部分では逆に、LH 構造が現われる。

(9) 音節構造 (H=重音節, L=軽音節)

a. ピッカピカ (語幹内部): **HLLL**b. ピカッピカ (語幹末尾): **LHLL**

HL 構造と LH 構造の間には有標性の差が存在することが先行研究において指摘されており (Itô 1990, 窪田 1992, 1993, 1995, 2000, Kubozono 2000, Itô, Kitagawa, and Mester 1996), 日本語においては HL 構造の方が LH 構造よりも無標な類型であるとの共通の主張がなされている。これらの先行研究の知見を踏まえるならば, オノマトペにおいても(9a)の方が(9b)よりも現われやすい形——より無標な形——であるとの予測が成り立つ。

ところで, 強調辞の入る位置に関してはもう一つ注目すべき事実がある。興味深いことに, 重複形の後部要素に強調辞の入った(10)のような形式は一貫して適格性を欠くのである。

(10) 不適格形

ピカピカ → *ピカピッカ

ピチピチ → *ピチピッチ

ホカホカ → *ホカホッカ

ガチガチ → *ガチガッチ

ドキドキ → *ドキドッキ

ギザギザ → *ギザギzza

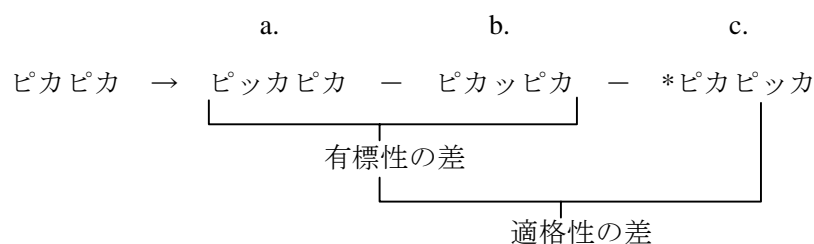
ガバガバ → *ガバガッバ

スベスベ → *スベスッベ

ケバケバ → *ケバケッバ

先ほど「ピカピカ」から派生される形について, 「ピッカピカ (8a)」と「ピカッピカ (8b)」の間では「有標性」の差こそあれ比較的自由的な選択が成り立ち得るとの観察を示したが, 同じ「ピカピカ」から作り出され得る形であっても, (11)の「*ピカピッカ」に関してはそうした自由的な選択の候補には決して入らない。すなわち, 明らかな「適格性」の差が見られるのである。

(11) 適格性と有標性



(11a,b)と(11c)の間には適格性に関して明確な断絶がある。問題はこの断絶がどのような理由によって生じているかである。両者の相違を探ると、この場合もやはり音節構造のあり方に違いが生じていることが分かる。とりわけ、重音節の位置に関して顕著な相違が見られ、(11a,b)では重音節が重複形の前部要素の内部に生じているのに対し、(11c)では後部要素の内部に生じているといった違いが見出される。

(12) 重音節の位置 (「—」は形態素境界)

{ HL—LL / LH—LL } : *{LL—HL}

記述的なレベルでこの相違を一般化するのであれば、「重複形の後部要素に重音節が含まれていてはならない」といった説明が可能であろう。しかしながら、この説明は次の事実の前に効果を失ってしまう。

(13) 超強調形 (「—」は形態素境界)

ピッカピッカ HL—HL
ピッチピッチ HL—HL
ホッカホッカ HL—HL

(13)は重複形の前部要素と後部要素の両方に強調辞が入った形態で、田守(1991)はこれを「超強調形」と呼んでいる。超強調形では後部要素にも重音節が現われるため、先ほどの説明が成り立たなくなってしまうのである。

以上の議論をまとめると、次節以降で検証すべき課題が見えてくる。第一の課題として、HL 構造と LH 構造との間に予測される有標性の違いを言語事実を通じて明らかにする作業が必要である。第二に、「*LLHL」構造の非文法性がなぜ起こるか考える必要がある。(13)の反例がある限り単に重音節の位置を観察するだけでは有効な説明が成り立たないのは明

白であるので、(13)の形態も含め、重複強調形の適格性を総合的に予測する基準を探ることが課題となる。

5.3 調査

村田（1993）の指摘にあるように、重複強調形はオノマトペの語形成の中でも極めて生産性の高いプロセスであり、各種オノマトペ辞典等を見ても体系的な立項がなされていないケースがほとんどである。このため言語事実を捉える上で辞典類の記述を参考にすることは難しい。また、前節で論じたように重複強調形には選択可能なパターンが複数あり（HLLL：LHLL）、そのいずれもが適格であることから、一個人の内省のみを頼りに記述を進めることは言語事実を探る上で妥当な方法とはいいがたい。そこで、この節では語彙調査を通じて重複強調形の形成過程の実態を定量的に把握する。

5.3.1 調査方法

本研究では大学生 91 名を対象に面接による語彙調査を行った。この調査では、強調形のベースとなる重複形オノマトペを短文に入れて示し、その重複形を強調した場合に最も適切と判断される語形を選択肢の中から強制的に一つだけ選んで回答してもらう方式を採用した。選択肢には、促音を強調辞として含んだ三種類の強調形態を用意した。その三種類とはこれまで述べてきた「HLLL 型」「LHLL 型」「LLHL 型」である。なお、超強調形は選択肢には含めないこととした。調査項目の一例を挙げておく。

提示文：「この帽子はブカブカだ。」

選択肢：[Ⅰ．ブッカブカ / Ⅱ．ブカッブカ / Ⅲ．ブカブッカ]

提示文中の下線部の強調形として最もふさわしいものを「Ⅰ（HLLL 型）」・「Ⅱ（LHLL 型）」・「Ⅲ（LLHL 型）」のうちから一つだけ選択するわけだが、どうしても選択不能な場合は「無回答」とした。

選択肢「Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」の中から回答できるものを強制的に一つに限定したのは次の理由による。最前述べたように、重複強調形には文法的な形態として「Ⅰ（HLLL 型）」と「Ⅱ（LHLL 型）」の複数がある。このため、仮に複数回答を可能としてしまうと「Ⅰ」「Ⅱ」の両方が回答される可能性が高くなる。「適格性」を判定する調査であればこうした方式で

も構わないが、今回の調査では文法的な形式の間に起こる「有標性」の違いを把握することも目的の一つであるため、文法的な「Ⅰ」・「Ⅱ」の間に生じる差異を十分に捉えるべく、選択可能な項目を一つに限定することにした。また、超強調形を選択肢に含めなかったのは次の理由による。超強調形は重音節を二箇所を含む点で他の強調形とは決定的に特性が異なる。とりわけ重音節の位置に関して超強調形「HLHL」が「Ⅰ（HLLL 型）」と「Ⅲ（LLHL 型）」の特性を同時に兼ね備えてしまう性質を持っていることは、解釈上の混乱を誘発する要因になりかねない。すなわち、仮に回答者が超強調形「HLHL」を適正な形として選択した場合、「Ⅰ（HLLL 型）」との共通性（すなわち、語頭音節が H である）を是とした結果なのか、あるいは「Ⅲ（LLHL 型）」との共通性（すなわち、後部要素に H が含まれる）を是とした結果なのか、十分な判断が期待できないことになる。今回の調査では重音節の入り得る位置に的を絞り、適格な位置と不適格な位置の判別（適格性）および、自然な位置とそうでない位置の判別（有標性）の実態を捉えるのが目的であるため、超強調形を選択肢に含めてしまうところこの目的が十分に達成できないことになる。

調査対象とするオノマトペは Hamano (1998) の巻末の一覧表に記載されているものの中から採った。その際、語幹の子音が阻害音で構成されているものだけを選抜し、合計 24 語を得た。阻害音を含むものだけを選んだのは、有声性の対立が強調辞の位置の決定にもたらす影響を調べるためである。

(14) 調査語彙*⁴

A 群：語幹の第 1 子音・第 2 子音がともに無声阻害音であるもの。

ピチピチ、ピカピカ、テカテカ、クタクタ、
パサパサ、カサカサ、スカスカ

B 群：語幹の第 1 子音・第 2 子音がともに有声阻害音であるもの。

ダブダブ、ガバガバ、ギザギザ、ズブズブ

C 群：第 1 子音が有声阻害音で、第 2 子音が無声阻害音であるもの。

ベタベタ、ブカブカ、ドキドキ、ガチガチ、ガクガク、
バサバサ、グシャグシャ、ズタズタ、ジュクジュク

D 群：第 1 子音が無声阻害音で、第 2 子音が有声阻害音であるもの。

ツブツブ、ケバケバ、タジタジ、スベスベ

各群の所属語数が一定でないのは恣意的な理由によるものではなく、実在語形の音配列上

の偏りによってやむを得ず生じたものである。たとえばB群・D群の語数が他と比べて少ないのは、第2子音に有声阻害音を含むオノマトペそのものが元来少ないことによる偶然の偏りである (Hamano 1998, 那須 1999b,c)。また、実在するオノマトペであっても重複強調形の用法を持たないものは、用法の欠損による不自然さが判断の根拠にされてしまう恐れがあるので、調査語彙から省かざるを得ないという事情がある*⁵。

5.3.2 調査結果

調査によって得られた各型の支持率をまとめたのが以下の表である。表中の実数は当該の選択肢を回答した人数を、() 内の数値は割合を表す。「I型」・「II型」・「III型」はそれぞれ、「HLLL型 (例：ピッカピカ)」・「LHLL型 (例：ピカッピカ)」・「LLHL型 (例：ピカピッカ)」に相当する。

(15) 調査結果

[表1]：A群 (語幹の子音がともに無声阻害音であるグループ)

語	I型	II型	III型	無回答	合計
ピチピチ	85 (93%)	5 (6%)	0 (0%)	1 (1%)	91 (100%)
ピカピカ	90 (99%)	1 (1%)	0 (0%)	0 (0%)	91 (100%)
テカテカ	74 (81%)	17 (19%)	0 (0%)	0 (0%)	91 (100%)
クタクタ	83 (91%)	8 (9%)	0 (0%)	0 (0%)	91 (100%)
パサパサ	63 (69%)	27 (30%)	1 (1%)	0 (0%)	91 (100%)
カサカサ	59 (65%)	30 (33%)	2 (2%)	0 (0%)	91 (100%)
スカスカ	75 (82%)	15 (17%)	0 (0%)	1 (1%)	91 (100%)
合計	529 (83.0%)	103 (16.2%)	3 (0.5%)	2 (0.3%)	637 (100.0%)

[表2]：B群 (語幹の子音がともに有声阻害音であるグループ)

語	I型	II型	III型	無回答	合計
ダブダブ	70 (77%)	17 (19%)	0 (0%)	4 (4%)	91 (100%)
ガバガバ	58 (64%)	26 (29%)	1 (1%)	6 (6%)	91 (100%)
ギザギザ	66 (73%)	21 (23%)	1 (1%)	3 (3%)	91 (100%)
ズブズブ	44 (48%)	35 (39%)	1 (1%)	11 (12%)	91 (100%)
合計	238 (65.4%)	99 (27.2%)	3 (0.8%)	24 (6.6%)	364 (100.0%)

[表3]: C群 (語幹の第1子音が有声阻害音・第2子音が無声阻害音であるグループ)

語	I 型	II 型	III 型	無回答	合計
ベタベタ	80 (88%)	9 (10%)	2 (2%)	0 (0%)	91 (100%)
ブカブカ	87 (96%)	4 (4%)	0 (0%)	0 (0%)	91 (100%)
ドキドキ	90 (99%)	1 (1%)	0 (0%)	0 (0%)	91 (100%)
ガチガチ	84 (92%)	7 (8%)	0 (0%)	0 (0%)	91 (100%)
ガクガク	77 (85%)	11 (12%)	0 (0%)	3 (3%)	91 (100%)
バサバサ	83 (91%)	8 (9%)	0 (0%)	0 (0%)	91 (100%)
グシャグシャ	79 (87%)	10 (11%)	1 (1%)	1 (1%)	91 (100%)
ズタズタ	86 (95%)	4 (4%)	1 (1%)	0 (0%)	91 (100%)
ジクジク	73 (80%)	7 (8%)	1 (1%)	10 (11%)	91 (100%)
合計	739 (90.2%)	61 (7.5%)	5 (0.6%)	14 (1.7%)	819 (100.0%)

[表4]: D群 (語幹の第1子音が無声阻害音・第2子音が有声阻害音であるグループ)

語	I 型	II 型	III 型	無回答	合計
ツブツブ	17 (19%)	64 (70%)	0 (0%)	10 (11%)	91 (100%)
ケバケバ	49 (54%)	38 (42%)	1 (1%)	3 (3%)	91 (100%)
タジタジ	28 (31%)	39 (43%)	0 (0%)	24 (26%)	91 (100%)
スベスベ	46 (51%)	45 (49%)	0 (0%)	0 (0%)	91 (100%)
合計	140 (38.5%)	186 (51.1%)	1 (0.2%)	37 (10.2%)	364 (100.0%)

[表5]: 全体

I 型	II 型	III 型	無回答	合計
1 6 4 6 (75.4%)	4 4 9 (20.6%)	1 2 (0.5%)	7 7 (3.5%)	2 1 8 4 (100.0%)

5.3.3 分析

[表1]から[表5]を一覧してまず気づくのは、全体的にI型の支持率が最も高く、反対にIII型の支持率は極度に低いことである。この結果は(11)に示した予測——適格性と有標性に関する予測——を十分に裏付けるものとなっている。[表5]でI型全体の支持率が最も高い割合を示していること(1646/75.4%)は、HLLL型が強調形として最も現われやすい形であることを物語っている。逆にIII型全体の支持率が極端に低い割合を示していること(12/0.5%)は、*LLHL型の強調形が適格性を欠いた形であることを示すに十分であろう。III型はA~Dのどの群においても支持率が低いことから、明らかに不適格な形式であることが分かる。

各群別に調査結果から得られる所見を述べると、まずA群[表1]では、圧倒的にI型の支持率が高くなっている。「パサパサ」「カサカサ」の二語については他よりI型支持率がやや落ち込むが、それでもII型・III型に比べて優位な数値を示していることには変わりない。このことから、語幹の子音がともに無声阻害音である場合にはI型「HLLL」が強調形態として最も現われやすいことが分かる。II型「LHLL」も多少の支持率を見せるが、I型に及ぶほどではない。これは、II型が適格な形ではあるもののI型に比べるとやや劣勢な型であることを物語っている。

次にB群[表2]を見よう。この群でもI型の支持率の高さが指摘できる(238/65.4%)。ただし、A群に比べるとその割合はやや低くなっている。B群においてI型の支持率がA群に比べ減少しているのは、ひとつにはII型(99/27.2%)への流出がその理由として考えられるが、同時に「無回答」の選択率が増していることもこれと無縁ではなかろう。A群では「無回答」が0.3%しか占めないのに対し、B群では6.6%にのぼっている点に注目したい。B群の語彙では語幹の子音がともに有声阻害音であるため、I型・II型のいずれを選択しても「ダブダブ」「ダブダブ」のように促音の直後に有声阻害音が位置する有標な分節構造が作られることになるが、「無回答」の占める割合が上昇しているのは、こうした有標な分節構造そのものが不自然と評価された結果だと考えられる。とは言え[表2]の結果からは、有標な分節構造しか得られない場合でもII型「LHLL」よりはI型「HLLL」の方が現われやすい構造であることが窺える。

C群[表3]は、I型の支持率が最も高いグループとして特筆できる(739/90.2%)。この群では競合するII型・III型の支持率がそれぞれ7.5%と0.6%に落ち込んでおり、圧倒的にI型が現われやすい。C群でのI型の支持率の高さには語幹を構成する分節の構造が関係していると思われる。先に見たA群・B群の場合は語幹に含まれる二つの子音の有声性が一致していたのに対し、第1子音が有声音・第2子音が無声音であるC群では語幹に含まれる二つの子音の間で有声性の違いが生じているわけだが、この点は、促音(強調辞)を挿入する音韻環境に次のような大きな差異をもたらしている。まずI型の強調形では、促音を挿入するとその直後に無声阻害音が続く構造が得られる(例:ベッタベタ)。一方、II型の場合は「ベタッベタ」のように促音の直後に有声阻害音が位置する構造が作られる。両者を有標性の観点から比較した場合、後者の方が有標性の高い構造であることは明らかであることから(Itô and Mester 1995)、無標な分節構造を含むI型の方がより自然な形として支持されやすかったものと考えられる。すなわち、HLLLという望ましい音節構造が

得られることと「促音＋無声阻害音」という無標な分節構造が得られることの二つの要因が相乗効果を発揮した結果、Ⅰ型の支持率がかなりの度合いで高まったものと分析できる。

最後のD群[表4]では、これまで見てきた三つの群とは大きく異なる結果が得られた。注目すべきは、この群だけが他の三群に比べⅡ型に高い支持を集めていることである(186/51.1%)。Ⅰ型の支持率も決して低いというわけではないが(140/38.5%)、Ⅱ型に5割を超える回答数が得られたのはD群だけである。D群においてこうした結果が得られたことには、先のC群の場合と同様、語幹の分節構造がその要因として影響していると考えられる。D群のオノマトペの場合、語幹の第1子音が無声阻害音・第2子音が有声阻害音である点が特徴である。すなわち、子音の有声性に関してC群のオノマトペとは正反対の分節構造を持っていることになるが、これに連動する形で、促音(強調辞)を挿入する音韻環境にもC群とは正反対の特徴が現われる。まずⅠ型の強調形では「ツブツブ」のように「促音＋有声阻害音」からなる有標な構造が作られるが、一方でⅡ型の強調形の場合は「ツブツツブ」のように無標な「促音＋無声阻害音」の構造が得られる。この点から推察するに、D群においてⅡ型が支持されやすいのは、それがⅠ型よりも無標な分節構造を含んでいるからだと考えられる。この点に加えてD群の結果から指摘できるのは、「分節構造の有標性」が「音節構造の有標性」よりも強調辞の挿入に際して重視されているということである。音節構造の望ましさという点ではⅠ型のHLLL構造がⅡ型のLHLL構造よりも支持率において勝ることが予測されるが、D群の場合にはこの予測が成り立たない。望ましい音節構造を含むⅠ型よりも無標な分節構造を含むⅡ型の方が高い支持を集めているという事実は、音節構造の有標性よりも分節構造の有標性の方が、判断基準として優先的な地位を占めていることを意味する。

5.3.4 記述的一般化

以上の分析からは次にまとめる四点の記述的一般化(16)～(19)が導き出せる。

まず、Ⅲ型の支持率がA～D群のいずれにおいても極端に低いことから*LLHL構造を持つ強調形は一貫して非文法的な形式だと言えるが、このことは、音節構造のタイプに(16)のような適格性の差が存在していることを意味している。

(16) 適格性の差

{HLLL, LHLL} / *LLHL

したがって強調形の出力として文法的に適格な候補は HLLL 構造と LHLL 構造の二通りに絞られることになるが、全体を通じてⅠ型の支持率がⅡ型の支持率を上回るという事実からは、HLLL 構造の方が LHLL 構造よりも現われやすいこと、すなわち、より無標な構造であることを示唆している。

(17) 音節構造の有標性

無標構造：HLLL

有標構造：LHLL

ただし、強調形の形成に際して音節構造の有標性だけがその基準として働いているわけではなく、分節構造の有標性も有意味な基準であることがD群の事実から窺える。

(18) 分節構造の有標性

無標構造：促音＋無声阻害音

有標構造：促音＋有聲阻害音

加えて、D群においてのみⅡ型の支持率がⅠ型の支持率を上回るという事実は、音節構造の有標性と分節構造の有標性との間に(19)のような優先順位の格差が存在することを物語っている。

(19) 優先性

分節構造の有標性 > 音節構造の有標性

以上の記述からは、音節構造の有標性と分節構造の有標性が相互に関わりを持ちつつ作用している様子が読み取れるが、次節ではそれぞれの構造での有標性の度合いの差を生み出す要因について(16)～(19)に示した順に沿って考察するとともに、強調語形成における有標性の計算のしくみについて検証する。

5.4 有標構造の特性

5.4.1 重さの条件

はじめに*LLHL 構造の非文法性(16)の要因について考察する。適格な強調構造 HLLL／

LHLL と不適格な強調構造*LLHL を比べてまず気づくのは、強調辞の挿入に伴う重音節の位置の違いである。前二者では重複構造の前部要素の内部に重音節が生じるのに対し、後者では後部要素の内部に重音節が生じている。

(20) 重音節の位置（「ー」は形態素境界）

- a. **HL**–LL ピッカーピカ、テッカーテカ、パッサーパサ
- b. **LH**–LL ピカッーピカ、テカッーテカ、パサッーパサ
- c. ***LL**–**HL** *ピカーピッカ、*テカーテッカ、*パサーパッサ

この事実を見る限り、*LLHL 型が適格でないのは重複形の後部要素に重音節が形成されるためだと説明することもできるが問題はそう単純ではない。適格な強調形の中には「ピッカピッカ」「テッカテッカ」「パッサパッサ」のように両方の形態素の内部に促音を含む形（「超強調形」田守（1991））もあり、これらにおいては(20c)と同様に後部要素に重音節を含むという特徴が見られる。

(21) 超強調形

HL–**HL** ピッカーピッカ、テッカーテッカ、パッサーパッサ

したがって単に重音節の位置だけに目を向けていたのでは十分な説明は期待できない。問題は、ともに後部要素に重音節を含む形態であっても、超強調形 HLHL 型が許される一方で(20c)の*LLHL 型が許されないのはなぜかという点である。

超強調形も含めて適格な形とそうでない形の違いを改めて検証してみると、形態に含まれるモーラの配置に目を向けるべきであることに気づく。(22)は、HLLL 型・LHLL 型・*LLHL 型・HLHL 型のそれぞれについて重複構造の前部要素と後部要素のモーラ数を比較した結果である。

(22) モーラ数（ μ = モーラ）

	音節構造	モーラ構造	モーラ数	例
a.	HL –LL	$\mu \mu \mu - \mu \mu$	$3 > 2$	ピッカーピカ
b.	LH –LL	$\mu \mu \mu - \mu \mu$	$3 > 2$	ピカッーピカ
c.	* LL – HL	$\mu \mu - \mu \mu \mu$	$2 < 3$	*ピカーピッカ
d.	HL – HL	$\mu \mu \mu - \mu \mu \mu$	$3 = 3$	ピッカーピッカ

これを見ると、不適格な*LLHL型だけは重複形の右辺（後部要素）のモーラ数が左辺（前部要素）より多くなっていることが分かる。すなわち、両辺のモーラ数のバランスこそが強調形の適格性を左右する真の要因だと考えられることから次の一般化を導くことができる。

(23) モーラ数のバランス

後部要素のモーラ数が前部要素のモーラ数を上回ってはならない。

重複強調形がS重複形から派生される形態であることを鑑みると*⁶、この記述は次のように換言できる。強調の過程では強調辞のモーラが挿入されることによって重複形全体に重さが加算されるが、その場合、語幹（Stem）は常に重複子（RED）よりも重いかあるいは重複子と同じ重さを持っているなければならない。

(24) 重さの条件

$$\mu \mid \text{Stem} \geq \text{RED}$$

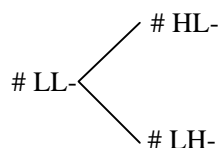
(22a,b)に示したように適格な強調形HLLLおよびLHLLでは語幹が重複子よりも重い韻律構造が得られ、(22d)超強調形HLHLでは語幹と重複子の重さが等しい構造が得られる。その一方で、(22c)不適格な強調形*LLHLだけは重複子の方が語幹よりも重い構造をなしており、重さの条件を満たしていないことが分かる。

5.4.2 音節構造の有標性

調査結果[表5]から窺えるように、重さの条件(24)を満たす二種類の形態（Ⅰ型：HLLL／Ⅱ型：LHLL型）はともに適格な音節構造を含みつつも、Ⅰ型（HLLL）の支持率が全体で75.4%を占める一方でⅡ型（LHLL）の支持率は20.6%に留まることから、現われやすさに関しては明らかな違いがあることが分かるが、最前述べた通り、この違いにはⅠ型とⅡ型に含まれる語頭部分の音節構造の有標性が反映されている。

強調に伴って重音節が形成されることを鑑みると、強調語形成は語頭に位置する二つの軽音節のうち一方を重くする韻律的なプロセス（重量化）として再解釈することができるが、問題は二つの軽音節のうちどちらが重量化されるかである。

(25) 重量化 (#=語頭)



調査結果(15)が物語るところによれば明らかに左側の音節の方が重量化されやすい傾向にあることが分かるが、この結果は、Itô (1990), 窪藁 (1992, 1993, 1995, 2000), Itô, Kitagawa and Mester (1996) など明らかにされてきた音節構造の有標性の尺度(26)がオノマトペの語形成にも関与していることを示唆している*⁷。

(26) 音節構造の有標性

$$\text{(無標)} \quad \text{HL} > \text{LL} > \text{LH} \quad \text{(有標)} \quad *^8$$

HL 構造を語頭に含む I 型の強調形が全体で 7 割を超える支持を得ている事実 ([表 5]) は、強調によって LL 構造に重量化が起こる場合に無標構造 (HL) を志向する音節量変化 (LL→HL) が起こりやすいことを明確に裏づけている。

ただし、調査語彙のうち D 群に関してはこの志向性とは逆の方向への音節量変化 (LL→LH) が優勢との結果が得られている ([表 4])。D 群では約半数の割合で有標構造への重量化が見られるわけだが、このことは、重複強調形の形成過程に音節構造の有標性とは別の因子が関与していることを物語っている。この点について次節で検証することにしよう。

5.4.3 分節構造の有標性

D 群は、語幹の第 1 子音が無声阻害音・第 2 子音が有声阻害音からなるオノマトペで構成されるグループである。24 語の調査語彙のうち「ツブツブ (tubu-)、ケバケバ (keba-)、タジタジ (tazi-)、スベスベ (sube-)」など D 群に属する語彙だけは、LHLL 型 (II 型) の支持率が他の群に比べて高いのが特徴である*⁹。

(27) LHLL 型 (II 型) 支持率

A 群 : 16.2% | B 群 : 27.2% | C 群 : 7.5% | **D 群 : 51.1%**

そもそも、調査語彙に A～D 群の四つの類型を設けたのは、促音が強調辞として挿入さ

れる際に語幹の分節音の配列構造がどのような影響をもたらすか調べるためである。5.2.1節で論じたように重複強調形の形成過程では強調辞の分節構造が決まる際に音韻的な相補分布が働きにくく、通常期待される出現環境を無視する形で促音が強調辞として現われやすい。このため、重複強調形には無声阻害音の直前に促音が現われる原則通りの形だけでなく、有声阻害音の直前に促音を含むイレギュラーな形も出現の余地が残されている。調査語彙のうち、語幹のいずれかの子音が有声阻害音であるB群・C群・D群はそうした可能性を含むグループである。

(28) 有声阻害音の配列構造

B群 : $C_1 \& C_2 = [+voice]$ **dabu-**, **gaba-**, **giza-**, **zubu-**

C群 $C_1 = [+voice]$ **beta-**, **buka-**, **doki-**, **gati-** ...

D群 $C_2 = [+voice]$ **tubu-**, **keba-**, **tazi-**, **sube-**

これらの群において問題になるのは、促音が強調辞として挿入された形がどのような音配列を含むかである。各群について HLLL 型と LHLL 型に含まれる音配列構造をまとめたのが(29)である。

(29) 強調形

群	HLLL 型	LHLL 型
B	ダッブダブ /da Q udabu/	ダブッダブ /dabu Q dabu/
C	ベッタベタ /be Q tabeta/	ベタッベタ /beta Q beta/
D	ツッブツブ /tu Q butubu/	ツブツツブ /tubu Q tubu/

語幹に含まれる子音が両方とも有声阻害音であるB群の場合は、どの位置に強調辞が挿入されようとも常に「促音＋有声阻害音」の連鎖（以下「QV」）が形成されるが、C・D群に関してはどちらの型をとるかによって帰結が異なる。C群では LHLL 型を作る位置に強調辞が入った場合に QV が形成されるが、D群では逆に HLLL 型を作る位置に強調辞が入った場合に QV が形成される。

従来指摘されているように、日本語では QV 構造は比較的現われにくく、外来語を除く語種（和語・漢語）では原則として非文法的な構造である*¹⁰。また外来語においても、形成当初は原語の分節構造に忠実な形であったものがしだいに固有語の許す分節構造（非

QV 構造) へと馴化してゆく傾向が見られる(例:「バッグ /baQgu/」→「バック /baQku/」)。これらの点を省みると、促音とその直後の子音によって構成される分節構造には次のような有標性の格差が生じていると考えることができる*¹¹。

(30) 分節構造の有標性

非 QV 構造 (促音+無声阻害音) {Qp, Qt, Qk, Qs} 無標項	>	QV 構造 (促音+有声阻害音) {Qb, Qd, Qg, Qz} 有標項
---	---	---

D群においてのみ LHLL 型の支持率が高い数値を示していることの背景には、上述の有標性の尺度が深く関わっている。(29D)に見たように、D群では HLLL 型の強調形が有標な QV 構造を含む一方で LHLL 型の強調形は QV 構造を含まない。このことから、D群では分節構造の有標性(30)が尊重された結果、無標な非 QV 構造を含む LHLL 型が現われやすくなったものと考えられる。

5.4.4 有標性の計算

D群の結果からはもう一つ重要な知見が得られる。重複強調形の形成過程に影響を与える音韻的条件としてこれまで「音節構造の有標性」と「分節構造の有標性」の二つを明らかにしてきたが、D群の結果を踏まえると両者の間には優先性の度合いに関して明らかな差が生じていることが分かる。

(31) 優先性の差 (=19)

分節構造の有標性 > 音節構造の有標性

すなわち、たとえ望ましい音節構造 (HL 構造) を含んでいても分節構造に有標な性質が伴う場合には HLLL 型は最適の強調形とはなり得ず、翻って、たとえ有標な音節構造 (LH 構造) を伴っていても分節構造が無標なものであれば LHLL 型が最適な形として優先されるといった関係がD群には見られるのである。仮に、(31)の記述とは逆に音節構造の有標性が第一に尊重される形で語形成が生じているのであればD群においても HLLL 型が最も好ましい形として選ばれるはずであるが、実際の調査結果に見る事実、分節構造の有標性が尊重された LHLL 型がD群の最適形であることを示している。

ところで、(31)に示した関係は単にD群のみに観察されるのではなく、他の群においてもこの関係は有意義に作用している。このことを確かめるために、強調語形成における有標性の計算が一貫して(31)の関係に基づいて行われている様子を各群別に検証してみよう。

まず、A群のオノマトペでは語幹に無声子音しか含まれないので、分節構造の有標性の条件はいずれの形態においても無条件に満たされる。すなわちA群では音節構造の有標性だけが唯一の規準として働く結果、無標な音節構造を含む HLLL 型の支持率が高い数値を示すものと分析できる。A群における有標性の計算のあり方を図示したのが(32)である。表中の「×」は有標な構造を含むことを示す。

(32) A群 (HLLL : 83.0% > LHLL : 16.2%)

	分節構造の有標性	音節構造の有標性
HLLL 型		
LHLL 型		×

瑕疵の差 HLLL (0) < LHLL (1)

「×」印を便宜的に「瑕疵」と呼ぶと、A群において瑕疵が生じるのは LHLL 型の音節構造だけである。対して競合形である HLLL 型には一切瑕疵が生じない。両型の支持率の違い (HLLL : 83.0% > LHLL : 16.2%) は、瑕疵の数がより少ない形 (HLLL 型) が強調語形成の出力として現われやすいことを物語っている。

B群は、語幹の子音がいずれも有声阻害音からなるグループである。(29B)に見たように、このグループでは HLLL 型/LHLL 型のいずれにおいても有標な分節構造 (QV) が現われる。

(33) B群 (HLLL : 65.4% > LHLL : 27.2%)

	分節構造の有標性	音節構造の有標性
HLLL 型	×	
LHLL 型	×	×

瑕疵の差 HLLL (1) < LHLL (2)

分節構造の有標性に関しては HLLL 型/LHLL 型のいずれも同数の瑕疵を伴うので、これを相殺することができる。したがってB群の場合も基本的にA群と同様、最終的な型の優劣は音節構造の有標性に委ねられることになり、その結果、瑕疵を含む LHLL 型よりも瑕

疵を伴わない HLLL 型の方が高い支持率を示す結果に至ったものと分析できる。

続いてC群について見よう。C群の語幹は第一子音に有声阻害音を、第二子音に無声阻害音を含んでおり、(29C)に見たように LHLL 型において有標な分節構造 (QV) が現われるのが特徴である。また、他の群に比べて HLLL 型の支持率が9割を超す高い数値を示していることもC群の注目すべき特徴である。C群での有標性の計算のあり方を示したのが(34)である。

(34) C群 (HLLL : 90.2% > LHLL : 7.5%)

	分節構造の有標性	音節構造の有標性
HLLL 型		
LHLL 型	×	×

瑕疵の差 HLLL (0) < LHLL (2)

HLLL 型に些かの瑕疵も伴わないのに対して、LHLL 型には分節構造ならびに音節構造の両側面に瑕疵が伴う。すなわちC群の場合、HLLL 型と LHLL 型との間には瑕疵の数に関して際立った開きが生じていると言えるが、興味深いことにその開きはそれぞれの型の支持率にも如実に反映されており、HLLL 型が 90.2%という高率を示す一方で、LHLL 型の支持率は 7.5%という極端に低い数値に留まっている。この数値上の事実は、有標性の計算における「瑕疵の差」というものが強調形の型の選択に影響を及ぼす概念であることを明確に物語っている。

最後に問題のD群について見てみよう。D群では HLLL 型と LHLL 型の支持率が逆転しているわけだが、単に瑕疵の「数」だけを勘案していたのではこの逆転の動機を捉えることはできない。D群では HLLL 型と LHLL 型との間に瑕疵の「数」の差が生じないからである。(35)に示すように両型はともに一つずつ瑕疵を負っている。

(35) D群 (HLLL : 38.5% < LHLL : 51.1%)

	分節構造の有標性	音節構造の有標性
HLLL 型	×	
LHLL 型		×

瑕疵の差 HLLL (1) = LHLL (1)

ただし注目すべきは、瑕疵の数は等価であっても瑕疵の生じる範疇には異なりが見られる

点である。型の支持率に明らかな違い（HLLL : 38.5% < LHLL : 51.1%）が生じていることを考慮するならば、上の図に表示された瑕疵は「量的」には等価であっても「質的」には異なるものと見なければならない。そこで想起されるのが、(31)に示した優先性の差の概念である。LHLL 型の支持率が HLLL 型を上回っていることを踏まえると、分節構造に生じる瑕疵は音節構造に生じる瑕疵よりも質的に深刻な性質を持つと考えることができる。すなわち優先性の差(31)とはこうした質的な相違を換言したものだと言え、分節構造の有標性が音節構造の有標性よりも優先的に考慮される結果、前者に対する瑕疵は後者に対する瑕疵よりも質的に深刻なものとして扱われることになり、そのためにD群では HLLL 型と LHLL 型の支持率に逆転が生じたものと分析できる。いわばD群では、より深刻な瑕疵（分節構造への瑕疵）を伴う HLLL 型が忌避される一方で、より軽微な瑕疵（音節構造への瑕疵）を含む LHLL 型が支持されているというわけである。

以上の検証から明らかなように、重複強調形の形成過程に生じる HLLL 型と LHLL 型の現われやすさの違い*¹² は異なる二つの音韻的側面——音節構造と分節構造——における有標性の差(17)(18)を反映した現象として分析できる。また本節では、音節構造の有標性と分節構造の有標性の間に(31)に示した優先性の差を見出すことにより、強調語形成における有標性の計算のしくみを明らかにしてきたが、本節で示した一連の分析が妥当であることは語彙調査の結果(15)に現われた数値によって明確に裏づけられている。あらためて(32)～(35)を振り返ってみると、より軽微な瑕疵を伴う型の方が一貫して支持率が高いことが分かるが、このことは、本節で論じてきた有標性の計算のしくみが重複強調形の形成過程に確実に関与していることを十分に裏づけるものである。

5.5 本章のまとめ

この章では、重複強調形の形成過程に働きかける音韻的な要因について考察し、強調辞の挿入位置が次の三つの因子に基づいて統御されていることを明らかにしてきた。

(36) 因子*¹³

- a. 重さの条件 $\mu \mid \text{Stem} \geq \text{RED}$
- b. 音節構造の有標性 $\text{HL} > \text{LH}$
- c. 分節構造の有標性 非 QV (促音+無声阻害音) > QV (促音+有声阻害音)

重さの条件(36a)は形態の適格性に関わる条件であるので、これら三つのうち最も尊重されるべき地位にあると言える。「*ピカピッカ」のような LLHL 型の強調形が現われないのはその韻律構造が(36a)に適合し得ない性質を伴うことによる。

音節構造の有標性(36b)と分節構造の有標性(36c)は適格な形態 (HLLL 型と LHLL 型) の間に生じる現われやすさの違いに大きな影響をもたらしている。本章では、これら二つの有標性因子の間に優先性の差(31)が存在することを主張し、強調辞の位置を決定する際に前者よりも後者の方が優位に影響をもたらすことを主に D 群の調査結果から明らかにした。

さらに本章では、強調語形成における出力形の決定 (HLLL 型～LHLL 型) が(32)～(35)に示した有標性の計算のしくみに基づいて行われていることを論じ、調査結果に現われた支持率の差が決して恣意的な判断に基づく差なのではなく、その背後に秩序立った音韻的な計算原理が働いていることを明らかにした。

第 6 章

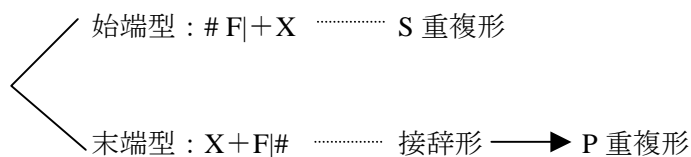
結 論

6.1 本研究のまとめ

本研究では、重複形・接辞形・強調形を中心に、日本語オノマトペの語形成過程に現われる韻律構造ならびに語形成を統御する韻律的な原理や条件について、多様な観点から考察してきた。

第2章では、主にフットや音節の構造に焦点を当てつつ重複形・接辞形・強調形における韻律依存型語形成の特性を捉えた。韻律構造に基づいて語形成のあり方が記述できるのはオノマトペの大きな特徴の一つであるが、第2章ではまず音韻的主要部の地位を持つフットとそうでないフットとを区別することにより、オノマトペの語形成過程に対して新たな類型化(1)が施せることを示した。

(1) 主要部位置に基づく類型化



この類型化の特徴は、オノマトペどうしの関係を従来型の形態論的分類の枠を超えたあり方で有機的に捉えている点にある。たとえば同じ「重複形」でも、S 重複形と P 重複形は韻律構造が全く異なり、P 重複形はむしろ「接辞形」との親密な派生関係の下で作り出される。第2章では語形成に伴うアクセント核移動現象を通じて、接辞形と P 重複形が同一の構造を共有したオノマトペであることを論証した。また、この章の後半では強調形オノマトペの韻律構造と語形成の関係を見たが、強調形だけは挿入型の語形成である点で(1)

の類型とは別の韻律的特性を含む。強調形の特徴を捉える上では、主要部フットの位置よりも基体に組み入れられる韻律範疇の位置の方が重要な観察対象となるが、この点についてはさらに第5章で詳細に考察した。

第3章では、オノマトペの韻律特性の一つとして四拍性を取り上げ、この特性に敏感な形態がオノマトペの語彙の多くを占めることを指摘した上で、四拍型に基づく分析を施すことによって語形成過程における四拍性の働きを明らかにした。その際、「助詞の韻律化」のしくみを考えることによって四拍性を反映する言語事実に対して合理的な説明が得られることを論じた。また、非派生形オノマトペに生じる促音添加現象を通じて、四拍性がオノマトペの語形成を統御する強い動機の一つであることを明らかにした。

第4章では、オノマトペのアクセント生成過程に焦点を当てて、(1)に示した類型のうち主要部末端型の構造を持つオノマトペの韻律特性を探った。この章の議論を通じて得られた最も興味深い知見は、オノマトペの韻律構造が従来考えられているほど特殊なものではなく、むしろ日本語全般にしばしば観察される韻律構造と同様な無標性を示すということである。第4章では、①韻律構造の非末端性・②次々末型アクセントの生成・③音節量依存型規則への適合性の三つの観点からオノマトペの韻律構造の無標性を論じたが、この章における分析でも「助詞の韻律化」の概念は重要な地位を占めている。オノマトペの韻律構造に無標な性質を見出すことができるのも、韻律計算の過程で助詞「と」が韻律語内に編入されるとする「助詞の韻律化」のしくみを分析に導入したからにほかならない。このしくみを導入することによって、助詞の軽音節が主要部フットと韻律語の末端との間に介在する構造(2)が得られるが、この構造は、複合語や外来語など一般語種のアクセント生成過程に現われる典型的な無標構造と同一の性質を含む。

(2)

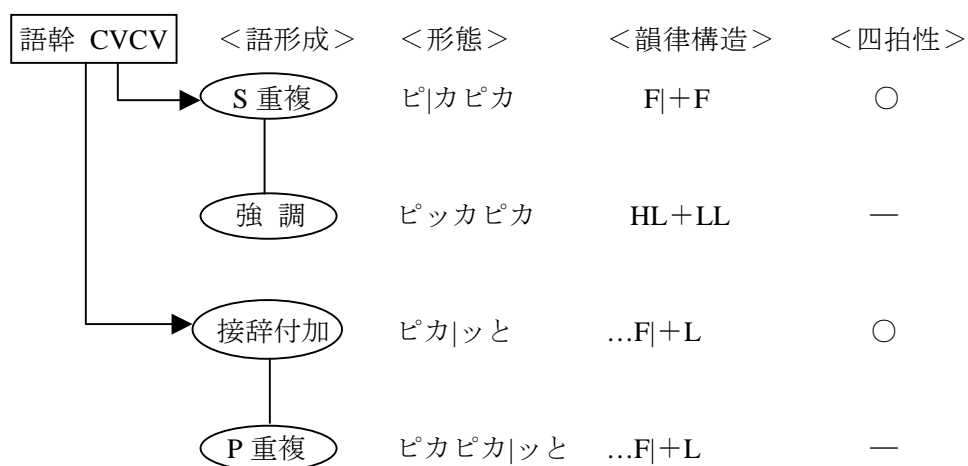
$$\dots F|+X]_{PrWd} \left\{ \begin{array}{ll} \dots H|+L]_{PrWd} & (\text{ピカ|ッ と, ピカピカ|ッ と}) \\ \dots L|+L+L]_{PrWd} & (\text{ピカ|リ と}) \end{array} \right.$$

第5章では、オノマトペを構成する韻律範疇の中でも音節に焦点を当て、強調形における強調辞の挿入位置が音節構造の性質に基づいて計算されている様子を明らかにした。重複強調形の形成過程では無標な音節構造 (HL 構造) を語頭に含む形態が一般に現われやすい。ただし、分節構造に有標な特性が生じる場合に限っては有標な音節構造 (LH 構造)

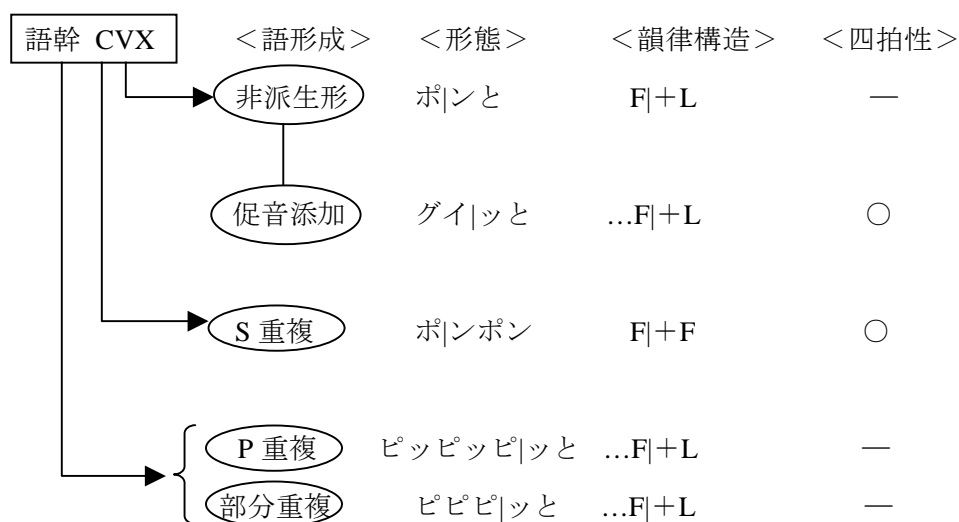
を語頭に含む形態の方が現われやすくなる。このあり方から、分節構造の有標性と音節構造の有標性の相互作用——すなわち、有標性の計算によって強調辞の位置が決定されることを明らかにした。

最後に、本研究の考察の帰結をまとめておきたい。以下のチャートは、本研究で得られた様々な個別的知見を総合して、日本語オノマトペの代表的な語形成の相互関係を図示したものである。楕円は語形成のプロセスを表し、実線はプロセス間の派生関係を示している。

(3) 語形成（2音節語幹）



(4) 語形成（1音節語幹）



2音節語幹から生じる語形成(3)には二通りの道筋を見出すことができるが、それぞれの系統の第一段階（一次過程）では共通して四拍性が観察され、それよりも後の段階に生じる語形成では四拍性の特徴が消失する。このため2音節語幹から発するオノマトペに関しては、四拍性を伴う一次過程（S重複・接辞付加）において根本的な語形成の分岐が起きていると言える。他方、1音節語幹から生じる語形成(4)には三通りの系統が認められるが、四拍性と語形成段階との対応は2音節語幹の場合と比べて統一性が見られない。ただし、S重複形とP重複形が四拍性に関して対極的な性質を持つ点は2音節語幹の場合と同様である。したがって、少なくともオノマトペの語形成の一次過程では、語幹のタイプを問わずS重複系統とP重複系統が性質上大きな隔たりを見せていることが理解できる。

翻って、韻律構造に関してはどのプロセスにおいても無標な構造が形成されている点に注目したい。本論で重ねて指摘したように、主要部フット（F₁）が韻律語の非末端位置に組織される点ならびにHL型の音節構造が韻律語の左端に生じる点は、オノマトペの特性を映し出した特徴と言うよりも、むしろ日本語全般にわたって観察される無標な韻律特性がオノマトペにも含まれていることを示している。

6.2 今後の課題

音象徴を第一義的機能とするオノマトペは極めて創造性に富んだ語種であり、実際には表現場面に即応した多様なバリエーションが次々と作り出される。しかし、オノマトペは多様性を許容することばでありながらも、同時に言語形式の一部として、表面的な多様性の背後に一貫した構造上の基盤を持っている。(3)(4)に示した語形成の相関図などはそうした基盤の一部だと言える。本研究ではオノマトペの韻律構造の中から一般的な性質を抽出する目的の下、多様性の側面をある程度捨象し、形式的側面に焦点を絞って考察を進めてきた。その帰結として韻律依存型語形成の概略的な地図を描けたことは本研究の成果の一つである。

今後の課題として考えられるのは、オノマトペに観察される韻律特性が一般語種の音韻構造の中にどの程度共有されているか明らかにすることである。那須（2001a,b）が論じるように、オノマトペならびに一般語種の韻律構造は共通の現象を通じて統一的に捉えられる可能性がある。たとえば「しろくろ（白黒）、かたひじ（肩肘）、つみとが（罪科）、あめつゆ（雨露）」などの並列語（dvandva）に見るように、一般語種にはS重複形と酷似し

たプロソディを持つ語が多数含まれているが、この事実などはオノマトペの韻律特性が一般語種にも共有されていることを示すものである。オノマトペと一般語種の韻律上の交渉を探ることは日本語の韻律構造のしくみを全般的に考察する上でも非常に興味深い課題であるが、こうした発展的課題について、今後さらに検証を続けて行きたい。

注 釈

第1章

1. 厳密には「オノマトペ (onomatopoeia)」という用語は擬声語・擬音語を指すものであり、擬態語は「ミメシス (mimesis)」の対訳とされるが、本研究では用語上の混乱を避けるため擬声語・擬音語・擬態語を全て一括して「オノマトペ」と呼び、特に三者の区別が必要な場合に限り個別の名称と呼ぶ。また、本研究でオノマトペと称する形式には「描写詞」(宮田 1948)・「音象徴語」(西尾 1988)などのものも含まれるが、本研究ではこれらを総じてオノマトペと称する広い解釈を一般的なものとして採る(小嶋 1972, 田中 1978, 鈴木 1984, 田守 1991)。
2. 認知心理学・認知言語学ではオノマトペと人間の五感覚との関連に着眼した研究が豊富である。共感覚理論などはその一例であり、たとえば山梨(1988)では五つの感覚を表すオノマトペの間に「共感覚から原感覚へ」の不可逆的な「修飾の方向性」が成り立つことが論じられている。なお、認知心理学的手法によるオノマトペ研究について紹介した近年の論考としては荻阪(1999)がある。
3. 「デフォルトの形式」とは、複合語や外来語のアクセントに見られる最も生産性の高い無標なパターンのことである。このパターンでは語末から数えて3番目のモーラを含む音節に核が付与されるが(McCawley 1968, 1978), デフォルト形式の韻律構造をフットに基づいて分析すると、一律に語末フットを避ける形で核が生成されていることが分かる(Poser 1990)。たとえば「かぜぐ|すり(風邪薬)」では /ka (zegu)(suri)/ という韻律構造が析出できるが、この構造において核が語末フット“(suri)”には生成されていない点に注目されたい。
4. 外来語アクセントを生成する規則として伝統的に知られているのは「語末から3番目のモーラを含む音節に核を与えよ」とする McCawley (1968, 1978) の一般化であるが、外来語のアクセントにはこの規則からは予測し得ない生産的なパターンも含まれる。「エ|ンデバー」「ミュ|ージシャン」など McCawley の規則が予測する位置よりも前の音節に核が生成されるパターンがその例で、Kubozono (1996) は、これらのアクセントが音節量依存型の規則によって生成されていることを明らかにしている。この規則は一名「ラテン語アクセント規則」(Hayes 1995)として知られているもので、次末音節の重さが計算上重要な情報になり、もし次末音節が重ければその音節が核を担うが、軽ければその一つ前の音節(次々末音節)に核が付与されるといった非対称性が生じる。
5. 1音節語幹と2音節語幹は、部分重複形の形成過程において決定的な性質の相違を見せる。詳しくは第2章参照。
6. ただし、モーラ構造は多分に言語個別的な性格を持つので言語によっては末尾子音が重さを構成しない場合もある。末尾子音の存否によって音節量が変わるタイプの言語では末尾子音には常にモーラが与えられるが、末尾子音が音節量に不関知的な言語ではこの規則が不活性であると考えられている(Hayes 1989)。ちなみに日本語は末尾子音が音節量に関知的な言語の一つだとされる。日本語における音節量の扱いについては窪田(1992, 1993, 1998)に具体的な論考がある。
7. この現象は「韻律最小性 (Prosodic minimality)」を反映する現象としても知られる。短縮形は最小でも2モーラの構造を持たねばならず、「*ス(トライキ)」「*へ(リコプター)」など1モーラ形への切り取りは起こらないが、このことから Itô (1990) は、2モーラを一つの単位とする韻律構造を語幹の最小構造として定義している。
8. (19)の分析は、本研究で採用する緩和階層仮説に基づく解析法に従っている。

9. 一方, Tateishi (1989) は倒位語形成の事実から日本語のフットが「左から右へ」解析されるとの立場を示している。
10. 「音韻的な範疇としての語の単位」とは, フットや音節などの下位韻律範疇から構成される語相当の単位という意味である。
11. 二拍以上の助詞になると独自の語彙アクセントを持つものも現われるが, 直前の名詞のアクセント型に依存して全体の型が決定される点では一拍助詞と同様の性質を持つ (川上 1957, 和田 1969, 秋永 1998)。重要なのは助詞を含んだ構造全体で一つのアクセント型が現われることで, こうした振る舞いは複合語アクセント現象の一種として捉えることも可能である。一方, これをアクセントの複合とは見なさず, 「名詞+助詞」構造に現われる特殊なアクセント (準アクセント) として特立させる捉え方も提案されている (神保 1935, 川上 1957)。なお, 多くの助詞が直前の名詞のアクセント構造に依存する性質を見せる一方, 助詞「の」だけは直前の名詞のアクセント型を変える働きを持つことで知られるが, このケースなどは, 「名詞+助詞」構造が明らかに単一の韻律語を構成していることを示す好例であろう。
12. 重子音化などの分節レベルの現象が韻律語の単位を見極める手がかりとなることもある。たとえば Itô and Mester (1996) 参照。

第2章

1. タガログ語の接中辞 “-um-” は, その結合箇所が基体の音節構造によって決定される点で代表的な韻律依存型の派生素素だと言える。以下に例示するように, 基体の先頭の音節が子音始まりの構造であればその子音の直後に -um- が挿入され, 反対に母音始まりの音節を先頭に持つ基体の場合には, -um- は常に語頭位置に結合する。なお, このしくみの記述及び実例は McCarthy and Prince (1993) による。
 子音始まり um + sulat → s-um-lat ‘write’
 母音始まり um + aral → um-aral ‘teach’
2. 本章では「カタコト」「チラホラ」などの並列形は取り上げない。これは並列形が韻律的側面において重複形と同じ特性を含むことによる (第1章(2)参照)。ただし並列形の場合, 分節レベルでは重複形には見られない独特の音交替のアルゴリズムが備わっている。その内容は天沼 (1974) などに詳しい。
3. 「語幹」と「基体」はともに形態論的な単位を表す呼称であるのでしばしば混同されやすいが, 本研究では両者を概念上明確に区別する。「語幹 (Stem)」とは語形成上の最小単位であるとともに構造上の最小単位でもある。つまり何ら派生素素を伴わない裸の形式のことであり, オノマトペでは「ピカ」「ポン」などの形式がこれに相当する。一方「基体 (Base)」は派生素素の結合対象を意味するため, 必ずしも構造上の最小要素である必要はない (影山 1993)。「語幹」と「基体」が混同されやすいのは, 語幹が同時に基体としてのステータスも持ち得るからだと考えられる。たとえば接辞形オノマトペ「ピカ+リ」の語形成過程では「ピカ」は語幹であるとともに接辞「リ」の結合対象としての基体でもある。しかし, 「基体」の場合, 最前述べたように必ずしも構造上の最小要素である必要はないので, たとえば「ピカリ→ピッカリ」といった強調形の形成過程では「ピカ+リ」という派生構造を持つ形態「ピカリ」が基体となる。この場合, 「ピカリ」は決して「語幹」とは呼べない。
4. 語幹をあえて「非派生形」と呼ぶべきケースとは, 「ポン (と)」「パッ (と)」など1音節語幹が派生素素を伴わずに裸のまま用いられるケースがこれに相当する。
5. このほかにも一つの軽音節からなる「フ」「ツ」などの語幹が稀ながらあるが, これらは常に「ふと」「つと」という形式で用いられる定型化した特殊な形である (田守 1991, Oda 2000)。
6. (12b)のアクセントは助詞「と」を伴わずに発音すると平板型との区別が起こらないが, 「と」をつけ

て発音するとその直前で声の下がり目が生じるため、尾高型であることがはっきりする。ただし、オノマトペのアクセントでは核の位置が判然としない場合が多いのも確かである。本稿では促音の直前のモーラに核があると解釈したが、個人によっては促音の直後でピッチの下がり目が起こると判断される場合もあり得る。一般語種では特殊モーラが核を担うことはあり得ないので、これに敷衍すると促音直前のモーラに核の所在を求めたほうが合理的ではあるが、オノマトペが一般語種と常に同じ音韻的性質を持つとは断定できない。ちなみに、語末に撥音を伴う「ガタガタンと」などでは、撥音まで高く続ける型も適格だと思われ、Hamano (1986, 1998) および Oda (2000) ではこの型に基づく記述が見られる。

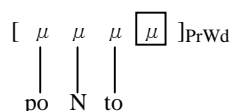
7. BT 構造が厳密に固化した韻律領域であることは、「0 9 0」のような奇数個の構成素からなる番号を読み上げる際のプロソディからも窺える。「0 9 0」でもやはりアクセントの分裂が起こり、最初の二項フット「0 9」がひとまとまりのアクセントの山を構成する一方で右端の「0」だけは別の山を構成する（ゼロキ|ュー・ゼ|ロ）。このあり方からも、BT 構造に収まりきらない要素が厳格にその外部に置かれてしまうことが分かる。
8. “Suffixal reduplication（接尾辞型重複語）”の意。
9. “Prefixal reduplication（接頭辞型重複語）”の意。
10. 二重母音語幹に含まれる二つの母音が連母音として解釈されていることのひとつの証拠として、接辞形のアクセントが「*グ|イン」ではなく「グイ|ン」というパターンを示すことが挙げられる。適正なアクセントでは形態内に生じる母音の連続/ui/のうち後部の母音/i/に核が与えられているが、これは二つの母音が異なる音節に組織されていることの現われだと考えられる（窪菌・太田 1998）。周知の通り、日本語（共通語）のアクセントでは核は音節の第一モーラに相当する核母音だけに与えられ、二重母音の副音など重音節の第二モーラが核を担うことはない。この点を鑑みると「グイ|ン」の音節構造は/gu.iN./と解析されることから、二つの母音が異音節に組織されていることが分かる。同様な事例は超重音節を含む外来語のアクセントにも観察される。たとえば「ラ|イン」「デザ|イン」は非派生語の状態では超重音節を形成するが、複合語を形成すると「ライ|ン川 /rai|N.~/」「デザイ|ン博 /de.za.i|N.~/」のように超重音節を解消するアクセント構造が現われ、その際に二重母音が連母音へと構造を変える（窪菌・太田 1998）。ところで、二重母音語幹からは「*グイリ」などのリ語尾形は派生されず、この点において二音節語幹との決定的な性質の違いが残る。
11. 促音形「ピカッ」は、単独で発音した場合にはピッチの下がり目が明瞭に現われないため無核のパターンとの区別ができない。しかし、助詞「と」をつけて発音するとピッチの下がり目が現われ、核の所在を特定することができる。なお、撥音形「ピカン」および促音形「ピカッ」に関してはアクセントが平板化してしまうこともあるが（Hamano 1986, 1998, Oda 2000）、平板型のアクセントは上に示した起伏型のアクセントと併存する形で生じているので、ここでは比較の便宜のために起伏型のアクセントを分析対象として考える。
12. 語彙音韻論（Lexical Phonology）は Kiparsky (1982, 1985) らによって体系化された理論で、形態的派生と音韻的派生が段階的かつ交差的に生じると考える点に特徴がある。この理論の成立に貢献した研究成果の一つに「レベル順序付けの仮説（Level Ordering Hypothesis）」がある（Siegel 1974）。この仮説では、特定の音韻過程をもたらす派生要素とそうでない派生要素は形態論的な派生の段階が異なるとされ、英語接辞に起こる類別の事実などがこの仮説によって説明されてきた。(43)に関して述べると、核移動を生じる接尾辞はオノマトペの派生要素の中でも音韻的に活性であり、重複の派生に先駆けて形態論的派生に参与する。一方、重複子は音韻的に不活性な派生要素だと考えられ、その形態論的派生は接辞付加のプロセスに次いで起こる。接尾辞と重複子の音韻的性質の違いはちょうど英語の第一類接辞と第二類接辞の性質の違いに比類できる。音韻的に活性であることと、レキシコンの深部で派生を起こす点において、接尾辞は第一類接辞によく似た性質を持っている。他方、重複子は音韻

的に不活性であることと、接辞付加のプロセスの出力に対して結合することから、第二類接辞に比類すべき性質を備えていると言える。

13. /r/音を含む語幹だけではなぜか強調形を形成しないという事実がある。たとえば「ツルリ」には「*ツルリ, *ツンルリ」といった接辞強調形が起こらないが、Mester and Itô (1989) は、/r/音に見るこうした特異性を不完全指定理論に基づいて検証している。
14. ただし、語幹の第二子音が鼻音である場合（例：「グニャ」）には撥音が専らに現われる（「グニャグニャ」）。換言すると、撥音が μ の具現形として現われるのはこのケースに限られるとも言える。

第3章

1. 篁 (1993) は、「ビックリ」という強調形に至っては「ビックリとする」のような「と」を含む表現にはむしろ違和感が伴うとし、「ビックリする」という形でそのまま語彙化されているのではないかとの見方を示している。
2. 一部の表現においては語尾形が助詞を伴わずに用いられるケースも見られるが、こうしたケースは文語的表現に限られていることから、助詞が付加されない(6a)の形は話し言葉では原則として許容されない形であると考えられる（田守 1983）。
3. 文法語の単位で数えると「ピカリと、バタンと、グサッと」はあくまでも「オノマトペ+助詞」の組成からなる二要素の構造として分析されるが、音韻的な振る舞いにおいてはこの二要素は密接に癒着した構造——すなわち単一の韻律語をなしていると考えられる。韻律語の定義をめぐる詳細は第1章で述べたとおりである（1.4.3 節参照）。
4. Hayes (1989, 1995) のモーラ理論での主張に従い、音節の核母音・長母音・二重母音の第二要素ならびに末尾子音のみが μ 節点と連結関係を持てると考える。したがって、音節の頭子音は μ 節点に連結する資格を持たない。
5. (28)では第3 μ 節点を空所とする分析を示してあるが、論理的にはこのほかに第4 μ 節点を空所とする次の分析もあり得る。だが、こちらの分析は以下述べる理由により妥当な論拠に乏しいものと考えられる。



この表示で問題なのは助詞「と」が第3 μ 節点に韻律化されている点である。これは実に場当たりの分析だと言わざるを得ない。助詞の韻律化は、統語的要素を韻律語の内部に組み入れる点で通常の形態論的過程（語形成）とは一線を画す作用であるが、そうした特殊な作用が生じる領域を自由化してしまう分析は決して好ましいものとは言えない。助詞「と」が韻律化される場合、その受け入れ口として振る舞う節点は任意に決まるわけではなく、鋳型の右端の節点のみが「と」を受け入れる唯一の節点としての資格を持っていると考えられる。促音を伴う接辞形（促音形）についての検証(26)および、本文で以下検証する促音添加現象からも明らかのように、「と」は鋳型の右端に韻律化されると考えたほうが合理的である。加えて、韻律化の受け入れ節点を鋳型の右端に限定することにより、韻律化の作用域に関する次のような記述的条件を一般化できる。

韻律化条件：助詞の韻律化は鋳型の末端節点においてのみ生じる。

何らかの特殊な作用が生じる場合、その作用域に厳密な限定を加えておくことは理論的な分析の妥当性を高めるためにも不可欠な要件である。本文で一貫して助詞「と」の位置を第4 μ 節点に固定した分析を採っているのは、過度に自由な分析によって生じる考察の任意性を避ける意義がある。一方、

上図に示した分析を採ると、韻律化の起こる節点が形態のタイプによって任意に決まるといった場当たり的な記述しか望めず、「韻律化条件」として示した一貫性を抽出することは不可能である。

6. ただしアクセントの事実を鑑みるに、促音添加形に生じる超重音節は最終的には「軽音節＋重音節」からなる二音節の構造に解消されているようである。たとえば「プイッと」では二重母音の副音に核が与えられたアクセント/pui|Qto/が起こるが、このアクセントの生成を保障するには/i/を核母音に組織しなおした音節構造/pu.i|Q.to./が形成されている必要がある（窪菌・太田 1998）。
7. 一般語種において「4 モーラ」が韻律上特別なステイタスを含むことを示す証拠として現段階で指摘できるのは、複合語アクセントに関わる次の二つの現象である。第一に、後部要素が2 モーラ以下である複合語においてアクセント規則が生産性を示すのは複合語全体が5 モーラ以上の大きさになった場合であり、4 モーラ以下の場合には複合語アクセント規則が生産的に働かないことが指摘できる。たとえば「〜く|も（雲）、〜つ|ま（妻）、〜さ|る（猿）、〜バ|ス、〜ね|こ（猫）」など頭高型2 モーラ名詞が後部要素に位置する複合語では(A)に示すように保存型のアクセント（その名詞の語彙アクセントを保存するパターン）が生産的に作り出されるが、(B)のように複合語全体が4 モーラ以下である場合には予測に反して平板型アクセントとなりやすい。

(A) いわしぐ も（鯛雲）	(B) あまぐも #（雨雲）
うわきづ ま（浮気妻）	ひとづま #（人妻）
にほんざ る（日本猿）	やまざる #（山猿）
シャトルバ ス	エアバス #
ペルシャね こ（〜猫）	みけねこ #（三毛猫）

第二に、比較的長めの複合語において、後部要素が4 モーラ以下の場合と5 モーラ以上の場合とで規則適用のあり方が次のように異なることが指摘できる。後部要素が4 モーラのサイズに収まる場合は(C)のようにデフォルトの位置にアクセント核が生成されるが、後部要素が4 モーラを超えるとデフォルト型のアクセントが生成されず、(D)のように後部要素本来のアクセントが現われてしまう（窪菌・伊藤・メスター1997）。

- (C) みなみア|メリカ（南＋アメリカ）／ ちほうぶ|んけん（地方＋分権）
- (D) みなみカリフォルニア #（南＋カリフォルニア）／ ちほうさいばんしょ|（地方＋裁判所）

第4章

1. P 重複形ならびに接辞形のうち促音で終わる語のアクセントは、末尾に助詞「と」をつけて発音すると核の所在が分かりやすい。
2. 同様な解釈は Oda (2000) にも見られる。
3. 言うまでもなく、この方針自体は Hamano の観察を否定する意味合いは持っていない。
4. ちなみに Hamano (1986) は、同一のオノマトペであっても異なるピッチ動態で発音される可能性があることを指摘している。また、それぞれのピッチ動態には特有の音象徴的效果が備わっていると述べている。
5. 語形成現象では主要部の位置を特定する上でアクセントの情報が有効でないケースがある。このため、出力形式に二つのフットからなる韻律語「F＋F」が含まれる場合、アクセントの情報に基づいてどちらのフットが主要部であるか特定することはできないわけだが、Itô, Kitagawa and Mester (1996) は、日本語の場合こうした等質構造においては左側の要素が音韻的な主要部に位置づけられるとの見解を示している。
6. 窪菌 (2000) は第一義的には音節量に着目した研究であり、末端性の問題は表立って扱われていない。

ただし、そこで示されている言語事実は全て末端性の問題に深く関わる性質を持っている。同一の言語事実を通じて末端性の問題を論じた研究として Kubozono (2000) がある。

7. 音韻的主要部を担う範疇はフットだけとは限らず音節やモーラも該当し得る。すなわち、韻律語末尾の位置で主要部の資格を有する韻律範疇は、いかなるものであろうと非末端性制約への違反を引き起こす (Prince and Smolensky 1993)。(31)は、正確には「主要部フットに関する非末端性 (Nonfinality (F))」を意味するが、本研究では用語の便宜を図って「非末端性」と略称する。
8. 中高型の3モーラ名詞が後部要素になった複合語でも保存型アクセントが現われる。
「団扇」 うち|わ ひだりうち|わ hidariu(tɪ|wa) (左団扇)
しかし、この場合も無標型との「ゆれ」が起こることに加え (ひだりう|ちわ), 「おんなご|ころ (女心)」「なまた|まご (生卵)」のように本来は保存型が期待されるにも関わらず無標型だけを生成する複合語もある。
9. 語によっては、たとえば「にんぎょ|ひめ (人魚姫)」のように無標型だけを生成する複合語も見られる。
10. 「単独で」とは、重子音構造をなさない状態で/p/が現われることを指す。外来語を除く一般語種では/p/は常に重子音の一部として現われ、/*paru (春), *yapari (やはり), *pasei (派生), *kagekipa (過激派) /のように単独で/p/が現われることはない。
11. 「外の音」とは、自然界に発する物理的な音響一般を指しているようである。
12. ただし、/p/が有標分節として扱われるのは派生環境においてのみである。無声語幹 (たとえば/supa-, supo-/など) には依然として単独形式の/p/が含まれることから、オノマトペにおいては、一般語種ほどは完全に/p/が排除されているわけではないと言える。
13. 「(ッ)」は促音添加が起こり得ることを表している。非派生形に生じる促音添加現象については 3.4 節参照。
14. 助詞「と」は、第一義的には引用機能の発揮を動機として起こるものであり (藤田 (1999) など参照)、音韻的動機が主役となって共起を促しているわけではない。ここで問題にしようとしているのは共起の「動機」なのではなく、「と」が義務的に生じた構造が音韻的にどのような意義を含んでいるか明らかにすることである。この点は文法論 (引用論) とは独立した音韻論的な課題である。
15. 「フット解析の領域」とは即ち韻律語を指す。韻律語がフット解析の作用域に位置づけられることについては Poser (1990) 参照。
16. 伝統的に、複合語のアクセント規則は後部要素のモーラ数に応じて大きく二つの類型 (後部2モーラ以下・後部3モーラ以上) に分類されてきた (秋永 1998 ほか)。「後部2モーラ以下」のグループには「平板型 (となりむら # (隣村)), 前核型 (かぶと|むし (甲虫)), 後部頭核型 (にわかあ|め (俄か雨))」の下位類型があり、「後部3モーラ以上」のグループには「後部頭核型 (こなぐ|すり (粉薬)), 後部保存型 (ひだりうち|わ (左団扇))」の下位類型がある。しかし、一3規則を軸に記述しなると、後部2モーラ以下の「前核型」と後部3モーラ以上の「後部頭核型」は、次々末音節に核を担う点で共通の構造として捉えることができる。

第5章

1. 語頭 LH 構造を生み出しやすいのは、有声音のカテゴリーのうち有聲阻害音/β, δ, ζ, γ/・接近音/φ, w/・/r/音が語幹の第二子音に位置した場合である。鼻音については、「gunya- → グンニャグニャ, hunya- → フンニャフニャ」のように撥音を強調辞とする HL 型の強調形が作られやすい [注3も参照]。
2. この場合の「音配列制約」とは有聲重子音構造を有標とする音韻制約 (No Voiced Geminate) を指す。
3. 常に促音が選択されるかという点必ずしもそうではない。たとえば「グニャグニャ」からは「グンニ

- 「ヤグニャ」のような撥音を強調辞とする形しか作られない。つまり、語幹の第二子音が撥音と同じ特徴を持つ分節（すなわち鼻音）である場合には、促音の代わりに撥音が強調辞に選ばれる〔注1も参照〕。
4. 被調査者に語彙を提示する時には(14)に示した類別の情報は一切与えず、ランダムに配列して示した。
 5. 重複強調形を作り出すオノマトペは常に形容動詞的・結果副詞的な用法の下で用いられる（田守 1983, 1991）。このため、これらの用法を持たないオノマトペは調査語彙としてふさわしくない。一例を挙げると、「キビキビ」というオノマトペは D 群に相当する音配列を持つ実在形だが、「キビキビと動く」のような状態副詞的な用法でしか用いられず、「動作が*キビキビだ。」「*キビキビの動作。」「動作が*キビキビになる。」といった形容動詞的・結果副詞的な用法がないので、作り出された強調形が、用法の欠損が理由となって「不自然」と判断される恐れがある。
 6. 2.5 節参照。
 7. LH 構造の有標性を裏づける言語事実については(2)を参照。
 8. (3)にも同様の尺度を示したが、「HH」構造はここでの議論に無縁であるので(26)では省いてある。
 9. 有声阻害音の配列のあり方から見て、D 群の語幹は純粹な音象徴語というよりも和語語幹から転用された形式である可能性が高い（那須 1999c）。和語では濁音（有声阻害音）の現われる環境が原則として語中に限られるが、D 群の語彙もこれと同様の音配列構造を持つ。他方、純然たるオノマトペでは語頭位置に濁音が立ちやすく（gara-, doka-, zaku-, bota-）、語中に濁音が生じる形のほうがむしろ稀少である（Hamano 1986, 1998, 那須 1999c）。
 10. 日本語のレキシコンにおける QV 構造の非文法性について理論的な立場から論じた研究としては Itô and Mester (1995a,b) がある。なおオノマトペでも、接辞強調形における強調辞の相補分布の事実(2.5.2 節および 5.2.1 節参照)などから QV 構造の非文法性が窺える（黒田 1967, Itô and Mester 1995a, Lombardi 1998）。
 11. 本章では有標項と無標項を示す場合に、不等号 (>) の左辺に無標項を記し、右辺に有標項を記す。たとえば「A>B」とある場合には「A」が無標項で「B」が有標項である。
 12. ここで言う「現われやすさ」とは、語彙調査の結果(15)における「支持率」と読み替えて差し支えない。
 13. 注 11 で規定したように、「HL>LH」および「非 QV>QV」との表記はいずれも不等号 (>) の左辺に位置する構造（HL, 非 QV）が無標項であることを示す。

参考文献

- 秋永一枝 (1998) 「共通語のアクセント」NHK 放送文化研究所(編) 『新版 NHK 日本語発音アクセント辞典』 東京: NHK 出版, 174-221 (付録)
- 天沼 寧 (1974) 「擬音語・擬態語について」 天沼寧(編) 『擬音語・擬態語辞典』 東京: 東京堂出版, 3-62 (巻頭)
- Chomsky, Noam and Morris Halle (1968) *The Sound Pattern of English*. New York: Harper and Row.
- 藤田保幸 (1999) 「引用構文の構造」『国語学』 198: 1-15.
- Goldsmith, John (1976) *Autosegmental Phonology*. Ph.D. dissertation. MIT.
- Goldsmith, John (1991) *Autosegmental and Metrical Phonology*. Cambridge, Mass.: Blackwell.
- Hamano, Shoko (1986) *The Sound-Symbolic System of Japanese*. Ph.D. dissertation, The University of Florida.
- Hamano, Shoko (1998) *The Sound-Symbolic System of Japanese*. Stanford, CA: CSLI Publications and Tokyo: Kurosio.
- Haraguchi, Shosuke (1977) *The Tone Pattern of Japanese: An Autosegmental Theory of Tonology*. Tokyo: Kaitakusha.
- Haraguchi, Shosuke (1991) *A Theory of Stress and Accent*. Dordrecht: Foris.
- Hayes, Bruce (1989) Compensatory Lengthening in Moraic Phonology. *LI* 20: 253-307.
- Hayes, Bruce (1995) *Metrical Stress Theory: Principles and Case Studies*. Chicago: The University of Chicago Press.
- 石垣幸雄 (1965) 「擬声語・擬態語の語構成と語形変化」『言語生活』 171: 30-36.
- Itô, Junko (1986) *Syllable Theory in Prosodic Phonology*. Ph.D. dissertation, Amherst: University of Massachusetts.
- Itô, Junko (1990) Prosodic Minimality in Japanese. *CLS* 26-2: 213-239.
- Itô, Junko and Armin Mester (1992) Weak Layering and Word Binariness. *UCSC Linguistics Research Center Report* 92-09.
- Itô, Junko and Armin Mester (1995a) The Core-Periphery Structure of the Lexicon and Constraints on Reranking. In Beckman, Jill N. *et.al.* (eds.) *UMOP* 18: 181-209.

- Itô, Junko and Armin Mester (1995b) Japanese Phonology. In Goldsmith, John (ed.) *The Handbook of Phonological Theory*. Cambridge, Mass.: Blackwell, 817-838.
- Itô, Junko and Armin Mester (1996) Stem and Word in Sino-Japanese. Otake, Takashi and Anne Cutler (eds.) *Phonological Structure and Language Processing: Cross-Linguistic Studies*. Berlin and New York: Mouton de Gruyter, 13-44.
- Itô, Junko, Yoshihisa Kitagawa and Armin Mester (1996) Prosodic Faithfulness and Correspondence: Evidence from a Japanese Argot. *JEAL* 5: 217-294.
- 神保 格 (1935) 『国語音声学』 東京: 明治図書.
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』 東京: ひつじ書房.
- Kager, René (1989) *A Metrical Theory of Stress and Destressing in English and Dutch*. Dordrecht: Foris.
- 笥 壽雄 (1993) 「一般語彙となったオノマトペ」 『言語』 22-6: 38-45.
- 川上 泰 (1957) 「準アクセントについて」 『国語研究』 7: 44-60. (國學院大学)
- 金田一春彦 (1978) 「擬音語・擬態語概説」 浅野鶴子(編) 『擬音語・擬態語辞典』 東京: 角川書店, 3-26.
- 金田一春彦・秋永一枝 (2001) 『新明解日本語アクセント辞典』 東京: 三省堂, 1-106 (付録)
- Kiparsky, Paul (1982) Lexical Phonology and Morphology. Yang, I-S.(ed.) *Linguistic in the Morning Calm*. Seoul: Hanshin, 3-91.
- Kiparsky, Paul (1985) Some Consequences of Lexical Phonology. *Phonology Yearbook* 2: 83-138.
- 小林英夫 (1935) 「国語象徴音の研究」 『言語学方法論考』 東京: 三省堂, 96-143.
- 小林英夫 (1965) 「擬音語と擬容語」 『言語生活』 171: 18-29.
- 小嶋孝三郎 (1972) 『現代文学とオノマトペ』 東京: 桜楓社.
- 国立国語研究所 (1964) 『分類語彙表』 (国立国語研究所資料集 6) 東京: 秀英出版.
- Kubozono, Haruo (1989) The Mora and Syllable Structure in Japanese: Evidence from Speech Errors. *Language and Speech* 32: 249-278.
- 窪 蘭晴夫 (1992) 「日本語のモーラ: その役割と特性」 『日本語のモーラと音節構造に関する総合的研究(1) (文部省科学研究費重点領域研究「日本語音声」E10 班研究成果報告書)』 48-61.
- 窪 蘭晴夫 (1993) 「日本語の音節量」 『日本語のモーラと音節構造に関する総合的研究(2)

- (文部省科学研究費重点領域研究「日本語音声」E10 班研究成果報告書)』72-101.
- 窪菌晴夫 (1995) 『語形成と音韻構造』 東京: くろしお出版.
- 窪菌晴夫 (1996) 「東京方言の複合名詞アクセントと音節構造」『国語学会平成 8 年度春季大会予稿集』 125-132.
- Kubozono, Haruo. (1996) Syllable and Accent in Japanese: Evidence from Loanword Accentuation. 『音声学会会報』 211: 71-82.
- Kubozono, Haruo (1997) Lexical Markedness and Variation: A Nonderivational Account of Japanese Compound Accent. *WCCFL* 15: 273-287.
- 窪菌晴夫 (1998) 「モーラと音節の普遍性」『音声研究』 2-1: 5-15.
- Kubozono, Haruo (1998) Some Asymmetries in Japanese Phonology. ms., University of California at Santa Cruz.
- 窪菌晴夫 (2000) 「日本語の語彙と音節構造 – 「女王」は「じょおう」か「じょうおう」かー」『日本語研究』 20: 1-18. (東京都立大学)
- Kubozono, Haruo (2000) The syllable as a Unit of Prosodic Organization in Japanese., ms. Kobe University. (To appear in Fery, F. and R. van der Vijver (eds.) *Structure and Typology of the Syllable*. Cambridge University Press.)
- 窪菌晴夫・伊藤順子・アーミン＝メスター (1997) 「音韻構造から見た語と句の境界: 複合語アクセントの分析」音声文法研究会(編)『文法と音声』 東京:くろしお出版, 147-166.
- 窪菌晴夫・太田聡 (1998) 『音韻構造とアクセント』 東京: 研究社.
- 黒田成幸 (1967) 「促音および撥音について」『言語研究』 50: 85-99.
- Lombardi, Linda (1998) Evidence for MaxFeature Constraints from Japanese. ms., University of Maryland, College Park. [ROA-247-0298]
- McCarthy, John and Alan Prince (1986) Prosodic Morphology. Waltham, Mass.: Brandeis University ms. (Final version: McCarthy and Prince (1996) Prosodic Morphology 1986.)
- McCarthy, John and Alan Prince (1990) Foot and Word in Prosodic Morphology: The Arabic Broken Plural. *NLLT* 8: 209-283.
- McCarthy, John and Alan Prince (1993) Generalized Alignment. *Yearbook of Morphology* 1993. Dordrecht: Kluwer, 79-153.
- McCawley, James D (1968) *The Phonological Component of a Grammar of Japanese*. The Hague: Mouton.

- McCawley, James D (1978) What is a Tone Language? In Fromkin, Victoria (ed.) *Tone: A Linguistic Survey*. New York: Academic Press, 113-131.
- Mester, Armin (1990) Patterns of Truncation. *LI* 21: 478-485.
- Mester, Armin (1994) The Quantitative Trochee in Latin. *NLLT* 12: 1-61.
- Mester, Armin and Junko Itô (1989) Feature Predictability and Underspecification: Palatal Prosody in Japanese Mimetics. *Language* 65: 258-298.
- 宮田幸一 (1948) 『日本語文法の輪郭』 東京: 三省堂.
- Murata, Tadao (1990) AB Type Onomatopes and Reduplicatives in English and Japanese. In *Linguistic Fiesta: Festschrift for Professor Hisao Kakehi's Sixtieth Birthday*. Tokyo: Kuroshio Shuppan, 257-272.
- 村田忠男 (1993) 「日英語の AB 型オノマトペ・重複形・等位構造表現の関係」 筧壽雄・田守育啓(編) 『オノマトピア ―擬音・擬態語の楽園―』 東京: 勁草書房, 101-125.
- 村田忠男 (2001) 「笛はなぜ「ひゃらぴー」と鳴らないのか ―日英 AB 型オノマトペの音声条件を中心に―」 『言語』 30-9: 58-63.
- 那須昭夫 (1995) 「オノマトペの形態に要求される韻律条件」 『音声学会会報』 209: 9-23.
- 那須昭夫 (1996) 「オノマトペの派生と適格性条件」 音韻論研究会(編) 『音韻研究 ―理論と実践―』 東京: 開拓社, 95-98.
- 那須昭夫 (1999a) 「重複形オノマトペの強調化と促音の位置」 *KLS* 19: 308. (関西言語学会)
- 那須昭夫 (1999b) 「重複形オノマトペの強調形態と有標性」 『日本語・日本文化研究』 9: 13-25. (大阪外国語大学日本語講座)
- 那須昭夫 (1999c) 「オノマトペにおける有声化と[p]の有標性」 『音声研究』 3-3: 52-66.
- 那須昭夫 (2001a) 「並列語アクセントの「ゆれ」と計算」 第 26 回関西言語学会.
- 那須昭夫 (2001b) 「オノマトペの語形成とアクセント」 『日本語・日本文化研究』 11: 9-24. (大阪外国語大学日本語講座)
- Nespor, Marina and Irene Vogel (1986) *Prosodic Phonology*. Dordrecht: Foris.
- 西尾寅弥 (1988) 『現代語彙の研究』 東京: 明治書院.
- Oda, Hiromi (2000) An Embodied Semantic Mechanism for Mimetic Words in Japanese. Ph.D. Dissertation, Indiana University.
- 荻阪直行 (1999) 『感性のことばを研究する ―擬音語・擬態語に読む心のありか―』 東京: 新曜社.

- 大坪併治 (1982) 「象徴語彙の歴史」 森岡健二・宮地裕・寺村秀夫・川端善明(編)『講座日本語学 4 語彙史』東京: 明治書院, 228-250.
- 大坪併治 (1989)『擬声語の研究』東京: 明治書院.
- Poser, William (1984a) Hypocoristic Formation in Japanese. *WCCFL* 3: 218-229.
- Poser, William (1984b) The Phonetics and Phonology of Tone and Intonation in Japanese. Ph.D. dissertation, MIT.
- Poser, William (1990) Evidence for Foot Structure in Japanese. *Language* 66: 78-105.
- Prince, Alan (1980) A Metrical Theory for Estonian Quantity. *LI* 11: 511-562.
- Prince, Alan (1990) Quantitative Consequences of Rhythmic Organization. *CLS* 26-2: 355-398.
- Prince, Alan and Paul Smolensky (1993) *Optimality Theory: Constraint Interaction in Generative Grammar*. Technical Report #2. Rutgers Center for Cognitive Science. Rutgers University. (To appear, The MIT Press).
- 佐藤大和 (1989) 「複合語におけるアクセント規則と連濁規則」 杉藤美代子(編)『講座日本語と日本語教育 2 日本語の音声・音韻 (上)』東京: 明治書院, 233-265.
- Selkirk, Elisabeth (1980) The Role of Prosodic Categories in English Word Stress. *LI* 11: 563-606.
- Selkirk, Elisabeth (1984) *Phonology and Syntax: The Relation between Sound and Structure*. Cambridge, MA and London, England: The MIT Press.
- Selkirk, Elisabeth (1986) On Derived Domains in Sentence Phonology. *Phonology* 3: 371-405.
- 柴田 武 (1994) 「外来語におけるアクセント核の位置」 佐藤喜代治(編)『国語論究 4 現代語・方言の研究』東京: 明治書院, 388-418.
- Siegel, Dorothy (1974) Topics in English Morphology. Ph.D. dissertation. MIT.
- Spaelti, Philip (2001) Mimetics and the Structure of the Japanese Lexicon. MOT 2001 (Meikai Optimality Theory Workshop 2001), Meikai University.
- 鈴木雅子 (1984) 「擬声語・擬音語・擬態語」 鈴木一彦・林巨樹(編)『研究資料日本文法 4』東京: 明治書院.
- 玉村文郎 (1979) 「日本語と中国語における音象徴語」『大谷女子大國文』9: 216-208 (大谷女子大学)
- 玉村文郎 (1989) 「語形」玉村文郎(編)『講座日本語と日本語教育 6 日本語の語彙・意味(上)』東京: 明治書院, 23-51.
- 田守育啓 (1983) 「オノマトペ ―音韻形態と語彙性―」『人文論集』19-2: 63-85. (神戸商科

大学経済研究所)

田守育啓 (1991) 『日本語オノマトペの研究 (神戸商科大学研究叢書 XL)』 神戸商科大学
経済研究所.

田守育啓・ローレンス＝スコウラップ. (1999) 『オノマトペー形態と意味ー』 東京: くろ
しお出版.

田中章夫 (1978) 『国語語彙論』 東京: 明治書院.

田中真一 (1999) 「日本語の音節と4拍のテンプレート」 音声文法研究会(編) 『文法と音声
II』 東京: くろしお出版, 261-290.

Tateishi, Koichi (1989) Theoretical Implications of Japanese Musicians' Language. *WCCFL* 8:
384-398.

Waida, Toshiko (1984) English and Japanese Onomatopoeic Structures. 『女子大文学 (外国文
学篇)』 36: 55-79. (大阪女子大学英文学科)

和田 實 (1969) 「辞のアクセント」 『国語研究』 29: 1-20. (國學院大学)

山梨正明 (1988) 『比喩と理解』 東京: 東京大学出版会.